昇殿藏人雜色

□、從五位上藤原成周、花山院御給、其次被定昇殿、侍中、雜色、藏人少内記源至賢、雜色、文章生源□、雜色、昇殿藤原廣業、雜色藤原周望、藤原頼經、右大臣參上

位記

敍人簿、復陣之後、□（下カ）給大内記齊（紀）名、仰可作位記由、宮御給二通、一通者當年御給、加封、書名一宇、藤原明子、一通者寛和二年御即位御給、未給、惟宗義子、同下著、但不加封、右大臣（伊周）、内大臣（顯光、公季）、大納言二人、中納言二人、懷、參議五人、安、扶、公、誠、俊、於仗座定受領功過、深更退出、

受領功過定

位記請印入眼

十六日、丁巳、□依右府命、擬行女敍位位記請印事、先奉入眼位記於右府直廬、此間日漸暮、欲及御出、仍令申事由、□付停請印事、明日可行也、

女踏歌出御

十六日、丁巳、踏歌節會、

〔日本紀略〕一院　正月十六日、丁巳、女踏歌、

〔小右記〕正月十六日、丁巳、○略中　申刻出御、□右大臣（道長）爲内辨、節會如恆、右大將顯光（藤原）□返、授盞之後、又致拜禮、大失禮、諸卿側目、□終事了、見參上達部、右大臣、□公、中納言四人、時、懷、忠、余（實資）、參議五人、安、惟、公、誠、俊、□、國、内大臣伊周及ビ權中納言藤原隆家、從者ヲシテ、花山法皇ヲ御在所ニ射奉ラシム、

〔日本紀略〕一院　正月十六日、丁巳、○略中　今夜花山法皇密行故太政大臣（恆光）

伊周多クヲ兵ヲ養フ

檢非違使等董定及ビ致光ノ宅ヲ檢スル

京内及ビ山々ヲ搜檢セシム

御童子二人ヲ殺害ス

德公家之間、内（内裏）大臣并中納言隆家從人等、奉射法皇御在所、

〔小右記〕正月十六日、丁巳、○略中　歸家之後、右（道長）府消息云、花山院□（右兵衛）□尉致（遣）光及兄弟等宅、有隱居精兵之聽、遣廷尉可也（被檢也カ）、被檢難云、五位以上宅、不奏事由、直以可（不脫カ）被檢、又自余疑所々被檢者、件事似有事、□董定朝臣者、内大臣家司也、致光又在彼宅□也、内府多養兵云々、承仰退出、詣右府、即歸□、仰權佐孝道朝臣及檢非違使等、入夜廷尉等歸來云、搜檢董定宅、董定朝臣向故入道三位（遵）清延葬送所、但搜檢彼宅、有八人者、弓箭二腰、則捕得者、參内可令奏聞之由仰了、又搜檢致光、無致光、隣住云々、召使未來之前、七八人兵逃在亡（衍カ）了者、件所々、佐以下皆悉馳向、事頗可驚多、是依京内不靜、所被行歟、京内及山々、日々可搜檢之由、仰官人等了、

〔扶桑略記〕二十七　一條天皇上　長德二年丙申四月廿四日、○中略、伊周、隆家左遷ノコトニカヽル、件左遷事、元者去正月十六日、花山院移幸故恆德公之家、内大臣又到彼家、於是内大臣共人等、射花山院御在所、乃事起是矣云々、

〔百練抄〕一四　一條天皇　長德二年正月十六日、内大臣、權中納言隆家、於恆德公一條第、奉射華山院、御童子二人被殺害、取首持去云々、

二月五日、内大臣家司董定、幷同家人右兵衞尉致光宅、養置兵衞佐、廷尉令追捕之、則捕得參内、

伊周爲光ノ三女ニ通フ

〔榮華物語〕四見はてぬゆめ　一條殿（爲光）の殿の女君たちは、たかつかさなる所にそすみ給ふに、内大臣（伊周）とのしのひつゝおはしかよひけり、寢殿のうへとは三君をそきこえける、御かたちも心もやむ事なふおはすとて、ちゝおとゝいみしうかしつきたてまつり給ひき、女子（隆子）はかたちをこそといふ事にてそ、かしつききこえたまひけるそのしん殿の御かたに、内大臣殿はかよひたまひけるになんありける、かゝる程に、花山院この四君の御もとに御ふみなと奉り給ひ、けしきたゝせ給けれと、けしからぬ事とて聞いれ給はさりけれは、だひ〳〵御みつからおはしましつゝ、いまめかしうもてなさせ給けることを、内大臣殿は、よも四君にはあらし、この三君の御もとならんと、をしはかりおほいて、わか御はらからの中納言（隆家）に、此事こそやすからすおほゆれ、いかゝすへきと聞えたまへは、いてたゝをのれにあつけ給へれ、いとやすき事とて、さるへき人二三人くし給ひて、この院のたかつかさとのより、月いとあかきに、御むまに

花山院四女ニ通ハセ給フ

伊周ノ誤解

伊周隆家ニ謀ル

てかへらせ給けるを、をとしきこえんと覺しをきてける物かゆみやといふものしてとかくし給けれは、御そのそてよりやはとをりにけり、さこそいみしうおゝしうおはします院なれと、ことかきりおはしませは、いかてかはおそろしとおほさゝらん、いとわりなふいみしとおほしめして、院にかへらせ給て、ものもおほえさせ給はてそおはしましける、これをおほやけにも、殿（道長）にもいとよう申させ給つへけれと、ことさまのもとよりよからぬ事のおこりなれは、はつかしうおほされて、このことちらさし、後代のはち也としのはせ給けれと、とのにも、おほやけにもきこしめしつけて、おほろけならぬ事といみしう思され、はや世にかくれなくて、おほかた此比の人のくちに入たる事は、これになむありける、太上天皇はよにめてたきものにおはしませと、この院の御心をきての、おもりかならすおはしませはこそあれ、さはありなから、いと〳〵かたしけなくおそろしき事なれは、此事かくをとなくてはよもやましと、よの人いひ思たり、

法皇祕シ給フ

世評ニ上ル

隆家家人ヲシテ法皇ヲ威嚇セシム

矢御衣ノ袖ヲ通ス

〔愚管抄〕三一條　長德二年四月ニ、伊周大臣ト、ヲトヽノ隆家トハ左遷セラレテ、内大臣ハ太宰權帥、中納言タカイエハ出雲權守トナリテ、ヲノ〳〵ナ

カサレニケルコトハ、花山院ヲ射マイラセタリケルナリケリ、ソノ事ノヲコリハ、法住寺太政大臣爲光ハ、恆德公トソ申、コノ人ニ三人ノムスメアリケリ、一女ハ花山院御道心ヲコサセマイラスル人ニテ、ウセ給ヒテノチ道心サメサセ給テ、ソノ中ムスメニカヨハセ給ケルニ、又三ノムスメヲ伊周大臣ハカヨイケルヲ、コノ院ノヤカテコノ三ノムスメノ方ヘモヲハシマスト人ノ云ケルヲ、ヤスカラス思テ、弟ノ隆家帥ハ十六ニテアリケルニ、イカヽセンスル、ヤスカラスト云ケル程ニ、隆家ノワカクイカラキヤウナル人ニテ、ウカヽヒテ箭ヲモチテ射マイラセタリケレハ、御衣ノ袖ヲツイチニイツケタリケリ、アヤウナカラニケサセ給テ、コノ事ヲハヒシトカクシテアリタリケルヲ、ヤウ〳〵披露シテ、サホトノコトイカテカサテアルヘキトテ、沙汰トモアリテ、コノ事ハアリケリト□□□□タリ、サレト小野宮ノ記ニハ、ヤカテソノ夜ヨリキ□□□□十三日除目ニ、内大臣ノ圓座トラレタリケリ、尤可然ト時ノ人云ケリ、コマカニソノ日記ニハ侍レハ、ソレヲミルヘキナリ、コノトカナレト、御堂ノ御アタ氣カナト人思ヒタリケレハ、返々イタマセ給ケリ、

（法皇爲光ノ二女ニ通ハセ給フ）

（正月ノ除目ニ伊周ノ圓座ヲ除ク）

○明法博士ヲシテ、伊周、隆家ノ罪名ヲ勘セシムルコト、二月十一日ノ條ニ見ユ、

十七日、戊午、射禮、

〔日本紀略〕一條院　正月十七日、戊午、射禮、

十八日、己未、射遣、

廿日、辛酉、歩射、

○歩射ノコト、便宜合敍ス、

（射遣）

（歩射）

二十三日、甲子、太政官及ビ左右辨官ノ廳直抄符ノ史生等ヲシテ、勤功年勞ニ依リテ、内外官主典ニ任ゼシム、

〔類聚符宣抄〕七　辨官史生可任内外官事

應左右史生等廳直抄符勤功成績者、幷年勞次第輩、拜任内外官主典事、

右太政官、幷左右辨官廳直抄符史生等、依其勤功、停任外國、可永拜任内官主典之由、去永延三年五月十七日下宣旨已了、而廳直抄符者、不必一勞、其外史生年勞已積、給官無期、參議左大辨平朝臣惟仲傳宣、右大臣（顯光）宣、奉勅、宜左右史生等、給官之時、任年勞次第、廳直抄符者、依勤功、拜内官主典、年勞恪勤之輩、依

（官宣旨）

次第、任外國二分者、

長德二年正月廿三日　左大史兼和泉守多米朝臣國平奉

二十五日、丙寅、縣召除目、

〔公卿補任〕六

大納言從二位藤顯光　右大將、正月、(廿五イ)按察使、

參議從三位藤時光　大藏卿、正月廿五備前權守、

正四位下藤公任　左兵衞督、皇后宮大夫、近江守、正月、讚岐守、

從四位下源俊賢　右兵衞督、正月廿五伊豫權守、

〔公卿補任〕六長保三年　參議正四位下藤行成　同(長德)二正廿五式部權大輔、

〔公卿補任〕六長保四年　非參議從三位藤兼隆　廿五(長德二正)阿波權守、廿九日禁色、

見信經記、

〔公卿補任〕六寬弘元年　參議正四位下藤正光　長德二三(正力)、備中權守、

〔公卿補任〕六寬弘八年　參議從四位下藤通任　長德二正廿五東宮權亮、

〔公卿補任〕七長和二年　參議正四位下藤公信　同(長德)二正、任讚岐介、

〔外記補任〕二永祚元年　明法博士兼帶大外記始之歟事　大外記外從五位下國雅重　長德二年正月任薩摩(守脫力)

禁色

〔外記補任〕二

大外記多治雅清　正月任、

改林爲紀

少外記林相門　正月任、

權少外記能登守成　元文章生、年月日越前掾、○中略　二月正月(年力)當任(任當力)職、今年式部錄文、相竝任外記史、

〔長德二年大間書〕

大間書

神祇官

太政官

太政官

左大臣

□(大)外記正六位上多治眞人雅清

□(權)□(少)□(外)(記)正六位上能登連守成

□辨

右大史正六位上物部宿禰邦忠

右少史正六位上和氣朝臣元倫

中務省

中務省

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

少丞正六位上藤原朝臣公則復任、

内舍人正六位上御野宿禰實信皇后宮當年給二分代、

内舍人正六位上三島眞人忠信右大臣正暦五年給二分代、

内舍人正六位上藤原朝臣元文東三條院臨時御給、

監物

主典

主典

大主鈴

大主鈴

太皇大后宮職

太皇大后宮職

□□(學士)從五位上大江朝臣雅致

皇后宮職

權少進

中宮職

大夫

大舍人寮

圖書寮

内藏寮

縫殿寮

陰陽寮

權曆博士

陰陽師

内匠寮

式部省

大丞正六位上源朝臣濟政

少丞正六位上藤原朝臣有家

少丞正六位上菅原朝臣宣義

大錄

少錄

大學寮

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

博士

直講

直講

明法博士

治部省

少丞正六位上大江朝臣通直（前文章得業生、）

雅樂寮

玄蕃寮

諸陵寮

民部省

權大輔從四位下藤原朝臣行成

大丞正六位上清原眞人爲信

少丞正六位上藤原朝臣貞轉

主計寮

主税寮

兵部省

大錄

隼人司

刑部省

少錄正六位上三島眞人忠賴（東三條院被申、）

判事

囚獄司

佐

大藏省

少丞正六位上平朝臣行忠

少錄正六位上海宿禰敬忠（復任、）

織部司

宮內省

少丞正六位上藤原朝臣貞仲（文章生、散位勞、）

大膳職

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

木工寮
大炊寮
權少屬
主殿寮
權少屬
典藥寮
大屬正六位上穴太宿禰豐理 復任、
侍醫
醫師
針師
掃部寮
正親司
少令史
內膳司
造酒司

令史
采女司
主水司
彈正臺
忠正六位上藤原朝臣右賢
少忠正六位上大江朝臣忠孝 文章生、復任、
左京職
亮
東市司
右京職
西市司
東宮
學士
春宮坊
大夫正三位藤原朝臣公季 兼、

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

亮從四位下藤原朝臣通任

少進

舍人監

主膳監

主藏監

主殿署

主上監（ホカ）

主馬署

伊勢齋宮

齋宮寮

齋院司

齋院司

長官從五位下源朝臣爲政（理）

修理職

修理職

亮正六位上橘朝臣則光

竿師

權大工

勘解由使

鑄錢司

判官

判官

權判官

主典

主典

山城國

權介（ヰイ）

大掾正六位上惟宗朝臣正明 進物所執事、○正明、除目大成抄、正時ニ作ル、

權少掾

權大目正六位上江沼宿禰富基 尙侍藤原朝臣當年給、

權少目從七位上海宿禰正忠 華山院當年御給、

大和國

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

權介正六位上藤原朝臣忠節停東三條院去年臨時御給平好光改任、

大掾正六位上上宿禰保節皇后宮當年御給、

權大掾正六位上河內宿禰尙親民部卿藤原朝臣永延元年給二合、

權大目正六位上多治眞人禰福（彌力）停左大辨平朝臣正曆四年給次田近江、改任、（秋力）

河內國

介

權介從五位下藤原朝臣輔政

少掾正六位上秦忌寸直方停冷泉院應和元年御給備中權掾越智惟國改任、

權大掾正六位上大秦連成生停故敏子內親王天元二年巡給二合長谷部諸光改任、

權大目

少目

權少目

和泉國

權掾正六位上御立宿禰永輔華山院去年御給、

權目正六位上宗岡朝臣滋忠大舍人番長、

攝津國

權守

大掾正六位上大江朝臣孝信御厨所勞、

權大目從八位上淸原眞人利明奏時、

權大目

權大目正六位上友主（ヾ）弘賴內竪所別籍、

伊賀國

權掾正六位上依智秦宿禰正賴右衞門督藤原朝臣當年給二合、

權目

伊勢國

介正六位上都努朝臣匡賴停正曆五年臨時內給藤原忠節改任、

少掾正六位上壹志公元秀（秋力）中務卿親王正曆三年巡給二合大鹿德益改任、

權大目正六位上秦宿禰吉樹畫（ヵ）所奏、

權少目

志摩國

長德二年正月二十五日

目

權目

尾張國

守正四位下藤原朝臣理兼

權守

權介正六位上長谷部宿禰岡具 停永延二年臨時内給源度改任、

權大目正六位上尾張宿禰正茂 停正暦二年内給市井清光山城少目改任、

參河國

守從五位下藤原朝臣擧直

介正六位上穴太宿禰季保 冷泉院臨時御給、

權掾正六位上布勢宿禰時枝 中務卿親王巡給、

大目正六位上文室眞人興茂 侍從藤原朝臣當年御給、

權少目

遠江國

權介從五位下平朝臣輔國

尾張

參河

遠江

權掾

少目

權大目

權少目

駿河國

權守

掾正六位上笠朝臣高陳 停内給正暦五年宗岳時改任、

掾正六位上河内宿禰永賴 太宰帥親王巡給、

權掾

少目

權少目

伊豆國

掾正六位上船宿禰豐光 停冷泉院正暦四年御給津奉親改任、

目

權目

長德二年正月二十五日

駿河

伊豆

長德二年正月二十五日

甲斐國

掾正六位上坂本朝臣廣茂（停脫カ）故大納言天慶六年給二合三國重信改任、

權掾正六位上大春日朝臣遠明内舍人、

權大目

權少目

相模國

介從五位下藤原朝臣輔久（公イ）

少目

權少目

武藏國

守從五位下藤原朝臣寧親

權介

介正六位上清原眞人連方停冷泉院正暦五年臨御給凡惟時改任、

權大掾正六位上幡（播）美宿禰相擧内舍人、

權少掾正六位上佐伯宿禰得信停佐（紀）比寺天元四年給村（□）貞信改任、

權少目

安房國

守從五位下藤原朝臣實輔大舍人、

權掾正六位上藤原朝臣元成散位、

權目

上總國

大守

掾正六位上伊勢朝臣延清停彈正尹親王正暦四年給紀乘吉（改脫カ）任、

權少掾

大目

下總國

介正六位上笠朝臣季春停冷泉院安和二年内給藤原基高改任、

權大掾從八位上大藏朝臣爲基内竪、本籍、

少掾

大目

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

少目

權少目

常陸

常陸國

大守

權介從五位下藤原朝臣惟文

權大掾正六位上藤原朝臣有延内竪、散位勞、

少掾

權少掾正六位上委文宿禰保時中宮當年御給、

近江

近江國

介從四位上源朝臣則忠

權介從五位上藤原朝臣重家兼、

大掾正六位上紀朝臣忠遠停東三條院正暦三年御給、良峯惟國改任、

權大掾正六位上藏垣宿禰宣雅停冷泉院正暦五年給、清原厚高改任、

權正六位上紀朝臣守信停正暦六年内給、巨勢重國改任、

少掾正六位上安倍朝臣公輔停東三條院正暦四年御給、多治國章改任、

大目正六位上利部宿禰信正左衛門督藤原朝臣當年給、

少目正六位上日邊宿禰吉常大舍人本籍、

美濃

美濃國

權大掾正六位上葛木宿禰滋見停贈太政大臣去年給、二合橘重隣改任、

少掾外從五位下各務宿禰隆成東三條院當年御給、

權少掾正六位上中原朝臣盛光明法擧、

大目正六位上伊賀臣秋正右近中將藤原朝臣當年給、

權大目正六位上文室眞人滋兼内竪、天暦籍、

少目正六位上物部宿禰時成太皇大后宮當年御給、

飛驒

飛驒國

守正六位上大春日朝臣遠晴

掾

權掾

目

權目

長德二年正月二十五日

信濃國
大目
權少目
上野國
大守
權大掾正六位上伴宿禰理來停正曆二年內給攝津權大掾紀節延改任、
大目
權大目
下野國
大掾
權大掾
陸奥國
按察使從二位藤原朝臣顯光兼、
記事
權少目

博士
權博士
醫師
權醫師
陰陽師
出羽國
掾
權掾正六位上藤原朝臣時賴太皇大后宮內豎籍、
大目正六位上播磨宿禰豐成停中納言源朝臣正曆五年給備後大目清額改任、
權大目
少目
若狹國
權掾正六位上巨勢朝臣爲延華山院當年御給、
權目
目

越前

越前國

守從四位上源朝臣國盛

權守

權介正六位上藤原朝臣兼濟（停東三條院正曆五年御給宮道佐平改任、）

少掾（ママ）正六位上新井宿禰爲淵（一品內親王當年給、）

權大掾（ママ）正六位上安倍朝臣晴忠（停故敏子內親王天祿元年給宗我如時改任、）

大目正六位上宇自可宿禰春利（左大辨平朝臣正曆三年給、）

少目

權少目

加賀

加賀國

權介從五位上惟宗朝臣允亮（兼、）

大目

少目

權少目

能登

能登國

守從五位上源朝臣方國

權守

權掾正六位上菅原朝臣正具（校書殿本籍、○正具、除目大成抄、正眞ニ作ル、）

目

越中

越中國

少目從七位上三枝部連爲賴（大藏卿藤原朝臣當年給、）

越後

越後國

權介正六位上葛原朝臣延年（停正曆五年內給石栗延藤改任、）

權大目

佐渡

佐渡國

目

權目

丹波

丹波國

介從五位上淸原眞人爲時（兼、）

長德二年正月二十五日

權掾正六位上笠朝臣吉仁（太皇大后宮當年御給、）

權掾正六位上笠朝臣顯親（停右大臣去年給二合周防掾紀秀行改任、）

權大目正六位上長我宿禰忠永（故大納言道頼卿正暦二年給、）

權少目

丹後國

介從五位下藤原朝臣弘道（兼、）

掾正六位上清原眞人長忠（停右衛門督藤原朝臣永祚二年給二合武藏權少掾藤原有堪改任、）

目正六位上清海首本相（右兵衛督源朝臣去年給、）

權目

但馬國

權守從五位下平朝臣行義

權介正六位上河部宿禰佐兼（停正暦六年臨時內給品治北雄〻改任、）

權掾正六位上金見宿禰隆光（東三條院去年御給、）

大目

因幡國

介正六位上倉門伊美吉時滿（停東三條院正暦四年臨時御給、）

權掾正六位上當麻眞人秀忠（竿道藤原朝臣陳任改任、）

大目

少目

權少目

伯耆國

掾正六位上船朝臣嘉忠（朱雀院永觀二年御給、）

大目正六位上物部連爲治（停故入道左大臣安和二年給加賀目宗岳高通（兼イ）改任、）

權大目

少目

權少目

出雲國

權介正六位上神田宿禰用富（故保子內親王天元三年臨時給日置公改任、）

介正六位上勾宿禰茂郅（停皇后宮正暦五年臨時御給安陪秀明改任、）

權掾

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

大目

權大目

少目

石見

石見國

權掾

權掾正六位上多治部宿禰有信停故輔子內親王天祿三年巡給二合日下部雅量改任、

權目

隱岐

隱岐國

權掾

目

播磨

播磨國

權大掾正六位上三國宿禰眞人輔理右大臣當年給二合所任、

少掾正六位上刑部宿禰宣憲停故留子內親王貞元元年紀守憲改任、

權少掾正六位上太宿禰秀明停大藏卿藤原朝臣依獻五節天元三年給二合日置實輔改任、

權少掾正六位上安陪朝臣惟孝停彈正親王正曆六年給二合百濟清重改任、巡

少掾正六位上播磨造延行臨時內給、

少掾正六位上菅原朝臣豐信停故永平親王永觀年(ヽヽ)巡給二合漢部時數改任、

權少掾

權大目正六位上凡河內宿禰成光(大納言)大帥藤原朝臣正曆五年給、

權少目從七位上民宿禰利明右大將藤原朝臣當年給、

美作

美作國

權守從四位上源朝臣伊行兼、

介從五位下大中臣朝臣輔親

權介

權掾

大目

權大目

少目

權少目

備前

備前國

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

權守從三位藤原朝臣時光兼、

權掾

少目正六位上三宅宿禰利則停修理權大夫藤原朝臣正曆二年給內藏安永改任、

備中國

權大目正六位上弓削朝臣有方當年內給、

權掾正六位紀朝臣時成停冷泉院正曆二年御給□良胤改任、

備後國

介從五位下源朝臣方理兼、

權大目

少目

權少目正六位上清原宿禰遠賢校書殿執事、

安藝國

權掾正六位上大中臣朝臣良廉校書殿頭、

大目

權大目

少目

周防國

權掾

掾

權少目

長門國

權守從五位下大江朝臣尊基

掾正六位上藤原朝臣仲廉勸學院學、

目

權目

紀伊國

權掾正六位上桑原宿禰茂國大納言藤原朝臣當年給依獻五節二合、

大目正六位上紀朝臣利廉左大辨平朝臣去年給、

權大目正六位上紀朝臣利兼皇后宮去年御給、

少目從七位上越智直利光停右大將藤原朝臣天元二年給筑後少目粟田光安改任、

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

淡路國

守從五位下藤原朝臣爲時

掾

權掾

權目正六位上井上宿禰惟方（停修理權大夫藤原朝臣正曆四年給多治比茂助改任、）

目

權目

阿波國

權守正五位下藤原朝臣兼隆

介正六位上御長宿禰好堪（臨時內給、）

權介從五位下菅原朝臣敦頼

權掾正六位上藤原朝臣時堪（勸學院學、）

大目

權大目

權少目

讃岐國

守從五位下藤原公信

介

權掾正六位上紀朝臣公則（停東三條院正曆五年臨時御給、山背師方改任、）

權掾正六位上陵朝臣久時（復任、）

權少目正六位上津保江連正晴（停大納言朝臣永延二年給但馬大目伴常永改任、）

伊豫國

權守從四位下源朝臣俊賢（兼、）

介從四位下源朝臣宣方（兼、）

掾正六位上藤原朝臣正行（冷泉院去年御給、）

權少目

土左國

權介正六位上甘南備眞人春信（奉イ）（停永祚元年臨時內給物部義遠改任、）

權掾正六位上壬生宿禰弘重（齋院別巡給、）

掾正六位上安名宿禰春滋（停大納言藤原朝臣去年給二合伴爲行改任、）

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

權少目

大宰府

主神

大監正六位上平朝臣中方文章生、

權大監正六位上大中臣朝臣範政內豎頭、

權少監正六位上藤原朝臣經則(修イ)勸學院別當、

少典正六位上刑部宿禰諸延停正曆二年內給美作大目坂上吉忠改任、

主工

權主工

博士

明法博士

音博士

主船

主厨

大唐通事

筑前國

權守從五位上藤原朝臣成周

介正六位上藤原朝臣量能大貳藤原朝臣請申、除目大成抄、豐ニ作ル、○量、

掾正六位上粟田宿禰基忠當年內給、

權掾正六位上清原眞人秀松(修ヵ)故輔子內親王天元々年巡給二合清原正度改任、

權大目從七位上宗形宿禰末正華山院去年御給、

筑後國

守從五位下藤原朝臣爲信

介正六位上藤原朝臣助文停式部卿親王正曆二年臨時給筑前介多治時成改任、

權介

權掾

大目正六位上伴宿禰忠宗停大藏卿藤原朝臣永祚二年給多治文好改任、

權大目

少目

權少目

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

肥前

肥前國

權守從□位下橘朝臣爲義

權掾

大目

權大目

權大目

少目

肥後

肥後國

權守

大掾正六位上大和宿禰延方（正イ）停正曆四年內給（武作）（ヵ）國清山城權少掾改任、

權大掾正六位上藤原朝臣光延進物所陽成院籍、

權大目

少目

豐前

豐前國

權守

豐後

介正六位上秦宿禰諸忠停正曆三年內給（ヵ）清方改任、

掾

權介正六位上藤原朝臣惟方停廣子女御天延二年臨時給建部爲松改任、

大目

權大目

少目

權少目

豐後國

權守

介從五位下坂上大宿禰維光

掾

掾正六位上播磨宿禰守信停藤原朝臣延長二年給大和是友改任、（故右大臣イ）

權掾

大目

權大目

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

日向　權少目

日向國　掾

權掾

權目

大隅　大隅國

目

薩摩　薩摩國

守從五位下國宿禰雅重

目

權目

壹岐　壹岐島

掾

權掾

對馬　對馬島

守外從五位下讃岐宿禰輔範

近衛府　左近衛府

少將

權□(左)將監正六位上藤原泰通

將曹正六位上美努宿禰秀茂

右近衛府

權□(右)將監正六位上藤原恆忠

將曹正六位上中臣朝臣嘉武

衛門府　左衛門府

右衛門府

兵衛府　少志正六位上朝原朝臣善理

左兵衛府

右兵衛府

馬寮　權少志正六位上伴朝臣義信瀧口、

左馬寮

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十五日

右馬寮

權助從五位下藤原有道

少允正六位上坂上宿禰信親復任、

兵庫寮

鎮守府

軍監

權軍監

權軍監

權軍曹

權軍曹

長德二年正月廿五日

本云、以清大外史本、書校了、

〔除目大成抄〕一親王春外國巡給一當年給

宿禰時枝中務卿親王巡給、藏人頭左大辨(花押)○塚本文書ヲ以テ補訂ス、

長德二　參河權掾正六位上布勢

可勘巡年、件親王巡給當年、

正六位上布勢宿禰時枝

望參河、美濃、美作、伊豫等國掾、

右當年巡給二合、以時枝、件國掾闕所請如件、

長德二年正月二十二日　四品行中務卿(具平)作名親王

代々親王年中交任例

長德二年　參河權掾布施時枝中務卿具平親王巡給、天曆

駿河掾河內永賴太宰帥敦道親王巡給、冷泉

〔除目大成抄〕一親王春外國別巡給

宿禰弘重齋院別巡給、當年給　長德二　土佐權掾正六位上壬生

可勘巡年、件院別巡給當年、

齋院

正六位上壬見(生)宿禰弘重

望美濃土佐等國掾、

右當年別巡給二合、以件弘重、所請如件、

長德二年正月二十五日

長德二年正月二十日　別當從三位左京大夫源朝臣作名

〔除目大成抄〕一春外國一當年給女御尙侍

長德二　近江大掾正六位上河內宿禰行業女御元子當年給脫カ

長德二　山城權大目正六位上江沼宿禰富基尙侍藤原朝臣當年給、

尙侍正三位藤原朝臣家

正六位上江沼宿禰富基

望山城權大目、

右當年給二分、以件富基、被任件國目之狀如件、

長德二年正月二十二日　散位從五位下藤原守人

尙侍給年々

絞子　長德二脫カ掾、

〔除目大成抄〕一春外國一當年給公卿

長德二、內大臣公季、左大將當年給、　兼大將之大臣任大將例

〔除目大成抄〕一春外國一當年給公卿納言

長德二　駿河大目正六位上建部宿禰忠信大納言源朝臣當年給、

公卿當年給

長德二　若狹少目從七位上安陪朝臣安國右大將藤原朝臣當年給、

〔除目大成抄〕一春外國一當年給公卿

禰武里右近中將源朝臣雅當年給、　參議　長德二　上野少目從七位上三宅宿

〔除目大成抄〕一春外國一當年給二合　納言　長德二　伊賀權掾正六位上依智秦

宿禰正賴右衞門督藤原朝臣當年給、

〔除目大成抄〕一春外國一臨時給內給　長德二　播磨少掾正六位上播磨造延行臨時內給

臨時內給

臨時內給紬書

正六位上播磨造延行

望播磨少掾、

長德二年正月廿三日

〔除目大成抄〕一春外國一臨時給諸院　長德二　參河介正六位上穴太宿禰季保冷泉

冷泉天皇臨時御給

院臨時御給、

〔除目大成抄〕一春外國一臨時給諸宮　長德二　出雲權介正六位上當麻朝臣世保

春宮臨時御給

春宮臨時御給、職字非常事、

〔除目大成抄〕一春外國一臨時給納言　雖五位、依爲人給、有尻付例

東三條院御給

外階　長德二　美濃少掾各務隆成東三條院當年御給、

同　備前權介茨田忠式同、

朱雀天皇及ビ圓融天皇女御給冷泉天皇去年御給

〔除目大成抄〕一未給春外國諸院一　在位之間內給、脫履之後被任例

長德二　伯耆掾正六位上船朝臣嘉忠朱雀院永觀二年、圓融院女□□御給、雖在位時御給不注內給、

同　伊豫掾正六位上藤原朝臣正行冷泉院去年御給、

皇后宮去年御給

〔除目大成抄〕一未給春外國諸宮一

長德二　陸奥大掾正六位上宿禰（脫アラン）保重皇后宮去年御給、

同　紀伊大目正六位上紀朝臣利兼皇后宮去年御給、

五節二合

〔除目大成抄〕一未給春外國五節二合一　同二（長德）　因幡權掾正六位上佐野首貞近忠輔、

內給改任

長德二年依獻五節舞姫二合任、（元カ）

〔除目大成抄〕二名替春外國內給二　長德二　近江掾正六位上紀朝臣守信停正曆六年內給巨勢重國、改任、

〔除目大成抄〕二名替春外國諸院二　在位之間御給、遜位以後猶稱內給例

長德二、停朱雀院天元五年內給之、

〔除目大成抄〕二名國共替春外國二

冷泉天皇御給改任大臣給改

長德二　肥後大掾正六位上大和宿禰延正國停正曆四年內給武佐國隣山城權少掾、改任、

長德二　河內少掾正六位上秦忌朝臣（守カ）直方停冷泉院應和元年御給備中權掾越智惟國、改任、

長德二　丹波權掾正六位上笠朝臣顯親停右大臣去年給二合周防掾紀秀行、改任、

〔除目大成抄〕二三重春外國名替二　長德二　大和權介正六位上藤原朝臣忠節

停東三條院去年臨時御給、平好光、改任、

可勘合不、伴院、長德元年臨時御給、同八月、以平好光任大和權介、而任符未出、

東三條院

正六位上藤原朝臣忠節

望大和介、

右長德元年臨時御給、以佐伯光普任之、同八月以平好光任件國介、而依身病、不賜任符、仍件好光可被改任之狀、所請如件、

長德二年正月廿一日　左大臣正二位藤原朝臣

東三條院御給改任

〔除目大成抄〕二諸寺申春外國名替二　長德二　筑後權介正六位上常陸連春藤停醍醐寺永祚二年給作料尾張彥理、改任、

諸寺給

〔除目大成抄〕二諸寺申春外國名國共替二　同二（長德）　武藏權少掾正六位上佐伯朝臣

故者給　得信佐比寺修理料去年、天元四年十月所任大隅權掾村主貞信、不給任符秩滿替、

朱雀天皇御給　〔除目大成抄〕二故者春外國諸院二　長德二　美作少目正六位上播磨宿禰春本停安和二年故朱雀院內給采女有蔭、改任、

已上無注前字之例、必加故字、爲不混前官也、

太政大臣給　〔除目大成抄〕二故者春外國公卿二　同（長德）二　河內大目正六位津守連安友（上脫カ）停故太政大臣康保二年給秦貞宗（道雅）、改任、

右大臣給　同　美濃權大掾正六位上國造美茂停贈太政大臣去年給二合高木滋見（雅信）、改任、

同　伯耆大目正六位上物部連爲治停故入道右大臣安和二年給加賀目宗岳高兼、改任、

大納言給　長德二　但馬大目正六位上丸部首直高〇以下脫アラン、

四所籍內豎　〔除目大成抄〕二故者春外國公卿二　長德二春、故大納言天慶六年給、

不書名例非常事若書寫失歟、

〔除目大成抄〕三四所籍春外國內豎　長德二　太宰權大監正六位上大中臣朝臣範政內豎頭、

常陸權大掾正六位上藤原朝臣有延內豎、散位勞、

攝津權大目從八位上清原眞人利明奏時、

下總權大掾從八位上大藏朝臣爲基內豎大籍、

美濃權大目正六位上文室眞人滋兼內豎天曆籍、

攝津權大目正六位上友主弘賴內豎安和籍、

出羽權掾正六位上藤原朝臣時賴太皇大后宮內豎籍、

校書殿　〔除目大成抄〕三四所籍春外國校書殿三　長德二　安藝權掾正六位上大中臣朝臣良廉校書殿頭、

備後權少目正六位上清原宿禰遠賢校書殿執事、

能登權掾正六位上菅原朝臣正眞校書殿本所、

大舍人　〔除目大成抄〕三四所籍春外國大舍人三　長德二　和泉權目正六位上宗岡朝臣滋忠大舍人番長、

安房權掾正六位上藤原朝臣元成大舍人散位、

近江少目正六位上田邊宿禰吉常大舍人本籍、

進物所　〔除目大成抄〕三四所籍春外國進物所三　長德二　山城大掾正六位上惟宗朝臣正時進物所執事、

肥後權大掾正六位上藤原朝臣光延進物所陽成院籍、

四道學　明法　算道

〔除目大成抄〕三春外國三四道學

長德二　美濃權少掾正六位上中原朝臣盛光明法學、

同　因幡權掾正六位上當麻眞人季忠算道學、

算道

請被以學生正六位上當麻眞人秀忠、拜任年官諸國掾闕狀

右秀忠入學之後、若任年久、研精之勤空積、强仕之齡欲過、

謹撿案內、年官之巡、今年當道、望請天裁、以件秀忠、被任司馬之職、令知聚螢

之功、謹請處分、

長德二年正月十七日　正六位上行主稅權少允兼博士日下部宿禰保賴

從五位下行主稅權助兼博士三善朝臣作名

勸學院學

〔除目大成抄〕三院學春外國三

長德二　長門掾正六位上藤原朝臣仲廉勸學院學、

阿波權掾正六位上藤原朝臣時堪勸學院學、

內舍人外國

〔除目大成抄〕四內舍人春外國外國四

長德二　甲斐權掾正六位上大春日朝臣遠明內舍人、

文章生外國

武藏權大掾正六位上幡美宿禰相奉內舍人、

長德二、太宰大監、彈正忠、任京官之時、減外國員例、

〔除目大成抄〕四文章生春外國外國四

文章生、散位勞、

〔除目大成抄〕四文章生春外國散位四

長德二　越後權掾正六位上淸原眞人重倫

文書生散位勞所々奏畫所

〔除目大成抄〕四所々奏春外國畫所四

畫所奏、

長德二　伊勢權大目正六位上秦宿禰吉樹

作物所

〔除目大成抄〕四所々奏春外國作物所四

作物所勞、

長德二　但馬權少目正六位上三上眞直

御厨子所

〔除目大成抄〕四所々奏春外國御厨子所四

孝信御厨子所勞、

長德二　攝津大掾正六位上大江朝臣

東三條院臨時給

〔除目大成抄〕四請春外國四

武藤原朝臣請申、

長德二　筑前介正六位上藤原朝臣豐能六

〔除目大成抄〕六臨時給春京官一諸院

長德二　內舍人正六位上藤原朝臣允文東三條院臨時御給、

同　刑部少錄正六位上三島眞人忠順東三條院被申、

〔除目大成抄〕八文章生散位春京官三　共任例

長德二　彈正忠當職、宮內丞散位、

〔除目大成抄〕八當職文章生春京官三　長德二　彈正少忠正六位上大江朝臣忠孝

文章生、

〔除目大成抄〕八藏人春京官三　長德二　左衞門權少尉正六位上平朝臣知

信藏人、

〔除目大成抄〕八藏人春京官三　雖無本無（官脫カ）尻付例

長德二修理亮橘則光、

〔除目大成抄〕八勸學院別當春京官三　長德二　太宰權少監正六位上藤原朝臣經

房勸學院別當、

〔除目大成抄〕十當職文章生秋京官　秋不任、春任例

長德二春彈正忠大江忠孝、

〔除目大成抄〕十闕事取闕國替秩滿、不取闕、

作物所奏國請

闕ヲ取ラザル例

藏人

勸學院別當

當職文章生

御堂例共多、或取闕、或不取、其仍注一端、

不取闕例

長德二春、出羽大目播磨豐成、備後大目不取闕、停權中納言源朝臣正曆五年給備後大目津額、改任、

〔魚魯愚抄〕一所々奏　長德二　監物局主典正六位上田邊連時政、作物所、

〔魚魯愚抄〕一諸社所々奏及國請　長德□（二カ）　隱岐國權掾正六位上八木宿禰雅

光國請申、

三省奏尻付

〔魚魯愚抄〕一外記方上　京官除目三省奏尻付

○卷子本

丹波國權少目從七位上日置宿禰爲孝式部省年爵、

美作國大　目正六位上矢集連信光兵部史生勞、

備後國大　目　安曇宿禰行忠民部史生勞、

長德二年

〔魚魯愚抄〕一外記方上　三局史生尻付　長德二　大舍人寮少屬從七

○卷子本

位上竹田宿禰宣理官史生勞、

史生尻付

〔魚魯愚抄〕一外記方上　四所籍

○卷子本

內豎所

四所籍

四所籍所任人數例

七人例　頭奏時安和籍大籍散位太皇大后宮籍已上長德二年例、　天曆籍

大舍人寮

三人例　番長散位長德二年流例也、本籍外記方上四所籍

四所任國事

〔魚魯愚抄〕一〇卷子本

四所任國

内豎頭

他國例　大和越中伯和泉但摂津馬伊賀備前尾張備中甲斐周防信濃土左加賀筑前豐後太宰監長德二、已上中山抄、

〔魚魯愚抄〕二〇卷外記方下子本

他司奏

長德二　太宰府主神正六位上大中臣朝臣公義神祇奏、

神祇奏

同　左兵衛府權少志　出雲宿禰是景織部司奏、

織部司奏

〔中古歌仙三十六人傳〕（大臣）輔親卿　長德二年正月廿三日甲子、除目始、

〔日本紀略〕一院條　正月廿三日、乙丑、同、

除目竟

廿四日、乙丑、同、

廿五日、丙寅、同終、

〔敍位除目執筆抄〕長德二年正月廿三日縣召、廿五日入眼、　執筆右大臣、

〔除目大成抄〕二符春外國名二替　長德三、〇中略

若狹權掾任符

太政官符　若狹國司

正六位上巨勢朝臣爲延

右去正月廿五日任彼國權掾畢、國宜承知、至卽任用、路次之國、亦宜給食、符到奉行、

正四位下行左中辨兼東宮學士紀伊權守藤原朝臣　作名

正五位下行左大史兼和泉守多米朝臣國平

〔本朝文粹〕六申官奏狀中

大江匡衡申文

正五位下行式部權少輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、依檢非違使勞、兼任越前尾張等國守闕狀、

文章博士受領ノ例

文章博士任受領例

橘公材任近江守

巨勢文雄任越前守

大江匡衡

菅原清公任播磨守
春澄善繩任伊豫守
菅原在躬任大和守
安倍與行任肥後守
三善清行任備中守
藤原佐世任陸奥守
平篤行任加賀守

策家居內官兼受領例

文章博士菅原是善兼伊豫守
式部少輔大江音人兼丹波守
東宮學士高階成忠兼大和守
大學頭大江齊光兼近江守
式部權大輔菅原輔正兼太宰大貳
左近衞權少將大藏權大輔常陸權介藤原佐世（朝臣イ）兼陸奥守

策家居內官受領兼任ノ例

右、匡衡歷文章生、文章得業生、對策及第、歷檢非違使、彈正少弼、拜任當職叙位

叙位ノ勞十三年

勞十三年、博士勞八箇年、其間幸艱、沈滯歎深、墜文章博士之前蹤、七年不賜兼官、計檢非違使之後輩、八人超爲受領、匡衡不種一頃之田、積學稼爲口中之食、不採一枝之桑、織文章爲身上之衣、進望尙書之閣、則鶴眼疲而不可階、退求刺史之車、亦羊腸嶮而無推轂、然間當今之時、政返淳素、三五之化漸彰、二八之臣如舊、去年之秋除目、文道成業之人多進、今年之春叙位、亂階不次之賞不見、如此則雖澤畔之蒲截盡、久泥五代三餘之學、而澗底之松老來、幸期千歲一遇之榮、王澤溫潤、此時不浴、何時浴、儒林光華、此時不開、何時開、抑申檢非違使之分受領者、藤原實輔、同安隆等也、或稱追捕之功、或募造作之賞、各所申非無謂、然猶匡衡射鵠、與實輔射鵰、文武之藝、決其雌雄如何、匡衡閱百家、與安隆造一屋、國家之用、論其殿最如何、彼呂尙者、屠釣之賤老也、說文韜而禮遇無雙、蕭何者、翰墨之柔臣也、超武將而爵祿第一、明王擢文士、不憚衆議者也、方今黃河雖淸、身猶沈、玄渙雖洽、獨有恥、累祖相傳之書、家荒而風雨難避、老母愁遺之命、官冷而水菽未酬、爲上文、爲重道、必垂矜遂之惠、望請殊蒙天恩、依檢非違使勞、幷儒學之功、被兼任越前尾張等國守、將勵天下之學徒、不耐情願之至、匡衡誠惶誠恐、謹言、

博士ノ勞八年

檢非違使ノ受領ト爲ル例

家貧ニシテ老母アリ

天下ノ學徒ヲ勵マサン

長德二年正月十五日　正五位下行式部權少輔兼文章博士大江朝臣匡衡上

二十六日、丁卯、右大臣道長、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　正月廿六日、丁卯、右大臣家大饗、

二十八日、己巳、越前守源國盛ヲ罷メ、淡路守藤原爲時ヲ以テ之ニ任ズ、

〔日本紀略〕一條院　正月廿八日、己巳、右大臣參內、俄停越前守國盛、以淡路守爲時任之、

〔今昔物語〕二十四　藤原爲時作詩任越前守語第三十

今昔、藤原爲時ト云フ人有キ、一條院ノ御時ニ、式部丞ノ勞ニ依テ、受領ニ成ラムト申ケルニ、除目ノ時、闕國无キニ依テ、不被成リケリ、其ノ後、此ノ事ヲ歎テ、年ヲ隔テ直物被行ケル日、爲時博士ニハ非トモ、極テ文花有ル者ニテ、申文ヲ內侍ニ付テ奉リ上テケリ、其ノ申文ニ此ノ句有リ、苦學寒夜紅淚霑襟、除目後朝蒼天在眼ト、內侍此レヲ奉リ上ケム爲ルニ、天皇ノ其ノ時ニ御寢ナリテ、不御覽ス成ニケリ、而ル間、御堂關白ニテ御座ハ、レ直シ物行ハセ給ハムトテ、內ニ參ラセ給タリケルニ、此ノ爲時カ事ヲ奏セサ給ケルニ、天皇申文ヲ不御覽ルニ依テ、其ノ御返答无カリケリ、然レハ關白殿、女房ニ令問給ケル女房申ス樣爲時カ申文ヲ令御覽セムシト時、御前御寢ナリテ、不御覽ス成ニキ、然レハ其ノ申文ヲ尋ネ出テ、關白殿天皇ニ令御覽シメ給ケルニ、此ノ句有リ、然レハ關白殿、此ノ句微妙ニ感セサ給テ、殿ノ御乳母子ニテ有ケル藤原國盛ト云フ人ノ、可成カリケル越前守ヲ止テ、俄ニ此ノ爲時ヲナ被成ケル、此レ偏ニ申文ノ句ヲ被感ル故也トナム世ニ爲時ヲ讃メケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

道長申文ノ句ニ感ズ

爲時申文ヲ上ル

〔今鏡〕九　むかしかたり　むかしの御つぼね（式部）の親にておはせし越後守（爲時）、縣召に淡路になりていとからくおほして、女房につけ奏し給ひけるふみに、苦學の寒夜に紅涙襟をうるほし、除目の春朝蒼天まなこにありと書き給へりけるを、一條のみかと御覽して、夜のおとゝにいらせ給て、ひきかつきてふさせ給けるを、御堂殿まいらせ給ひて、いかにかくはととはせ給ひけれは、女房の爲時か奉りて侍つるふみを御覽して、御とのこもらせ給へるよし申されけれは、いとふひんなる事かなとて、國盛といひしをめして、越前になしたひたるを返し奉るよしのふみかきてたてまつれとて、爲時を越前になさせ給へりしにそ、みかとの御心ゆかせ給ひて、こまうとゝふみ作りかはさせんとおほしめしつる御けしきありけるにあはせて、こし

申文ノ句ヲ感アラセラル

に下りて、から人とふみつくりかはされける、

去國三年孤館月、歸程萬里片帆風（爲時任國ニ於テ宋人羌世昌ト詩ヲ唱和ス）

晝鼓雷奔天不雨、綵旗雲聳地生風（宋人羌世昌、）

なとそきこえ侍し、（長德元年九月六日ノ條參看、）

〔本朝麗藻〕（下贈答部）觀謁之後、以詩贈太宋客羌世昌、藤爲時

六十客徒意態同、獨推羌氏作才雄、來儀遠動煙村外、賓禮還慙水館中、晝鼓雷奔天不雨、彩旗雲聳地生風、芳談日暮多殘緒、羨以詩篇子細通、

重寄

言語雖殊藻思同、才名其奈昔楊雄、更催鄉淚秋夢後、暫慰羈情晚醉中、去國三秊孤館月、歸程萬里片帆風、嬰兒生長母兄老、兩地何時意緒通、

〔古事談〕（一王道後宮）一條院御宇、源國盛任越前守、其時藤原爲時付於女房獻書、其狀云、苦學寒夜紅淚霑袖、除目春朝蒼天在眼云々、天皇覽之、敢不差御膳、入夜御帳、涕泣而臥給、右相府參入、知其如此、忽召國盛令進辭書、以爲時令任越前守、國盛家中上下涕泣、國盛自受病、及秋雖任播磨守、猶依此病、遂以逝

去云々、

〔尊卑分脈〕（源氏光孝）

信明（從四下、陸奥、越前、備後、若狹等守、後撰以下作者、）

國盛（正四下、播磨守、母イ）

爲親（掃部頭、從五下、母イ）

正職（加賀守、從五下、母イ）

貞亮（金葉作者、從四上、土佐守、式部大輔國元女、母イ）

爲善（後拾八作者、從五下、備前守、後拾五作者、母イ）

女子（民部卿道方室、經信卿母、歌人、後拾、續古等作者、拾巳下代々集作者、）

○國盛ノ世系、便宜合敍ス、十訓抄異事ナキヲ以テ略ス、

是月、入道前播磨守從三位源清延薨ズ、

葬送

〔公卿補任〕（六長德元年）非參議從三位源清延　同（長德）二正十七（今）入滅、

官歷

〔日本紀略〕（一條院）正月某日、入道從三位源朝臣清延薨、（年七十一、）

〔小右記〕正月十六日、丁巳、（略）中董定朝臣向故入道三位清延葬送所、

〔公卿補任〕（六）非參議從三位源清延（遠イ）七十九、（頃卷）陽成院第七御子、小松天皇四代、

主殿頭宗海男、母伴氏、正暦元年八月廿九日敍、造美福功、播磨守如元、同二年正月廿七日得替、長德元年十一月廿五出家、

〔本朝皇胤紹運錄〕

陽成天皇　諱貞明、

- 源清遠　從四上、刑部卿、(總)同賜姓、母佐伯氏、
  - 景明　從五位、周防介、
    - 有忠
- 同清遠　刑部卿、從四下、母佐伯氏、

〔尊卑分脈〕　源氏　陽成

陽成天皇　諱貞明、

- 清遠　刑部卿、從三、延(長)木三五廿賜源姓、母佐伯氏、長德元十廿五出家、同二年正十七薨、
  - 景明　(母イ)周防介、從五上、
    - 有忠　(長)門守、從五上、

出家

世系

源姓ヲ賜フ

〔日本帝皇系圖〕　○前田家本

陽成　諱貞明、

- (總)同清遠　刑部卿、從四下、母佐伯氏、

男源國政卒ス

〔伏見宮御記錄〕　權記　長德四年七月七日、略○中式部大丞源國政昨夜死去、家人［　］［　］由也、甚足悲、國政者、故美濃守正四位下通理朝臣男、實者故從三位源清延卿男也、

〔皇代記〕　人代　陽成天皇　源清蔭、大納言、正三位、清鑒、從三位、刑部卿、清延、從四位、皆是脫屣之後降誕云々、

○清延男源國政卒去ノコト、便宜合敍ス、

二月（小　壬申　盡　朔）

四日、乙亥、祈年祭、

〔日本紀略〕（院一條）　二月四日、乙亥、祈年祭、

六日、丁丑、釋奠、園韓神祭、

〔日本紀略〕（院一條）　二月六日、丁丑、釋奠幷園韓神祭、

八日、己卯、大原野祭、

〔日本紀略〕（院一條）　二月八日、己卯、大原野祭、大風吹社樹之間摧折、幷打壓牛馬、

大風

十一日、壬午、列見、是日、明法博士ヲシテ、内大臣伊周及ビ權中納言藤原隆家ノ罪名ヲ勘申セシム、

滿座嗟歎ス

〔日本紀略〕（院一條）　二月十一日、壬午、列見、今日仰明法博士、令勘申内大臣（伊周）幷中納言隆家卿家人、與花山院人鬪亂事、

〔小右記〕　正月十一日、壬午、○中略　右大臣（道長）、大納言公季、中納言時中、參議安親（藤原）、俊（源）賢在陣、内大臣、中納言隆家罪名、可勘之由、頭中將（藤原資綱）出陣、仰右大臣、滿座欣嗟（歎カ）、秉燭退出、

○伊周及ビ隆家、從者ヲシテ、花山法皇ヲ御在所ニ射奉ラシムルコト、正月十六日ノ條ニ見ユ、

二十一日、壬辰、二十社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕（院一條）　二月廿一日、壬辰、奉幣廿社、

二十二日、癸巳、東三條院、法華八講ヲ行ヒ給フ、

〔日本紀略〕（院一條）　二月廿二日、癸巳、東三條（詮子）院臨時法花講、十四箇日、

〔小右記〕　三月二日、壬寅、參内、左武衛（公任）相公同車、參女院（詮子）、彈正親王（爲尊）、帥（敦道）々々、右大臣、兩大納言（頤光、公季）、中納言三人（懷、忠、余）、參議六人（道綱、時光、公任、誠信、俊賢）、三位人（三脫）（懷平、輔正、有國）、同參、依當五卷日、有捧物事、依雨不廻庭中、只廻殿上、多人無便、道綱重服人、雲上重服者皆在之中、前々不見事也、

十四箇日

五卷日ノ捧物

十日、庚戌、○中略　余（實資）參女院、右大臣、中納言懷忠、參議時光、惟仲、輔正、散位三公任、誠信、俊賢、同參、廿八講了、公家給度者、有御諷誦、其後一兩所有諷誦、納言以下執請僧祿、秉燭退出、

結願度者ヲ賜フ

御諷誦請僧ノ祿

〔榮華物語〕（四見はてぬゆめ）　女院には、年比法華經の御讀經あるに、又はしめさせ給てよませ給、世中のさはかしさを、いとおそろしき物に覺したり、

八省院ニ行幸

二十五日、丙申、大神宮以下諸社ニ奉幣ス、是日、中宮、梅壺ヨリ職曹司ニ遷御アラセラル、

〔日本紀略〕一條院　二月廿五日、丙申、奉幣伊勢以下諸社、天皇行幸八省、

〔清少納言枕草紙〕○中宮内省圖書寮本　心ちよけなる物　長德二年信經記、廿三日、返年の二月廿甲午、明後日臨時奉幣、八省行幸、中宮(定子)退出職曹司、不御輦車、永宣旨但車尋常檳榔毛也、よひ、宮のしきへ出させ給し御供にまいらて、うめつぼにのこりゐたりし、○下略

行成前齋日ニ輕服ヲ著ケテ參内ス

〔柳原家記錄〕七十八貫首雜要略　藏人頭伊勢奉幣前齋日、著輕服參内事

長德二年二月廿四日、藏人頭民部大輔行成朝臣輕服參内、被示云、僕今月雖著輕服、專非實服、是已忌月之後月也、後月先々供奉神事云々、不可依衣裳色歟者、右兵衞督(藤原)俊賢、被同之、頭中將(藤原)云、誠信不承引云々、

祇園社ヲ加ヘテ二十二社トス

〔諸神根元抄〕乾定二十二社次第事　長德二年二月廿五日、被奉獻臨時之官幣之日、加祇園社、爲廿二社、

祇園社事、可爲廣田之次、北野之上之由、宣下、

行啓延引

〔小右記〕正(三)月十一日、壬午、中宮(定子)行啓延引之由云々、仍召外記相(忠)門、取案内於宮及頭(藤原)中將、今日無行啓中云々、○行啓事、面問頭中將、云、可隨後仰之由、去夕有仰者、

三月 大 辛丑 盡 朔

四日、甲辰、中宮、職曹司ヨリ、二條第ニ遷御アラセラル、

〔小右記〕三月二日、壬寅、○略 中 頭中將（藤原道綱）傳綸旨云、明日中（北子）宮出御里第者、召遣外記、且以此由、仰遣大外記（中原）致時朝臣、甚雨不能參內、外記遠（脫アラン）不參來、

四日、甲辰、參內、今夜中宮、出御二條北宮、外記申云、左馬寮依進怠狀、不能供奉者、仍奏事由之處、仰云、今日免給了、早可也、供奉者、卽仰外記、參中宮、御坐職御曹司、時時雨降、入夜祇候、左大辨惟（平）仲、右兵衞督俊（源）賢扈從、自餘公卿皆悉申障、不用御輿、御檳榔毛御車、戌刻出御自陽明門里第、無饗、公卿以下立各分散、

大納言藤原顯光著座ス、

〔公卿補任〕六　大納言從二位藤顯光　三月四日、甲辰、著座、

〔小右記〕三月四日、甲辰、○略 中 大納言顯光卿、子二刻著座、仍時衰時云々、一說又云、春辰著座、得罪大凶者、

五日、乙巳、參議正三位藤原安親薨ズ、

〔公卿補任〕六　參議正三位藤安親、五、七、十修理權大夫、三月八（五）日薨、

〔日本紀略〕一條院　三月五日、乙巳、參議正三位修理大夫藤原朝臣安親薨、年七十、

葬送
薨奏
官歷

六日、丙午、安親卿葬、

廿六日、丙寅、奏參議安親薨由、

〔一代要記〕一條院　參議　藤安親　長德二年三月六日薨、

〔公卿補任〕六　參議正四位上藤安親、六、十中納言山蔭卿孫、故從四位上攝津守中正三男、母伊勢守源友貞女、天慶八三、木工少允、陽成院御給、昇殿勞、天曆、少丞、同十一正七從五下、藏人、廿七日攝津守、天德二十一廿九昇殿、應和元十三民部少輔、同二正七從五上、治國、八月廿八大和守、九月十六昇殿、十月一日次侍從、康保四五安（宣）駕、止昇殿、十一月日東宮昇殿、同五正十三左衞門佐、使、十五日昇殿、安和元十一十四播磨少掾、男淸通讓之、廿三日正五下、大嘗會主基、同二閏五廿一春宮權大進、九月廿三從四下、御卽位先坊進、十月十九相模守、治國、天祿三正廿四伊勢守、受領、天元三正十三昇殿、永觀二八廿七春宮亮、宮初、寬和元、、昇殿、十二月廿四從四上、治國、同二六廿三藏人頭、禪讓之日、同七月五修理權大夫、廿三日正四上、先坊亮、超階、永延元年十一月十一日任

參議、修理大夫(權脫)、大辨如元、永祚元年四月五日從三位、春日行幸行事賞、正暦二年正月七日正三位、同四年正月丶備前守、

〔尊卑分脈〕藤原氏魚名孫

中正（藏）從四上、左京大夫、

安親（頌藏）正三位、參木、母伊世守源友貞女、長德二三六薨、六十五才、(七)

清通（式）從四下、備中守、母、

陳政　冷泉院判官代、母、

季隨（民）冷泉院判官代、母、

爲盛（藏式）從四下、越前守、母越後守清兼女、

成忠（藏）從五下、母、

守仁（藏）從四下、山城守、母道明大納言女、

時清（藏）從五下、刑部大甫、

茂秀（季イ）母同、

兼清（藏）從五上、筑前守、母同、

正雅（式）總持寺別當、母、

〔高家系圖〕○俠爵前田利爲氏所藏

中正　左京大夫、攝津守、從四上、

安親　參議、正三位、

爲盛　從四式部、越前守、

季隨　安藝守、從四下、土佐守、

時姬　大入道殿北政所、中關白、粟田關白御堂關白等母也、

大祓

七日、丁未、仁王會、

〔日本紀略〕一條院　三月四日、甲辰、於八省東廊大祓、

七日、丁未、仁王會、

十一日、辛亥、季御讀經、

〔日本紀略〕一條院　三月十一日、辛亥、季御讀經始、

十四日、甲寅、同竟、

結願

〔小右記〕三月十日、庚戌、參內、藤大納言、(示惟仰)左大辨在陣、定季御讀經闕請、

闕請定

〔小右記目錄〕四季御讀經事　同(長德)二年三月十四日、季(御脫カ)讀經結願事、

申文ナシ

〔西宮記〕九月季御讀經　長德四年九月二十九日、季御讀經結願也、○中略無申文、

試樂

去長德二年例云々、

十四日、甲寅、直物、

〔日本紀略〕一條院　三月十四日、甲寅、○中略今日直物、

十八日、戊午、石清水臨時祭、

〔小右記目錄〕四臨時祭　長德二年三月十六日、臨時祭試樂事、

同十八日、臨時祭事、

〔石清水文書〕五田中家文書附錄宮寺緣事抄臨時祭下

同（長德）二年三月十八日、戊午、石清水宮臨時祭也、

十九日、己未、直物、

〔小右記〕三月十九日、己未、晩頭參內、令召二省、入夜參入、召外記守成（藤原）、召々物、直物入筥持來、以外記令披封、外記守成三箇座（度カ）申式部候由、是例也、式部丞菅原定義著靴立小庭、余（實資）云、萬宇古、定義稱唯、來跪膝突、余以右手賜除目、定義挿笏之間太久、前々也、如挿下置、不知前例歟、定義著淺履、著膝衝、賜直物、當年者、午付□重卷、賜之、舊年者、散杖指、挾算共下給、了退出、次兵部丞藤原信經參入、賜直物、戊終退出、

二十七日、丁卯、東三條院、御惱ニ依リテ、院號及ビ年官年爵ヲ辭シ給フ、

或人ノ呪詛厭物

世人伊周ヲ疑フ

詔書ノ作者

〔小右記〕三月廿八日、戊辰、○中略早朝參女院（藤原道長）、謂右大臣（藤原伊周）、院御惱昨日極重、被停院號、年爵、年官等事之由、昨夜被奏聞了、又云、或人呪詛云々、人之厭物、自寢殿板敷下掘出云々、

〔榮華物語〕四見はてぬゆめ　女院の御なやみ、おり〳〵いかなることにかとおぼしめし、御もの〻けなといふこととも〻あれは、この內大臣（伊周）とのを、なを御心をきて、心おさなくてはいかゝはあへからんと、かたふきもてなやみきこゆる人々おほかるへし、

〔吉御記〕安元二年六月十八日、辛卯、○中略、建春門院、院號御之處、東三條院長德二年三月廿七日、被辭申件事、爾使有無、小野宮（實資）幷行成卿記所見不詳云々、辭退ノコトニカヽル、昨日被尋先例

○伊周、太元帥法ヲ修セシムルコト、四月一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、戊辰、東三條院ノ御惱ニ依リテ、大赦ヲ行フ、

〔日本紀略〕一院　三月廿八日、戊辰、詔、大赦天下、大辟以下赦除、常赦所不免者不赦、依東（除子）三條院不豫也、大內記齊（紀）名作詔、

〔小右記〕三月廿八日、戊辰、自內有召、卽參入、藏人頭行成（藤原）仰云、東三條院御惱

不輕、可行赦令、犯八虐、強竊二盜、私鑄錢、常赦所不免者、非赦除限者、召外記(中原)致時朝臣、召見年々詔書、召□(遠カ)内記中務輔、又仰云、可令進未斷囚勘文者、仰府生好兼、大内外(記)齊名參來、仰詔書趣、入夜輩(作カ)了進之、見了奉右(置長)府、歸來之後、進御所奏聞、返給、令淸書、又奏御畫日、了返給、後著仗座、召中務省(輔高、遠)給之、未斷囚勘文令奏聞、仰云、輕犯者殊不見、相定可免給者、撰奏者、僧一人、俗一人、女二人、相定奏聞、卽有勅許、指點下給好兼、須詔書施行之後原免、而御惱不輕、又有前例、忽以原免、以披□(勝カ)孝道(藤脫)朝臣令書、下宣旨、子一刻退出、

御畫日未斷囚勘文ヲ奏ス

詔書

〔京都帝國大學所藏文書〕(狩野亨吉氏蒐集文書十二)　御祈赦

長德二三廿八大赦、(依母儀仙院御惱也、)

詔書云、

詔云々、可大赦天下、長德二年三月廿八日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已結正、未結正、已發覺、未發覺、皆悉赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、強竊二盜、及私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、

〔勘仲記〕(官例女院)　正應五年九月七日、

御不豫時、爲公家御沙汰被行御祈例、

一條院　長德二年三月廿八日、被行大赦、(コノ間ノ文アリ、)御不豫也、

石見守藤原實明及ビ長門守源輔良ヲ罷ム、

〔日本紀略〕(一條院)　三月廿八日、戊辰、(略)中今日止石見守藤實明、長門守源輔良等任、

民部卿從二位藤原文範薨ズ、

〔公卿補任〕(六)　前中納言從二位藤文範、(八、十八、)民部卿、三月廿八薨、

〔公卿補任〕　參議從四位上藤文範、(五、十九、)入道參議正四位下元名二男、母大納言藤原扶鞆女、天慶三年六月昇殿、同七年五月文章生、同四三廿八少內記、(殿上勞、文章生、)四月十二日藏人、同六二廿七式部少丞、同七三廿九大丞、同八正七從五下、同三月廿八日攝津守、天德(曆)四正七從五上、同七月五日右衞門權佐、廿二日使宣旨、同六正十一左少辨、同八三十四右中辨、同九二十七左中辨、十一月廿二日正五下、朔旦、同十二七昇殿、十一正七從四下、同二月廿二日昇殿、天德二閏七廿八兼內藏頭、同四正廿四兼美作權守、應和元十二二從四上、(造宮行事、)同四正廿四美作權守、康保三九十七右大辨、(內藏頭如元、)同十一月九日補藏人頭、同

四正廿任參議、辨元、如十月八日兼大藏卿、○以上五、安和元年正月十三日兼備後權守、二月五日轉左大辨、同二年九月廿三日正四下、御卽位日、天祿元年正月廿八日兼民部卿、同二年十二月十五日任權中納言、同日從三位、民部卿如元、同三年正月廿四日轉中納言、貞元二年八月二日正三位、造宮別當賞、寬和二年七月廿六日從二位、臨時、永延二年正月丶辭中納言、次男以爲雅、申任備中守、頭二年參木大辨五年、中納言十八年、○以上六、

〔尊卑分脈〕藤原氏長良孫

元名 正四下、宮內大輔、參議、

辨頭文 文 從二、延佐、民部卿、權中納言、
縫式 母、

縫式 爲雅 正四下、備中守、越前守正茂女、

縫式 爲信 從四下、常陸介、右馬頭、右近少將、母同爲雅、

典雅 從五下、攝津守、母、

縫 知光 正四下、備中守、實父美作守爲昭養子、母、正四下、

如親 字龜君、母、

邦明 從五下、左馬助、養子實女子也、又兵衞佐々理子也、母、

理方 母左衞門內侍、

寺 明肇 少僧都、普門寺、母、

山 文圓 阿、母、

藤原敦忠ノ家司

惟宗公方ト違式違勅ノ義ヲ論ズ

〔大鏡〕上左大臣時平　先坊（保明親王）にみやす所まいり給事、本院（醍醐）のおとゝの御娘くして、三四人也、○中略いまひとりの宮す所は、其上の宰相のむすめにや、その後朝のつかひ敦忠の中納言少將にてし給ひける、宮うせ給て後、この中納言にはあひ給へるを、かきりなく思ひなから、いかゝ見給ひけん、文範の民部卿はりまのかみにて、殿の家司にてさふらはるゝを、われは命みしかきさうなり、かならずしなんず、その後、君はこの文範にそあひ給はんとの給ひけるを、あるましきことゝいらへ給ければ、あまかけりても見ん、世にたかへ給はしなとの給ひけるか、まことにさていますかるそかし、

〔江談抄〕二雜事　公方（惟宗）違式違勅論事

問云、公方違式違勅論其義如何、答云、天曆御時、諸國受領不濟率分之輩、勘公文之時、勘會諸司文書、加署判之者、可勘其罪狀之由、被問公方、公方勘云、當違式云々、被仰云、事出自勅語、然則可違勅、公方不可然之由執申、爰以文範令問

之間、問云、破勅語之起請、皆可稱違式之者、何故格條中注云、若違此格者、論以違勅之罪、公方答云、以此文案之、格條事、偏皆可謂違勅之者、何更令初有違勅之詞矣、格條事不可必稱違勅之、故新立違勅之文、文範又難云、格條立違勅文、文異陳狀、然者今令條稱曰、論以違勅之罪、此條如何、公方無所陳之旨、遂依此過及左遷、公方卒後、子允亮思其父之耻、研精此事七八年許、遂具文書、向文範亭、欲討論之處、文範命云、令問給之聖皇モ不御座、公方モ其身不存、僕モ亦老タリ、是討論以無益也云々、允亮懷文書還畢、問此論如私曲相須歟、被答云、私曲相須者、及諸道之沙汰矣、違勅者、唯公方一身也、

公方ノ子允亮討論ヲ挑ムモ文範應ゼズ

〔大槐祕抄〕文範の民部卿は正左中辨、三條關白（頼忠）は權左中辨にて、まつりを三條關白わたるべきにて候けるに、三條の關白わたくしに文範にあひて、祭は我等かやうなる人のわたるなり、我わたり給へと申されければ、さ侍るとてこそ文範わたり候けれ、むかしは人の心うるはしくて、かくのことく候けるなり、今の人はわかやくをせさせむとこそ思ひ、かつはつかうまつり候めれ、よき諸大夫とあやしのきむたちとは、はるかに絶席したるものにてなん候ける、

權官頼忠ノ命ニ依リ祭ニ渡ルル

清涼殿ノ臨時樂ニ候ス

〔續古事談〕五諸道　一條院御時、清涼殿ニテ臨時樂キコシメシケルニ、（中略）此日、文範ノ民部卿八十ニアマリテ、サセルメシナキニ參テ座ニサフラヒテ、舞ノホトニウソフキケレハ、主上ヨリハシメテ、ミル人ヲトカヒヲトカスト云事ナシ、老タルヒトナム云アヘリケル、

歌什

〔新續古今和歌集〕一春上　圓融院御時、紫野にて子日し侍けるに、

民部卿文範

かそふれは松より年そ老にける我を尋て人はひかなん（同ジ、）○萬代和歌集

藤原行成ニ萬葉集ノ書寫ヲ囑ス

〔權記〕長保三年五月廿八日、己亥、故民部卿存世日、被送續色帋一卷、請書古万葉集、仍書之、雖經數年不知誰人之料、箱底塵埋、令左兵衞佐（藤原）能通朝臣尋之、前備前介（藤原）中清朝臣女子料也云々、仍付送之、

○文範、亡妻ノ忌日ニ佛事ヲ修スルコト、永延二年年末雜載、諸家ノ條ニ、餘慶ノ懲責ヲ受クルコト、正暦二年閏二月十八日ノ條ニ、文範ニ封五十戸ヲ加給スルコト、同五年九月二十六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

長德二年三月二十八日

大雲寺ノ本願

誓願ヲ發ス

老尼ノ託宣

〔大雲寺緣起〕抑北岩藏山大雲寺者、六十四代圓融院御願、園城寺之別院也、本堂者、引移本(時平)院左大臣之舊宅、眞覺上人造之、本尊日野中納言敦忠卿室家之持佛、長谷觀音御素木、以第二切、行基菩薩眞作、等身金色十一面觀音、本願者敦忠息(ヲ)文範卿、勅使敦忠卿云々、情(橋カ)尋舊記、天祿二年四月二日、比叡山被行大法會、(號五堂會)月卿雲客數多以登山、自高岳見下麓景地、遙谷五色雲聳昇、見之人、各成奇特之思、權中納言藤原文範卿、左衞門督源延光、勅使藏人頭從四位下右近衞中將兼修理大夫春宮(亮脫カ)源朝臣惟正等、親見之、文範卿不測誓願曰、此雲者佛法相應之瑞雲無疑、尋入可立伽藍、西坂本而改乘輿、駕駿馬、則分入此洞、松栢梢並、柴擲(マヽ)枝茂、猿熊豺狼之栖、人跡絕無道、漸臻瑞雲之靜崛、文範不慮落馬、既以絕入、暫在程蕪、告扈從輩云、我求瑞雲、尋入此隈、志偏爲伽藍建立、然今落馬絕入、甚以爲怪、近邊何有佛神乎、可相尋之云々、卽求之、山傍有一叢祠、蔓草閉戶、玉露連軒、使還告此由於文範卿、則參詣寶前、奉拜之、爲問元起由來、敢無人、爰老尼忽然視(現カ)、文範問曰、汝此處自早晚住乎、此叢祠知元來乎、老尼答曰、我是佛法守護之善神、知人之懇篤、出現所々故、一所不住也、今知、文範興隆誓願所顯現也、凡當社者、岩藏山守衞石坐明神是也、元來不知之、亦自此西、有一宇草堂、號相博寺、是往古之仙崛、而住一人聖、吾雖爲聖尼、不知彼聖人由來、然而旦暮吹風自此寶刹、成福聚海無量之音、此尼聞是響、忽得解脫、覺卽補陀落山、汝早往可拜云々、文範隨聖尼訓、分荆蕀茅薄、望此見之、寔草堂有一宇、青蘿白苔連軒如瓔珞、信心銘肝、渴仰之淚潤袂、五體投地禮拜、褰御帳爲拜之、更以無本尊、文範卿安(晏)然數刻、尋聖尼暗跡隱、屢回思慮、本尊者則聖人、々々則觀音、處者此補陀山也、伽藍建立之勝地有此、歡喜悅豫而歸洛、爰眞覺上人以无二志、可造佛閣、企事既舊、求靈地時節、聞此奇特、卽談話之、奏圓融院、叡感以甚、于時仰日野中納言敦忠卿、被宣下、定勅願寺、爲眞覺上人本願、可造伽藍、被寄附寺領、抑此眞覺上人者、時平公之舊亭移改爲御堂、本尊敦忠卿室家藤原明子持佛堂之尊像也、最初之本願、參議元名卿息戶部納言文範、建立上人敦忠卿息武衞將軍佐理也、天下(マヽ)無雙(ヽ)能書也、入道後號眞覺上人、改額稱大雲寺、依倫(綸)旨、佐理書額銘、〇上下略

勅願寺ト爲ス

平座見參
女院ノ御惱ニ依リテ出御ナシ
宜陽殿饗饌
勸盃
見參祿目錄

四月 小 辛未 朔盡

一日、辛未、旬儀、

〔日本紀略〕一條院 四月一日、辛未、○中略晩頭有內召、卽參入、頭行成(藤原)傳仰云、侍從見參可也奏者、著陣、裝束辨不候、仍仰權少辨爲紀、令敷宜陽殿座、○中略、齊院御禊、前驅定ノコトニカヽル、本月十二日ノ條ニ收ム、宜陽殿饗饌辨備了、待外記歸來之間、可及深更、仍中間著宜陽殿、三獻、權辨爲紀依無他辨、三獻役了、了欲召侍從、不候之由云々、仍更不召、令居件物、了下著(資カ)云々、催四獻之處、造酒司早以罷立、忩雖令召、不參入、太奇怪也、仍召見參祿目錄、外記相(秋)門挿見參祿目六於書杖、候陣砌溝、可候小(實資)庭足寄、余目、稱唯著膝突、奉見參等、一一披見返給、更如本挿杖、立砌初(今)所池座、進御所、以行成令奏聞、御覽了返給、復本座、外記返奉見參目錄、取之、外記持空杖退出、此間辨二人在座、少納言不候、召辨說(藤原)孝、給見參目六出、依少納言不參、見參相加之所賜之、外記撤陣硯、仰事由、令返置、了赴宜陽殿出、旬日自件門退出之例也、時刻、亥今日召仰祿事、依無可然之人、又不留見參、依少可參入之人、近代之例也、

仲祚法師
道長ヲ呪詛ス

法琳寺、內大臣伊周ノ、私ニ太元帥法ヲ修スルコトヲ奏ス、

〔日本紀略〕一條院 四月一日、辛未、○中略法琳寺申內(伊周)大臣修太元法之由、仰令召仲祚法師、

〔榮華物語〕四見はてぬゆめ 太元帥法といふ事は、たゝおほやけのみそむかしよりをこなはせ給ける、たゝ人はいみしき事あれと、をこなひ給はぬ事なりけり、それをこの內大臣殿、しのひてこの年ころをこなはせ給ふといふこと、此比きこえて、これよからぬ事の內にいりたなり、

〔覺禪鈔〕五 太元法 御堂入道殿調伏事、法名ハ行觀、俗名道長、靈驗門

法成寺入道殿、賢人右府(道長)實資、雨僧(仁海)正令參會、各御物語數刻ニテ夜ニ入ル、中門廊ニ、慕(墓)惡童忽ニ化シテ、以弓箭奉射入道殿、々々々不令覽之、僧正ハ見之、令奉護身、件童奉射僧正、箭股ニ當ル、時右府見之、座ヲ去リ令出、雜色一人門邊ニ止テ、從此殿、何樣ノ人出ルヲ見ヨト、仰含令出了ル、明朝雜色歸參シテ申テ云ク、更ニ別事不候、其後經十箇日程、右府令參僧正御許、尋子細給、僧正股ヲ出シ、矢目ヲ令奉見、是太元明王射給箭也云々、是帥(伊周)內府修行件法、入道殿令呪詛云々、僧正在生間、沐浴ニ先件ノ矢目ヲ令洗、遍知院(覺)上綱之傳言云々、

〇伊周ヲ貶シテ大宰權帥トナスコト、四月二十四日ノ條ニ見ユ、

二日、(壬申)、地震、平野祭、

〔日本紀略〕(一條院) 四月二日、壬申、平野祭、今日地震、

三日、(癸酉)、梅宮祭、贈皇太后懷子國忌、

〔日本紀略〕(一條院) 四月三日、癸酉、梅宮祭、今日國忌、依當神事、附寺家、

四日、(甲戌)、廣瀨、龍田祭、

〔日本紀略〕(一條院) 四月四日、甲戌、廣瀨龍田祭、

七日、(丁丑)、官奏、擬階奏、

〔日本紀略〕(一條院) 四月七日、丁丑、擬階奏、

檢非違使廳奏

〔小右記〕四月七日、丁丑、參內、先參右府(道長)直廬、申雜事、志宗我弘範死去所以志伴忠信賜使廳奏、即以頭中將(行成)令奏聞、〇中略今日左(右)大臣候官奏、今年初奏也、左衞門督(藤原懷忠)、左大辨(平惟仲)、左兵衞督(藤原公任)、春宮權大夫(同誠信)、右兵衞督(源俊賢)參入、擬階事、左衞門督行之、其事以前退出、

十二日、(壬午)、賀茂齋院選子內親王御禊、

〔日本紀略〕(一條院) 四月十二日、壬午、賀茂齋王禊、

前駈定

〔小右記〕四月一日、辛未、〇中略此間大外記致時(中原)朝臣、傳右大臣(道長)消息、(云、依東脱カ)三條院御惱參入、而不能定申御禊前駈、可定奏者、左大辨(平惟仲)、右兵衞督(源俊賢)候陣、召大外記致時、仰可奉御禊文書等之由、右兵衞佐道順(高階)有公家之勘事、時方任國守不來成(哉カ)、此間可隨勅定由、以行成令奏、仰云、奉(王カ)道順不可差、也(時)方在京云々、含(令カ)問與不案內可差、又有其事可差代官者、余令答云、最初代官無便歟、時方已在洛下、程限內勤仕公役有何事哉、仰云、所申可然、可差時方者、即移著南座、外記申造酒代官、召文書硯等、左大辨執筆、件定文召筥入定文、以外記守成(能登)、先奉右府、〇中略良久之後、外記自右府歸來、件禊日定文、以頭行成令奏、即返給、

禊祭行事
石見ノ禊祭料解文ヲ奏ス

七日、丁丑、〇中略禊日前駈左衞門尉(維)候時申故障、事依揭焉、令奏聞、有天許、以則光爲其替、廼仰大外(記脱)致時朝臣、〇中略禊祭行事參議事、令奏聞、右兵衞督有勅許、即仰外記、石見國禊祭料解文令奏聞、可令納大炊寮者、下說孝(藤原)朝臣、

十五日、(乙酉)、賀茂祭、

警固

〔日本紀略〕(一條院) 四月十三日、癸未、警固、

十五日、乙酉、賀茂祭、

解陣

十六日、丙戌、解陣、

伊周病ニ依リテ播磨ニ留マル　隆家但馬ニ留マル

二十四日、甲午、中宮、二條宮ニ遷御シ給フ、是日、除目ヲ行ヒ、內大臣伊周ヲ貶シテ、大宰權帥ト爲シ、權中納言隆家ヲ出雲權守ト爲ス、

〔一代要記〕一條院後宮　皇后宮藤定子　長德二年四月二十四日、有事退出、

〔公卿補任〕六

內大臣正　三　位藤伊周　皇太子傅、四月廿四日坐事左降太宰權帥、進發之間、爲遁罪科、出家入道云、依病留播磨國、

中納言正　三　位藤道綱（懐忠上）　四月廿四日任、

從　三　位藤隆家　四月廿四日坐事左降出雲權守、五月一日赴任、十八才、於但馬國、申病由逗留、

參　議從　三位（位惟仲上）菅輔正　四月廿四日任、式部大甫、越前權守如元、

從四位上藤齊信　四月廿四日任、左中將如元、元藏人頭、○職事、補任同ジ、

〔辨官補任〕柳原家記六十　權左中辨從四位下藤行成　四月十（廿）四日任、○公卿補任、職事補任、二十四日ニ作ル、

〔枕草子〕○中宮內省圖書寮本　くちおしき物（傍註）長德二年五月三日、藏人兵部丞（平カ）兼信經、作物所別當、以文章生方弘奏慶、

宣命左遷ノ理由

隆家赴任

出家シテ京ニ留マランコトヲ請フ

伊周逃亡

伊周謫所ニ赴ク

除目

下名配流宣命

固關勅符諸陣警固

送大宰使

〔日本紀略〕院一條　四月廿四日、甲午、宣命以內大臣藤原伊周朝臣、爲太宰權帥、以權中納言同隆家朝臣、爲出雲權守、去正月、依奉射危花山院法皇、又奉呪詛東三條院之聞也、又緣坐左遷之者、有其數、

五月一日、庚子、出雲權守隆家卿進發、赴任所、勅使相送、於皇嘉門下抑車、奏請聽出家留京、勅不許、遂赴謫所、又太宰權帥逃脫不赴、仍令尋求之、

四日、癸卯、權帥自春日社歸京、卽赴謫所、勅使相送、

〔小右記〕四月廿四日、甲午、或下人云、今曉閉諸陣者有內召、辰初參入、先於左衞門陣外取案內、頭中將齊信（藤原）出迎云、可參入、先右大將顯光（藤原）依召參入、右將軍、（實資）余兩人有指召、此間、大藏卿時光（藤原）、右大辨扶義（源）等參入、然而不入陣中、右大將在右（道長）府直廬、仍余詣彼直廬、右府命云、束帶只今可罷著陣者、將軍余著陣座、良久之後、右大臣著陣、先是、於御前有除目、々々在貞、大臣取副除目於笏著陣、以左大辨惟（乎）仲、令淸書、配流雜事等委不（行）大將、此間、諸卿依仰入陣中、除目淸右（東）大將奏聞、召式部丞、賜下名、召大內記齊（紀）名朝臣、仰配流宣命事、射花山法皇事、呪詛女院事、私行太元帥法事等也、并固關勅符事、先是、令警固諸陣、召左衞門權佐允亮（藤原）朝臣、仰可追下權帥之由、允亮朝臣申請、左衞門府生茜忠宗、廷尉相共向彼家、以左衞門尉源爲貞、爲送太

送出雲權守使

宰之使、又送出雲權守隆家之使、右衞門尉藤原陳泰行官符、及伊豆權守高階信順、淡路權守同道順等任符、令候也、大將進御所、令奏勅符任符等、先奏宣命草、後聞、件宣命給少納言之、伊頼、於官廳令宣制之、允亮朝臣向權帥家、中宮御在所也、謂二條北宮、使等入自東門、無陣門也、經寢殿北、就西對、帥住居也、仰勅語、而申重病由、忽難赴向配所之由、差忠宗令申、無許容、早載車可赴之由、重有仰事、余觸故障於藏人頭行成退出、固關等事、右大將行之、後聞、勅符官符繼入袋云々、至官符不然事也云々、可尋知事了(也カ)、今朝近衞陣被奉女院(藤原)、今朝、仰左右馬寮、令引御馬、堪武藝五位以下、依宣旨、令候鳥(聽)曹司云々、太宰權帥正三位藤原伊周元內大臣、出雲權守從三位藤隆家元中納言、伊豆權守高階信順元右中辨、淡路權守高階道順元右兵衞佐、木工權頭、被削殿上簡人々、右近少將源明理四位、左近中將藤原頼親、右近少將藤原周頼、同少將源方理、

東三條院ヲ警固スル武藝者ヲ職曹司ニヲ候セシム

殿上簡ヲ削ラル人々

勘事

伊周ノ下向ヲ促ス

物見ノ人后宮ニ亂入ス

中宮御所ニテ隆家ヲ捕フ

伊周逃亡

大索

勘事、左馬頭藤原相尹　彈正大弼源頼定

廿五日、乙亥(丙)、參內、諸卿皆悉入、權帥伊周候中宮御所、不隨使催之由、再三允亮朝臣、以忠(茂)宗令奏聞、既無許容、只被仰可早追下之由、二條大路見物雜人、及乘車者如堵、爲見帥下向云々、

廿八日、戊戌、今日、陣物忌、觸此由頭辨、不參入、中宮與權帥相携不離給、仍不能追下之由、再三令奏之、京內上下擧首、亂入后宮中、風(凡カ)見物濫吹無極、彼宮內之人、悲泣連聲、聽者拭涙、此間云々、赦(々)々不能皇記(見カ)、○略下

五月一日、庚子、參內、出雲權守隆家、今朝於中宮捕得、遣配所、令乘編代車、依稱病也云々、但隨身可騎之馬云々、見者如雲云々、權帥、出雲權守共候中宮御所、不可出云々、仍降宣旨、撤破夜大殿戶、仍不堪其責、隆家出來云々、權帥伊周逃隱、令宮司搜於御在所及所々、已無其身者、右大(藤原頼光)將以下諸卿候雲上、余詣右府宿所、謁談之後、黃昏退出、

二日、辛丑、早朝依召參內、先是、右大將(藤原道綱)、宰相中將候陣、將軍行盜人搜事、出宣旨、定文進御所奏聞、於陣座令奏歟、可召出條々使、上首者仰、五位於膝突奉、六位於庭中奉之、使等多失錯、

伊周ノ隨身ヲ拷問ス

入夜申返事、今朝允亮朝臣、以忠宗令申云、信順、明順、明理、方理等朝臣、令召候之處、申云、左京進藤賴行、權帥近習者也、以件賴行、可令申在所者、卽問其申(由カ)云、權帥去晦日夜前、自中宮、道順朝臣相共向愛太子山、至賴行自山脚罷歸了、又其乘馬等放彼山邊者、仰云、隨身賴行可尋跡退(退カ)求者、又令申云、所申若相違者、可拷訊歟、仰云、可拷訊者、允亮朝臣、右衞門尉倫範、左衞門府生忠宗等、馳向彼山、尋得馬鞍等之由云々、中宮權大夫扶(撥)義談云、昨日后宮乘給扶義車、懸簾下其後、使官人等參上御所、搜檢夜大殿及疑所々、放組入板敷等、旨(令カ)實檢云々、奉爲后無限之大耻也、○中略信順等四人、籠戸屋、以看督長、令守護也、左衞門志爲信、爲重守(等)、

檢非違使等中宮御所ヲ搜檢ス

信順等ヲ監禁ス

伊周出家自第ニ歸ル籠宮ニ向フ

陣物忌

三日、壬寅、今明陣物忌、觸其由於頭辨、不參入、出雲權守隆家依煩胸病、尙在彼島(マヽ)邊云々、自出雲權守許、送書札、依病暫逗留、兼可見母氏存亡之由、欲付奏狀者、余送返事、不注月日、女報(脫)可致用意(ア)之旨、署(ン)等自女院邊、可被奏之由、相示了、若有承及事者、

四日、癸卯、參內、員外帥出家歸本家云々、令案內之處、事已有實、尋求之使尙在西山、此間、左衞門志爲信聞此由、欲申事由之間、權帥乘車馳向離宮、爲信著藁履、於淳和院邊退(退カ)留、爲信日來爲守護信順、明順、明理、方(理脫カ)等也、候中宮、依無乘物步行也、此間、公家差左衞門權佐孝道、左衞門尉季雅、右衞門府生伊遠等、馳遣帥所、又初使左佐允亮尋到孝道朝臣令奏此由、卽權帥令預允亮、々々申云、茜忠宗爲尋權帥、在愛太子、未歸參、以右衞門尉倫範、申請副使、依請云々、允亮令申云、實檢帥車、編代、帥已出家、車內有女法師、帥母(尊子)氏云々、可副遣歟者、仰云、不可許遣、件事等以外記致時(中脫)、轉右大將所令奏也、已孝道朝臣歸參、令奏帥申事等、依病者、朔日不罷下、兼免給女法師可持下(マヽ)之由云々、余不聞件勅答、退出、右大臣招余於鬼間、良久談話、依有事次、不可被行緣坐事之由、一兩度觸申也、信順、明順、明理、方理等自去朔日、爲申帥在所、在廷尉乎、人禁出入、而今日帥出來、仍被免出也、

伊周母貴子出家ス

緣坐ヲ行ハズ信順等ノ監禁ヲ解ク

伊周ヲ石作寺(在長岡)ヨリ離宮ニ送ル

五日、甲辰、倫範云、權帥去夜宿石作寺、左衞門權佐允亮、府生茜忠宗、今朝送離宮、母氏不可相副之由、宣旨了、又云、朔日依宣旨、官人及宮司等、破皇后夜御殿扉、々太厚不能忽破、仍突破戶腋壁板、令開扉、女人悲泣連聲、皇后者奉載車、搜於夜御殿內后母敢無隱忍、見者歎悲、先是、出雲權守隆家入領送使右衞門尉陳泰掌(家カ)云々、

中宮御所搜索ノ有樣

六日、乙巳、源元正、菅原宗忠、平常則、志太元貞、件四人紀伊前守董定(正月十六日ノ條)ノ郎等ヲ放免

紀伊前司董定ノ郎等ヲ放免

ス
伊周ノ出家ニ依リテ官符ヲ改ム
領送使

伊周離宮ヨリ楮寺ニ移ル

領送使請文ヲ取ルニ依リテ後ニ留マル
隆家病ニ丹ノ

伊周一族ノ愁歎

參照、良等、而有可令申之事、所召禁也、今日有右府命免之件事、前日右府所奏給也、雖休日、依警固參入內、春宮權大夫（藤原道信）、右兵衛督（源俊賢）同參、史茂忠云、權帥官符、依出家被改官符、（前帥高明）安和例也、今日右大將已下可被參入、爲令請印件官符事、領送使左衞門尉（惟）爲貞之所申上云々、又信順、道順朝臣等追任所之使、左右兵衞府□

□云々、

十二日、辛亥、今朝允亮朝臣、忠宗等來云、昨夕自山埼罷歸、昨日外帥自離宮著楮寺、無人相從、忠宗云、母（貞子）堂密々相從、允亮朝臣等去十日、外帥令請領送使爲貞、卽取請文、同十一日、母堂密々來向、忠宗密々談說也、○中略大外記致時朝臣云、爲貞上帥（中カ）依病不能發向之由云々、又云、一日陳泰言上、出雲權守依病逗留丹後國之由、病愈了可送任所之由、被下宣旨了、

〔榮華物語〕五

うら〳〵のわかれ　かくてまつりはてぬれは、世中にいひさめきつる事とも、あるへきさまに人々いひ定めて、おそろしうむつかし、內大臣（伊周）殿も、中納言（隆家）殿も覺しなけく、殿（道長）には御門をさして、御物いみしきりなり、宮（定子）の御まへもたゝにもおはしまさねは、おほかた御心ちさへなやましうくるしうおほさるれは、ふしかちにてすくさせ給、かゝる事はをのつ

禁中警固

大索

からもりきこゆれは、あなあさましさやうの夢をも見は、われいかにせん、いかてたゝけふあす身をうしなふわさもかなと覺しなけゝと、いかゝはせさせ給はん、此とのはら、さてもいかなるへきにかあらん、さりとて、たゝいま身をなけ、出家入道せんも、いとまことにおとろ〳〵しからんことは、のかるへきにもあらす、只佛神そともかくもせさせ給へきとて、すゝをはなたす、つゆものもきこしめさて、なけきあかし、おもひくらしたまふ、內には陣に、みちの國の前守維のふ、左衞門尉惟時、備前々司頼光、周防前司頼親なといふ人々、みなこれ滿中（伊）、貞盛か子むまこ也、をの〳〵つは物共、かすしらすおほくさふらふ、春宮の帶刀や、瀧口やなといふものとも、よるひるさふらひて、せきをかためなとして、いとうたてあり、よにはおほあなくりといひつくるも、いとゆゝし、としころ天變なとして、兵亂なとうらなひましつるは、此事にこそありけれと、よろつの殿はら、みやはら、さるへきよういせさせ給、物の數にもあらぬ里人さへ、萬にともせは、やまにいらんとまうけをし、ゆゝしきことのありさまなり、北方（貞子）の御せうとの明順、道順の辨なといふ人々、あな心う、さはかうにこそよはありけれ、いかゝせさせ給はん

検非違使伊周第ヲ固ム

するなとましさはけと、つゆかひあるへきことにもあらぬに、とのゝ内に曹司して年比さふらひつる人〳〵、とありともかゝりとも、君（伊周）のなくならせ給はんまゝにこそはともおもはて、よろつをこほちはらひ、こほめきのしりて、もていてはこひさはくをみるに、いみしうこゝろほそし、されとさなとせいし給へきにもあらす、よろつの人のみ思ふらんことを、はつかしういみしうおほさるゝ程に、世のなかにある検非違使のかきり、この殿（伊周）の四方にうちかためえもいはぬ鬼のやうなるものうちくして、太刀ほことりつゝたちこみたるけしき、みちおほちの四五丁はかりのほとはゆききもせす、いとけおそろしき殿の内のけしき有さまなとも、いはんかたなくさはかしけれは、寢殿のうちにおはしましある人々おほかれと、人おはするけはひもせす、哀にかなしきに、かゝるにこのあやしのものとも、殿の内にうちめくりつゝ、こゝかしこをみさはくけはひ、えもいはすゆゝしけなるに、物のはさまよりみいたして、あるかきりの人〳〵、むねふたかり、こゝちいといみし、とのいまはのかれかたきことにこそはあめれ、いかてこのみやをいてゝ、木幡にまいりて、ちかうもとをうも、つかはさんかたにま

宣命使伊周第ニ來ル

かるわさをせむと、おほしの給はするに、このものともたちこみたれは、おほろけのとりけた物ならすは、いて給はん事かたし、よなかなりともなき御かけにも、今一度參りてこそは、いまはのわかれにも御覽せられめと、いひつゝけの給はするまゝに、えもいはすおほきに、水精の玉はかりの御なみたつゝきこほるゝ、見たてまつる人いかゝはやすからん、はゝ北方（貴子）、宮（定子）のおまへ、御をち（明順、道順）の人々、れいの涙にもあらぬなみた出きて、此おそろしけなる物ともの、宮の内に入みたれたれは、検非違使ともいみしうせいすれと、それにもさはるへきけしきならす、かゝる程に、かくみたりかはしき物のなかともをかきわけ、さるかたにうるはしくさうそきたる物、南おもてにたゝまいりにまいる、こはなにしにかとおもふ程に、宣命といふものよむなりけり、きけは太上天皇（花山）をころし奉らんとしたるつみ一つ、みかとの御（一條）はゝ（母子）后をのろはせたてまつりたるつみひとつ、おほやけよりほかの人いまたをこなはさる大元の法を、わたくしにかくしてをこなはせたるつみにより、内（伊周）大臣をつくしの帥になしてなかしつかはす、又中納言（隆家）をは、出雲權守になしてなかしつかはす、といふ事をよみのゝしるに、宮の内の上下、

伊周父道隆ノ木幡ノ墓ニ詣ヅ

聲をとよみなきたる程のありさま、此文よむ人もあはてにたり、撿非違使ともゝ涙をのこひつゝ、あはれにかなしうゆゝしう思ふ、そのわたりちかき人々、みなきゝてかとをはさしたれと、此御こゑにひかれて、なみたとためかたし、さて今はいてさせ給へ、日暮ぬ〳〵とせめのゝしり申せと、すへてともかくもいらへする人なし、内にもかくいらへする人なきよしを奏せさすれは、なとてさるへきことにもあらす、たゝよく〳〵せめよとのみ宣旨しきりにくたるに、かくてその日もくれぬれは、内大臣殿（道隆）故殿こよひさそひてゐていてさせ給へと、おほしねんせさせ給御しるしにや、そこらの人さはかりいひのゝしりつれと、夜中はかりにいみしうねいりたれは、御をちの明順はかりと、御ともに人二三人はかりして、ぬすまれ出させ給、御心のうちに大願たてさせ給、其しるしにや、ことなくいてさせ給ぬ、それより木幡にまいり給へるに、月あかけれと、このところはいみしうこくらけれは、そのほとそかしと覺しはかりおはしまいつるに、かの山ちかにてはおりさせたまひて、くれ〳〵とわけいらせ給に、木のまよりもり出たる月をしるへにて、卒都婆くきぬきなといとおほかる中に、これはこその此比のことそかし、されはすこししろうみゆれと、そのおりから人々あまたものし給しかは、いつれにかとよろつたつね參りよらせ給へり、そこにてよろつをいひつゝけ、ふしまろひなかせ給けはひにおとろきて、山の中の鳥けた物も、聲をあはせてなきのゝしる、物のあはれをしる、あはれにかなしういみしきに、おはしましゝおり、人よりけにめてたき有さまにと、おほしをきてさせ給しかと、みつからの宿世果報の程ゆゝしく侍けれは、今はかくて都はなれて、しらぬせかいにまかりなかされて、又かやうになき御かけにも御らんせらるゝやうも侍らし、みつからをこたると思ひ給る事侍らねと、さるへき身のつみにて、かうあさましきめを見侍れは、いかていつちもまからて、こよひの内に身をうしなふわさをしてしかなと、なき御かけにも御おもてふせと、後代の名をなかし侍る、いとかなしき事なり、たすけさせ給へ、中納言もおなしくなかしつかはせと、おなしかたにたに侍らす、かた〳〵にまかりわかるゝかなしき事、又ゆゝしき身をはさるものにて、宮（定子）の御前の月比たゝにもおはしまさぬに、かゝるいみしきことにより、露御湯をたにきこしめさて、涙にしつみておはしますを、いみしうゆゆ

伊周北野ニ詣ツ

しうかたしけなくはへり、おはします陣のまへは、かさをたにぬきてこそわたり侍れ、かくゑもいはぬ物共の、おはしますめくりにたちこみて、みすをもひきかなくりなとして、あさましうかたしけなくかなしくておはしますとも、もしたま〳〵たいらかにおはしまさは、御産のおりいかにせさせ給はんすらん、かひなき身たに行すゑもしらすまかりなりぬれは、なをかの御身はなれさせ給はす、たいらかにとまもり奉らせ給て、又かけまくもかしこきおほやけの御心ちにも、又女院（媞子）の御ゆめなとにも、此事とかなかるへきさまにおもはせたてまつらせたまへなと、なく〳〵申させ給まゝに、泪におほれ給、きく人さへなき所なれは、明順聲もをしますなきたり、やかてそれよりをしかへし、北野にまいらせ給ほとの道いとはるかに、たつみのかたよりいぬゐのかたさまにおもむかせ給參りつかせ給へれは、とりなきぬ、そこにて、又なくなくいみしき事ともを申つゝけさせ給に、此天神に御ちかひたてゝ、さえおはする人にて、申給事かきりなし、宮人もやおとろくと、いそき出させ給程に、むけにあけぬ、いかにせんと、かしこにいらせたまはん程もさはかし、猶此わたりに、とかくらさせ給て、夕つかた

檢非違使等伊周ヲ捜索ス

とおほす程も、かしこの御有さまとも、あはれにうしろめたくおほせと、なをしはしやすらはんとおほして、右近のむまはのわたりにとゝこほらせ給程に、宮にはきのふくれにしことたにあり、けふとく〳〵と宣旨しきり也、扨も中納言はあるけはひし侍り、帥はすへてさふらはぬよしをそうせさすれは、あさましきことなり、宮（定子）をさるへくかくしたてまつりて、ぬりこめをあけてくみれのかみなとをもみよとある宣旨しきりにそふ、御ぬりこめあけ侍らん、みやさりおはしませと、檢非違使申せは、いまはすちなしとて、さるへく木丁なとたてゝ、あさはかなるさまにておはしまさせて、けひゐしとものみにもあらす、えもいはぬ人くして、このぬりこめをわりのゝしるをとも、あさましうゆゝしく心うし、さは世中は、かくあるわさにこそありけれと、めもくれ心もまとひて、涙たにいてこす、中納言殿も我にもあらぬさまにて、うすにひの御なをしさしぬきなとき給ひて、あさましくてゐたまへれは、人々かしこまりて、ちかうもえまいりよらぬに、このくのあやしのものともいりみたれて、しえたるけしきともそ、あさましういみしき、さてあけたれとも、夢におはせぬよしをそうせさす、出家したるにか、

搜索ノ宣旨頻ニ下ル

伊周第ニ歸ル

さるにても、たゝ今は都の内をはなるへきにあらす、よく〳〵あされあされと、宣旨しきりなり、げひゐしとも、かつはなく〳〵いみしうおもひなから、宣旨のまゝにするにおはせねは、いとあさましきことにて、すちなしとて、そのあたりよるひるまもるへきよしの宣旨しきりにあり、かくして今日もくれぬ、いとあさましき事なり、いかゝさるやうあらむ、撿非違使とも、ことあやまちたらは、みなとか有へきよしきくにも、その夜よ一夜、いもねしとおもひさはく程に、鳥の時はかりに、あやしのあしろ車の、こゝらの人にもをちぬさまなるか、人二三人はかりとともにて、このみやをさしてたたきにくるに、あやしくなりて、この撿非違使とものくの、あかきぬなときたる物とも、たゝよりにより（伊周）て、なにの事そ、たゝいまかゝる所にくるはとて、なかえにさとつけは、あらすやとのゝこはたに參らせ給へりしか、いまかへらせ給也といふをきゝて、此物ともみなさりぬ、御くるまみかとのもとにてかきおろして、内大臣殿おりさせ給ぬ、けひゐしともみなおりて、土になみゐたり、みたてまつれは、御年はたゝいま廿二三はかりにて、御かたちのとゝのをり、ふとりきよけにて、色あひまことに白くめてたし、かの光る源氏も、かくやありけんと見たてまつる、うすにひの御そのなよゝかなるみつはかり、おなし色の御ひとへの御そ、御なをし、御さしぬき同しさまなり、御身のさえもかたちも、此よのかむたちめにはあまり給へりと、人聞ゆるそかし、あたら物をあはれにかなしきわさかなとみたてまつるに、涙もとゝめかたうてみなきぬ、のりなからもいらせ給はて、宮のおはしませは、われひとりは、なをかしこまり給へるもいとかなし、さておはしましぬれは、帥木幡にまいられたりけるか、たゝ今なむかへりて候とそうせさすれは、むけによにいりぬれは、こよひはよくまもりて、あすうの時にとある宣旨あり、されは夜ひとよ、いもねて、たちあかしたり、宮の御まへ、帥殿、はは北の方、ひとつに手をとりかはして、まとはせ給、はかなく夜もあけぬれは、けふこそはかきりと、たれも〳〵おほすに、たちのかんともおほさす、御聲もおしませたまはす、いかに〳〵、時なり侍りぬとせめのゝしるに、宮の御まへ、はゝきたのかたつととらへて、さらにゆるしたてまつらせ給はす、かゝるよしをそうせさすれは、几帳こしに宮の御まへをひきはなちたてまつれと宣旨しきれと、けひゐしとも、人なれは、おはします屋には、えもい

中宮母貴子ト共ニ名殘ヲ惜ミ給フ

伊周第ヲ出ヅ

母貴子伊周ノ車ニ同乗ス

はぬもの共のほりたちて、ぬりこめをわりのゝしるたにいみしきを、又いかてかみやの御てをひきはなつ事はあらんと、いとおそろしう思ひまはして、身のいたつらにまかりなりて後は、いとひんなかるへし、とくとくとせめ申せは、すちなくていてさせ給ふに松（貴雅）きみいみしうしたひきこえさせ給へは、かしこくかまえて、ゐてかくしたてまつりて、御車にかうし橘こきひとつはかりを、御ふふくろに入て、むしろはりのくるまに乗給宮のおはしますをいとかたしけなくおほせと、宮の御まへは、北の方、やかて御こしきたち給へれは、ちかく御車よせてのらせ給には、北の方もつゝをいたきて、つゝきてのらせ給へは、母北方、帥のそてつとゝらへて、やかてのらんと侍りとそうせさすれは、いと便なき事也、引はなちてとあれと、はなれ給へきかたみえす、たゝ山さきまていかむ〳〵とたゝのり給へは、いかゝはせん、すちなくて御車ひきいたしつ、かくいふは長徳二年四月廿四日なりけり、帥殿はつくしのかた成けれは、ひつしさるのかたにおはします、中納言殿はいつものかたなれは、たんはのかたのみちよりとて、いぬゐさまにもおはする、御くるまともひきいつる、（○中略、中宮御出家ノ條ニコ歌トムベ

隆家京ヲ出ヅ

隆家大江山ニテ中宮ニ消息及ビ歌ヲ奉ル

伊周關戸ノ院ニ宿ル

この殿はらのおはするを、世の人々のみるさま、少々の物見にはまさりたり、見る人涙をなかしたり、あはれにかなしなとは、よろしき事也けり、中納言殿は京いてはてたまひて、たむはさかひにて御馬にのらせ給ぬ、御車はかへしつかはすとて、としひつかはせ給けるうしかひわらはに、此うしはわかかたみにみよとてたへは、わらはふしまろひてなくさま、ことはりにいみし、御車は都にき、我御身はしらぬ山路にいらせ給ほとそいみしき、おほえ山といふ所にて、中納言、宮に御文かゝせ給、こゝまてはたいらかにまうてつきて侍、かひなき身なりとも、いま一たひまいりて御らんせられてや、やみはへりなんと、おもひ給ふるになむ、いみしうかなしう侍る、御ありさまゆかしきなりと、あはれにかきつけ給て、

うきことをおほえの山としりながらいとゝふかくもいるわか身かな

となむ思給へられ侍るなとかき給へり、宮にはあはれにかなしう、よろつを覺しまとはせ給て、物もおほえさせ給はす、たゝならぬ御有さまにて、かくさへならせ給ぬることゝ、返々内にも、女院にも、いみしくきこしめしおほす、そち殿はその日のうちに、山さき關戸の院と云ふ所にそとゝまらせ

給へる、この御ともには、さるへき撿非違使とも、四人そつかうまつりたりける、そのくのものともの、御車につきてまいるそ、あはれにゆゝしき、中納言の御ともには、左衞門尉延安といふ人は、長谷の僧都（興隆）のはらからの撿非違使なり、それそつかうまつりたりける、あさましき事つきもせす、（五月十日ノ條ニ收ム、）

伊周配流ノ時弓削嘉言ノ河尻ニテノ詠

〔拾遺和歌集〕（六別）　帥伊周つくしへまかりけるに、かはしりはなれ侍けるゆけのよしとき

思出もなきふるさとの山なれとかくれゆくはたあはれなりけり

隆家ノ出雲路ニテノ詠

〔後拾遺和歌集〕（九羈旅）　いつものくにゝなかされ侍けるみちにてよみ侍りける、　中納言隆家（伊周公弟道隆公子）

さもこそはみやこのほかにやとりせめうたて露けき草まくらかな

〔大鏡〕（中内大臣道隆）　またその年（長德二年）、花山院の御こと出きて、御つかさくらゐ（伊周）とられて、たゝつくしの權帥になりて、長德二年丙申四月廿四日にこそはくたり給にしか、御年二十三、いかはかりあはれにかなしかりしことそ、されとけにかならすかやうのこと、我をこたりてなかされ給にしもあらす、

大鏡著者ノ批評

伊周病ト稱シテ播磨ニ留マル

詔

伊周第宅

よろつの事身にあまりぬる人の、もろこしにも此國にもあるわさにそはへるなる、昔は北野の御こと、そかしなといひて、はなうちかむほとそあはれに見ゆ、この殿も御さえ日本にはあまらせ給へりしかは、（下略）

〔扶桑略記〕（二十七一條天皇上）　五月四日、權帥伊周離宮、十一日、中途稱病、暫留播磨、

〔愚管抄〕（二一條院皇帝年代記）　内大臣伊周　同（長德）二年四月廿四日左降太宰權帥、詔云、内大臣伊周朝臣、權中納言藤原朝臣隆家、去正月十五日夜、花山法皇御所乎奉射危云々、東三條院不豫而獻厭呪咀云々、須法律乃任當罪、然而有所思、内大臣乎太宰權帥仁、隆家乎出雲權守退賜云々、年廿三、在官三年、

〔皇代曆〕（二一條天皇）　長德二年、伊周、隆家左降詔云、去正月十五日夜、花山法皇奉射危々、東三條院玉體不豫シテ、厭魅呪咀云々、須法律ノ任ニ罪給ヘシ、内大臣ヲ太宰權帥、隆家ヲ出雲權守ニ、

〔中右記〕　大治五年正月卅日、癸酉、（中略）○行盛（藤原）朝臣入來云、故敦憲入道談云、鴨井者是故帥大臣、長德年中有事時之居處也、不可作事也者、大殿令作給天後、全無吉事、遂以燒亡、可謂凶所歟、

伊周流罪ノ相アリ

〔源平盛衰記〕十五相形事　昔登(通イ)乘ト申相人アリキ、帥内大臣伊周ヲハ、流罪ノ相オハシマスト相シタリケルカ、彼伊周公ノ類ナク通給ケル女房ノ許ヘ、寛平(和)法皇ノ忍テ御幸成ケルヲ驚シ進ラセントテ、蟇目ヲ以テ射奉リタリケレハ、流罪セラレ給ヘリ、

○扶桑略記、百練抄、歷代編年集成、一代要記、皇年代略記、清獬眼抄、古事談等、異事ナキヲ以テ略ス、伊周、隆家、從者ヲシテ、花山法皇ヲ御座所ニ射奉ラシムルコト、正月十六日ノ條ニ、明法博士ヲシテ、其罪名ヲ勘セシムルコト、二月十一日ノ條ニ、伊周ヲ播磨ニ、隆家ヲ但馬ニ留メシムルコト、五月十五日ノ條ニ、左遷ニ依リテ、大祓ヲ行フコト、同二十日ノ條ニ、山陵使ヲ發遣シテ、左遷ノコトヲ告グルコト、同二十一日ノ條ニ、開關及ビ解陣ノコト、六月九日ノ條ニ、伊周、隆家等ノ罪ヲ赦スコト、長德三年四月五日ノ條ニ見ユ、

左近衛權中將藤原正光ヲ藏人頭ニ補ス、

〔職事補任〕一條院藏人頭　左近權中將正四位下藤正光　長德二四廿四補、○公卿補任同ジ、

中宮御手ヅカラ御落飾

後ニ還俗セラル

五月大庚子晝朔

一日、庚子、中宮、御落飾アラセラル、

〔日本紀略〕一條院　五月一日、庚子、○中略　今日皇后定子落髮爲尼、

〔小右記〕五月二日、辛丑、○中略　又云、后昨日出家給云々、事頗似實者、

〔榮華物語〕五うら〳〵のわかれ　長德二年四月廿四日なりけり、○中略、伊周、隆家、配流ノコトカヽル、御車とも引き出つるまゝに、みや(定子)は御はさみして、御てつからあまにならせ給ぬ、内にはこの人々まかりぬ、宮は尼にならせ給ひぬとそうすれは、あはれ宮はたゝにもおはしまさゝらんものを、かくもの思はせたてまつる事とおほしつゝけて、泪こほれさせ給へは、忍ひさせ給、昔の長恨歌の物かたりなとも、かやうなる事にやと、かなしうおほさる事かきりなし、○本書、四月二十四日ニ作ルハ誤レリ、

〔百練抄〕一四條天皇　五月一日、○中略　今日中宮出家爲尼、中宮定子依帥(伊周)事出家、

〔權記〕長保二年十二月十六日、己未、○中略　皇后諱定子、前關白正二位藤原朝(道隆)臣長女、母高階氏、○中略　長德□(三)年有事出家、其後還俗、所生皇子、○下略

長德二年五月一日

二日、辛丑、右近衛中將藤原道綱、亡母ノ一周忌法事ヲ行フ、

〔小右記〕五月二日、辛丑、○中略、新中納言道綱、亡母周忌法事、送七僧粥時、又依候大内不訪向之由、自内差致信示送了、

○道綱母ノ傳、左ニ附載ス、

〔尊卑分脈〕藤原氏北家

倫寧
- 理能
- 長能
- 女子
- 女子　道綱卿母、歌人、本朝第一美人三人ノ内也、

〔藤氏系圖〕○前田家本

倫寧　文學生、正四下、
- 長能　伊賀守、從五下、拾遺撰者、
- 女子　法興院室、道綱母、歌人、

〔かけろふ日記〕中略、○上略、兼家ノ御嶽精進ノコトニカヽル、安和二年末雜載、諸家ノ條ニ收ム、（安和二年）うるうさ月に

道綱母ノ傳

世系

本朝第一美人三人ノ内

もなりぬ、つこもりよりなにこゝちにかあらん、そこはかとなくいとくるしけれと、さはれとのみ思ふ、いのちをしむと、人に見へすもありにしかなとのみねむすれと、みきく人たゝならて、けしやきのやうなるわさすれと、なほしるしなくて、ほとふるに、人はかくきよまはるほととて、れいのやうにもかよはす、○中略、兼家、蓮ノ實ヲ贈リ來ルコトニカヽル、下ニ收ム、よからすはとのみ思ふみなれは、つゆはかりをしとには（注綱）あらぬを、たゝこのひとりある人いかゝせんとはかりおもひつゝくるにそ、なみたせきあへぬ、なほあやしく、れいのこゝちにたかひて、おほゆるけしきもみゆへけれは、やむことなきそうなと、よひおこせなとしつゝ心みるに、さらにいかにもあらねは、かうしつゝ、しにもこそすれ、にはかにては、おほしきことも、いはれぬ物にこそ、あはれかくてはてなは、いとくちをしかるへし、あるほとにたにあらは、おもひあらむにたかひても、かたらひつへきをとおもひて、けうそくにおしかゝりて、かきけることは、いのちなかるへしとのみのたまへみえて、たてまつりてむとのみ、おもひつゝありつるそらことにもやなりぬらん、あやしくこゝろほそき心ちのすれはなん、つねにきこゆるやうに、よにひさしきことのい

病ム

芥子燒

高僧ヲ請ジテ祈ラシム

遺言ノ歌ヲ記シ唐櫃ニ納ム

道綱ニ對スル愛情

とおもはすなれは、ちりはかりをしきにはあらて、たゝこのをさなき人の（道綱）うへなん、いみしくおほえ侍るものはありける、たはふれにも、御けしきの物しきをは、いとわひしとおもひてはんへるめるをは、いとおほきなることなくて侍らんきはゝ、御けしきなと見せ給なゝいとつみふかき身にはへらは、

風たにもおもはぬかたによせさらはこのよのことはかのよにもみんはへらさ覽よにさへ、うと〳〵しくもてなし給人あらは、つらくなんおほゆへき、としころ御らんしはつましくおほえなから、かはかりもはてさりける御こゝろをみたまふれは、それいとよくかへりみさせたまへ、ゆつりおきてなと思ひたまへつるもしるく、かへりぬへかめれは、いとなかくなんおもひきこゆる人にも、いはぬことのおかしうなときこえつるも、わすれすやあらんとすらん、をりしもあれ、たいめむにきこゆへきほとにもあらさりけれは、

つゆしけきみちとかいとゝしての山かつ〳〵（ひ脱）ぬるゝ袖いかにせん

とかきて、はしに、あとにとひなともちりのことをなん、あやまたさなる、さへよくならへとなん、きこえおきたるとのたまはせよとかきてふんして、うへに、いみなとはてなむに、こらんせさすへしとかきて、かたはらなるからうつにゐさりよりていれつゝみる人あやしと思ふへけれと、ひさしくならは、かくたにものせさらんことの、いとむねいたかなへけれはなむ、○中略、大祓ノコト等ニカヽル、安和二年六月二十日ノ條ニ收ム、秋はくれ、冬になりぬれは、なに事にあらねと、ことさはかしきこゝちして、ありふる中、しも月にゆきはいとふかくつもりて、いかなるにかありけん、わりなく身こゝろうく、人つらく、かなしくおほゆるひあり、つく〳〵となかむるに思ふやう、

ふる雪につもるとしをはよそへつゝきえむこもなき身をそうらむる

なと思ふほとに、つこもりの日、春のなかはにもなりにけり、（天祿元年）○中略、殿上賭ノコト等ニカヽル、天祿元年三月十五日ノ條ニ收ム、されはよと思ふに、ありしよりも、けにものそかなしき、つく〳〵とおもひつゝくることは、なほいかてこゝろとして、新にもゑにしかなと、おもふよりほかのこともなきを、たゝこのひとりある人（道綱）を思ふにそ、いとかなしき、人となして、うしろやすからん女なとに、あつけてこそ、しかも心やすからんとはおもひしか、いかなる心ちして、さすらへんす

田家ヲ思ヒ立ツ

らんとおもふに、なほいとしにかたし、いかゝはせん、かたちをかへて、よを思ひはなるやと心みんとかたらへは、またふかくもあらぬなれと、いみしうさくりもよゝとなきて、さなりたまはゝ、まろもほうしになりてこそあらめ、なにせんにかは、よにもましろはんとて、いみしくよゝとなけは、我もえせきあへねと、いみしさに、たはふれにいひなさんとて、さてたかゝはては、いかゝしたかはんすると、いひたれは、やをらたちはしりて、しすゑたるたかを、にきりはなちつ、見る人も涙せきあへす、まして日くらしかたし、心ちにおほゆるやう、

あらそへは思ひにわふるあまくもにまつそるたかそかなしかりける

とそ、ひくるゝほとは、ふみゝえたり、天下のそらことならんとおもへは、たゝいまこゝちあしくて、漸とはとてやりつ、○下略、兼家、來訪ノコトニカヽル、下ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

中古三十六歌仙ノ一人

〔中古歌仙三十六人傳〕道綱母　伊勢守倫寧女、○拾芥抄同ジ、

〔八雲御抄〕二撰集　一女房　母女

名譽歌仙

暗所ニテ歌ヲ案ズ

歌集

日記

大納言道綱母、或唯道綱母、倫寧女とも、

〔和歌色葉集〕上　六名譽歌仙者　女房八十二人

同々（後拾）大納言道綱母

〔愚祕抄〕下　道綱母は、くらき所にてよみならひたるとかや、いつも燈火をそむけて、目をとちて案せられ侍りけるとなん、○上下略

〔勅撰作者部類〕女部　右大將道綱母陸奥守藤原倫寧女、拾遺集、夏、一、雜下、一、戀四、一、雜賀、三、哀、一、後拾遺集戀二、一、戀四、一、雜一、三、雜四、一、雜六、一、言、道綱母、大納言、撰集雜一、一、雜三、一、續後撰集釋、一、詞花集雜上、三、新古今集戀四、新勅續千載集戀三、一、續古今集雜上、一、玉葉集春上、一、賀、一、戀二、一、戀四、三、雜三、一、續後拾遺集戀四、一、雜中、一、風雅集戀一、一、新千載集戀三、一、哀、三、

〔萬代和歌集作者部類〕道綱右大將母、春上、一、戀五、一、雜一、三、雜二、一、雜三、一、賀、一、

〔道綱母集〕○宮內省圖書寮本　右大將道綱母、陸奥守藤原倫寧女、母刑部大輔認（源カ）女、東三條殿妾、道綱、東三條殿（兼家）殿三男、

〔かけろふ日記〕上　かくありしときすきて、世中にいとものはかなくと（天曆八年）長德二年五月二日

にもかくにもつかて、よにふる人ありけり、かたちとても人にもにす、心たましひもあるにもあらて、かうものゝえうにもあらてあるも、ことわりとおもひつゝ、たゝふしおき、あかしくらすまゝに、世中におほかたふるものかたりのはしなとをみれは、よにおほかるそらことたにあり、人にもあらぬみのうへまてかき、日記して、めつらしきさまにもありなん、天下の人のしなたかき女とゝはんためしにもせよかしと、おほゆるもすきしとしつきころのことも、おほつかなかりけれは、さてもありぬへきことなん、おほかりける、○中略、兼家、通ヒ初ムルコトヲ、下ニ收ムル、かくとし月はつもれと、思ふやうにもあらぬみをしなけゝは、こゑあらたまるもよろこほしからす、猶ものはかなきをおもへは、あるかなきかの心ちするかけろふのにきといふへし、○解環本ヲ以テ校訂ス、

蜻蛉日記ト名ク

〔かけろふ日記〕下　○上略、道綱、女ト和歌贈答ノコトニカ（天延二年）ル、寛仁四年十月十五日ノ條ニ收ム、ことしいたうあるゝことなくて、はたらゆき、ふたゝひ許そふりつる、ずけ（道綱）のついたちのものとて、またあをむまにものすへきなと、ものしつるほとに、くれはつるひにはなりにけり、あすの物、おりまかせつつ人にまかせなとしておもへは、かうなからへつゝ、けふになりにけるもあさましうみたまなと見るにも、れいのつきせぬことにおほほれてそ、はてにける、年のはてなれは、よいたうふけてそ、たゝ（誤脱）きくなるとに（ア）平に（ン）、○以下闕文、學習院本、解環本ヲ以テ校訂ス、

かけろふの日記

〔大鏡〕中太政大臣兼家　二郎君、陸奥守倫寧のぬしのむすめのはらにおはせし君なり、○中略　この母君はきはめたる和歌上手におはしけれは、此（藤原）殿のかよはせ給けるほとのこと、歌なとかきあつめて、かけろふの日記となつけて、世にひろめ給へり、

遊士日記

〔八雲御抄〕一學書　私記　遊士日記、傳大納言母、

蜻蛉日記絵

〔本朝書籍目錄〕假名　蜻蛉日記　三卷

〔明月記〕天福元年三月廿日、日來撰出物語月次、十二月、各五所、不入源氏幷狹衣、於歌者拔群、他事不可然、源氏當時中宮被新圖、狹衣又院御方別被書、此所撰、○中略　又蜻蛉日記十所許撰出、同送金（藤原）吾許、○中略　其外蜻蛉所殘歟、

〔かけろふ日記〕下　○上略、相撲節ノコトニカ（天祿三年七月是月ノ條ニ）ル、收ム、我は、いるのよのつね、あきのつれ〳〵いとあはれふかきなかめをするよりは、のこらむ人のお

絵ヲ畫ク

もひいてにも見よとて、ゑをそかく、さるうちにも、いまやけふやと、またるゝいのち、やう〳〵つきたちて、ひもゆけは、されはよゝもしなしものを、さいわひある人こそ、命はつゝむれとおもふに、うへもなく、（藤三年）九月もたちぬ、廿七八日のほとに、つちをかすとて、ほかなるよしもめつらしきことありけるを、人つけにきたるもなにことともおほへねは、うとてやみぬ、○下略、般若寺ニ紅葉見

園藝ノ趣味草ノ若苗ヲ植ウ

〔かけろふ日記〕中　○上略、唐崎ニ赴キ、禊スル（天禄元年）コトニカヽル、下ニ收ム、

ニ赴クコトニカヽル、下ニ收ム、學習院本、解環本ヲ以テ校訂ス、

まゝに、くさともつくろはせなとせしに、あまたわかなへのおひたりしを、とりあつめさせて、やのゝきにあてゝうゑさせしか、いとおかしうはらみて、みつまかせなとせさせしかと、いろつけるはのなつみてたてるをみれは、いとかなしくて、

いなつまのひかりたにこぬやかくれは軒はのなへもゝのおもふらし

とみえたる、○中略、兼家、來訪ノコト等ニカヽル、下ニ收ム、（天禄二年）二月も十よ日になりぬ、きくとところに、とよなんかよへると、ちくさに人はいふ、つれ〳〵とあるほとに、ひかんにいりぬれはなほあるよは、しやうしせんとて、うはむしろ、たゝのむしろのきよきに、しきかへさすれは、ちりはらひなとするをみるにも、かやうのことは、思ひかけさりし物をなとおもへは、いみしうて、

うちはらふちりのみつもるさむしろをなけくかすにはしかしとそおもふ　○續千載和歌集、萬代和歌集同ジ、

これよりやかて、なかさうしゝて、やまてらにこもりなんに、さてもありぬへくは、いかてなほよの人のたへやすく、そむくかたにもやなりなましと、思ひたつを、人〳〵しやうしは、秋ほとよりすることそ、いとかしこかなれといへは、えさらす思ふへき、うふやのこともあるを、これすこすへしとおもひて、たゝむ月をそまつ、さはれよろつにこのよのことは、あいなくおもふを、（天暦元年）こそ春くれたけうゑむとてこひしを、このころたてまつらんといへは、いさや、ありもとくましうおもひにたるよの中に、こゝろなけなるわさを、やしおかんといへは、いとこゝろせはき御ことなり、行基菩薩はゆくするゑの人のためにこそ、みなる木はうゑたまひてけれなといひて、ほらせたれは、あはれにありしところとて、見む人もみよかしと思ふに、なみたこほれてうゑさす、二日はかりありて、雨いたくふり、こち風はけしくふきて、ひと

庭ニ呉竹ヲ植ウ

自然ニ對スル感興

すちふたすちうちかたふきたれは、いかてなほさせん、あまゝもかなと思ふまゝに、

なひくかなおもはぬかたにくれ竹のうきよのすゑはかくこそありけれ（萬代和歌集）

（同ジ、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、）

〔かけろふ日記〕（下）（○上略、兼家ト消息贈答ノコトニカヽル、下ニ收ム、）このころ、くものたゝすまひ、しつこゝろなくて、ともすれはたこのもすそおもひやらるゝほとゝきすのこゑもきかす、ものおもはしき人はいこそねられさなれ、あやしう心ようねらるゝけなるへし、これもかれも、一よきゝき、このあか月にもなきつるといふを、人しもこそあれ、われしもまたしといはんも、いとはつかしけれは、物はいはて、心のうちにおほゆるやう、

我そはにとけてぬらめやほとゝきすものおもひまさるこゑとなくらん

とそしのひていはれける、かくてつれ〳〵と六月になしつ、（天祿三年）ひんかしおもてのあさひのけ、いとくるしけれは、みなみのひさしにいてたるに、つゝましき人のけちかくおほゆれは、やをらかくれふしてきけは、せみのこゑいとしけうなりにたるを、おほつかなうて、またみゝをやしなはぬおきなあ

父倫寧ノ家ニ赴キ長精進ス

りけり、にはゝくとて、はゝきをもちて、きのしたにたてるほとに、ゝはかにいちはやうなきたれは、おとろきて、ふりあふきていふやう、よひそ〳〵といふ、なはせみきにけるは、むしたにときせちをしりたるよと、ひとりこつにあはせて、しか〳〵となきみちたるに、をかしうもあはれにもありけんこゝちそ、あちきなかりける、（○下略、兼家來訪ノコトニカヽル、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、）

〔かけろふ日記〕（中）（○上略、兼家ノ消息ノコトニカヽル、下ニ收ム、）今は三月つこもりになりにけり、いとつれ〳〵なるを、いみもたかへかてら、しはしほかにとおもひて、（倫寧）あかたありきの所にわたる、おもひさはりしことも、たひらかになりにしかは、なかきしやうしはしめんと思ひたちて、物なと、ゝりしたゝめなとするほとに、かうしはなほやおもからん、ゆるされあらは、くれにいかゝとあり、これかれ見きゝて、かくのみあくからしはつるは、いとあしきわさなり、なほこたみたに、御かへりやむことなきにもとさはけは、たゝ月もみなくに、あやしくとはかり物しつ、よにあらしとおもへは、いそきわたりぬ、つれなさはそふに、ようちふけてみえたり、れいのわきたきることもおほかれと、ほとせはく人さはかしきところにて、いきもえせす、むねにてをゝきた

長精進ヲ始ム

らむやうにてあかしつ、心とめてそのことかのこと、物すへかりければ、いそきぬるをしもあるへき心を、またけふやけふやと思ふに、おとなくて四月になりぬ、（ママ）もいとちかきところなるを、みかとにてくるまたてり、うちにやおはしまさんすらんなと、やすくもあらすいふ人さへあるそ、いとくるしき、ありしよりも、まして心をきりくたく心ちす、かへりことをも、なほせよ〳〵といひし人さへうくつらし、ついたちの日、（道綱）をさなき人をよひて、なかきしやうしをなんはしむる、もろともにせよとありとてはしめつ、我はたはしめつ、我はたはしめよりも、こと〳〵しうはあらす、たゝかはらけに、かうゝちもりて、けうそくのうへにをきて、やかてをしかゝりて、佛をねんしたてまつる、その心はへたゝきはめてさいはひなかりける身なり、としころをたに、よに心ゆるひなく、うしと思ひつるを、ましてかくあさましくなりぬ、とくしなさせたまひて、ほたいかなへたまへとそ、おこなふまゝに、涙そほろ〳〵とこほるゝ、あはれいまやうは、女もすゝひきさけ、きやうひきさけぬなしときゝしとき、あまゝさりかほなさる物そ、やもめにはなるてふなと、もときし心は、いつちかゆきけん、よのあけくるゝも、心もとなく、

いとまなきまて、そこはかともなけれと、おこなふとそのまゝに、あはれさいひしをきく人、いかにおかしとおもひみるらん、はかなかりけるよを、なとてさいひけんと、思ふ〳〵おこなへは、かたとき涙うかはぬ時なし、人めそいとまさりかほなく、はつかしけれは、おしかへしつゝ、あかしくらす、廿日はかりおこなひたるゆめに、わかかしらをとりおろして、ひたひをわくとみる、あしよしもえしらす、七八日はかりありて、我はらのうちなるくちなはありきてきもをはむ、これをちせんやうは、おもてにみつなんいるへきとみる、これもあしよしもしらねと、かくしるしおくやうは、かゝる身のはてをみきかん人、夢をも佛をもちゐるへしや、もちゐるましやと、さためよとなり、五月にもなりぬ、我いへにさたにとまれる人のもとより、おはしまさすとも、しやうふふかては、ゆゝしからんを、いかゝせんするといひたり、いてなにかゆゝしからん、

世の中にある我身かはわひぬれはさらにあやめもしられさりけり

とそ、いひやらまほしけれと、さるへき人しなけれは、心におもひくらさる、かくていみはてぬれは、れいのところにわたりて、ましていとつれ〳〵に

倫寧歸宅ヲ促ス

てあり、○中略、天祿二年六月、般若寺籠居中ノコトニカヽル、下ニ收ム、かくおもて〳〵に、とさまかくさまに、いひなさるれと、我こゝろは、つれなくなんありける、あしともよしともあらんを、いなむましき人は、此ころきやうに物したまはす、ふみにてかくてなんとあるに、はたよかなり、しのひやかにて、さてしはしもおこなはるとあれは、いとこゝろやすし、○中略、道綱ヲ兼家ノ許ニ遣スコトニカヽル、下ニ收ム、こたみは、よにしふらすへくも物せしと、おもひさはくほとに、我たのむ人、ものよりたゝいまのほりけるまゝにきて、天下のことかたらひて、けにかくてもしはしおこなはれよと思ひつるを、このきみいとくちをしうなりたまひにけり、はやなを物しねゝけふも日ならは、もろともに物しね、今日もあすむかへにまゐらんなと、うたかひもなくいはるゝに、いとちからなく思ひわつらひぬ、

○下略、兼家、迎ニ來ルコト等ニカヽル、下ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

〔かけろふ日記〕下　○上略　三日になりぬるよ、ふりけるゆき三四寸許たまりていまもふる、すたれをまきあけてなかむれは、あなとかんといふこゑ、こゝかしこにきこゆ、風さへはやし、よの中いとあはれなり、さてひはれなとして、八日のほとに、あかたありきのところにわたりたるに、おほくわかき人かちにて、さうのこと、ひはなと、をりにあひたるこゑにしらへなとして、うちわらふことかちにてくれぬ、つとめてまらうとかへりぬるのち、心のとかなり、たゝいまあるふみを見れは、なかきものいみに、うちつゝき著座（坐カ）といふわさしては、つゝしみけれは、けふなんいとゝくとおもふなと、いとこまやかなり、かへりことものして、いとゝけにあめれと、よにもあらし、いまは人しれぬさまに、なりゆくものをと、おもひすくしてあさまし、うちとけたることとおほくてあるところに、むま時許におはします〳〵とのゝしる、いとあはたゝしき心ちするに、はひいりたれは、あやしく我かひとりにもあらぬにて、むかひゐれは、心地もにらなり（モカ）、しはしありて、たいなとまゐりたれは、すこしくひなとして、ひくれぬとみゆるほとに、○中略、兼家トノ關係ノコトニカヽル、下ニ收ム、（天祿三年三月）一日のひより四日、れいのものいみときく、こゝにつとひたりし人々は、みなみふたかるとしなれは、しはしもあらしかし、廿日あかたありきのところへみなわたられにたり、心もとなきことはあらしかしとおもふに、心うきそまつおほえけんかし、かくのみうくおほゆるみなれは、このいのちを、ゆめ許おしからすおほゆる、このみのいみともは、〻しらにおし

父ノ家ニ赴ク

又父ノ家ニ赴ク

父一家ノ者來リテ同居ス

つけて、なとみゆるとて、もとかしからんみのやうなりけれ、その廿五日に、ものいみなり、なりはつるよしも、かとのをとすれは、かうてなんかたうさしたるとものすれは、たうるゝかたにたちかへりおとす、又のひは、れいのかたふたかると、しか〳〵ひるまにみえて、御たいまつといふほとにそかへる、それよりれいのさはりしけくきこえつゝひへぬ、〇中略、賀茂祭ノコトニカヽル、天祿三年四月二十日ノ條ニ收ム、廿よ日、いとたまさかなり、けり、あさましきことと、めなれにたれは、いふかひなくて、なかころなきさまにもてなすも、わひぬれはなめりかしと、かつ思へはいみしうなん、あはれはありしよりけにいそく、その頃、あかたありきのいへなくなりにしかは、こゝにうつろひて、なゐおほくことさはかしくて、あけくるゝも、人めいかにとおもふ心あるまておとなし、七月十よ日になりて、まらうとかへりぬれは、なこりなうつれ〳〵にて、ほにのことのふうなと、さま〳〵になけく人々のいきさしをきくもあはれにもあり、やすからすもあり、四日れいのことてうして、まところのをくりふみそへてあり、いつまてかうたにと物はいはておもふさなから八月になりぬ、ついたちの日、あめふりくらす、しくれたちたるに、ひうしの

中川ノ家ニ到ル

時はかりにはれて、くつ〳〵ほうしいとかしかましきまてなくをきくにも、我たにものはといはる、いかなるにかあらん、あやしうも、心ほそうなみたうかふひなり、たゝんつきにしぬへしといふさとしもしたれは、この月にやともおもふ、〇中略、相撲ノ節ノコトニカヽル、天祿三年七月是月ノ條ニ收ム、（天延元年八月）うつりにけりと思から、うつし心もなくてのみあるに、すむところは、いよ〳〵あれゆくを、人すくなにもありしかは、人にものして、わかすむところにあらせんといふことを、（倫寧）我たのむ人さためて、今日あすひ（廣幡）ろはた、なかゝはのほとにわたりぬへし、さへしとは、さき〳〵ほのめかしたれと、今日なともなくてやはとて、きこえさすへきこともしたれと、つゝしむことありてなんとて、つれもなければは、なにかはとて、おともせてわたりぬ、山ちかうかはらかたかけなるところに、今は心のほしきにいりたれは、いとあはれなるすまひとおほゆ、二三日になりぬれと、しりけもなし、五六日許さりけるを、つけさりけるとと許あり、かへりことに、さなんとはつけきこゆとなんおもひしかと、ひなきところにはたかたうおほえしかはなん、見たまひなれにしところにて、いまひとたひきこゆへくは思しなと、たえたるさまにものしつ、さもこそは

あらめ、ひなかなれはなんとて、あとをたちたり、九月になりてまたしきに、かうしをあけて見いたしたれは、うちなるにも、となるにも、かはきりたちわたりて、ふもとも見えぬ山の見やられたるも、いとものかなしうて、

同胞ト事忌シテ運ヲ驗ス

なかれてのとこたのみてはこしかとも我なかゝはゝあせにけらしも

とそ、いはれける、ひんかしのかとのまへなるたともかりて、ゆひわたしてかけたり、たまさかにも見えとふ人には、あをいねからせて、むまにかひ、やいこめさせなとするわさに、おりたちてあり、（道綱）こたかの人もあれは、たかともとにたちいてゝあそふ、〇下略、兼家、下襲ノ調製ヲ依頼シ來ルコトニカカル、下ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

〔かけろふ日記〕中　かくはかなゝから、としたち（安和二年）かへるあしたにはなりにけり、としころあやしく、よの人のすることといみなともせぬところなれはや、かうはあらんと心おきて、ゐさりいつるまゝに、いつらこゝに、人々ことしたに、いかてことといみなとして、よの中こゝろみんといふをきゝて、（長德二年）はらからとおほしき人、またふしなから物きこゆ、あめつちをふくろにぬひてとすゝるにいとおかしくなりて、さらにみには、みそかみそよは、我もと

同胞般若寺ニ來訪

にといはむといへは、まへなる人々わらひて、いとおもふやうなることにも侍るかな、おなしくはこれをかゝせたまひて、とのにやはたてまつらせ給はぬといふ、ふしたりつる人もおきて、いとよきことなり、てんけのえはうにもまさらむなと、わらふ〳〵いへは、さなからかきて、ちひさき（道綱）人して、たてまつし（りカ）たれは、このころときのよの中人にて、人はいみしくおほくまゐりこみたり、うちへもとくとて、いとさはかしけなりけれとかくそある、〇中略、天祿二年六月、般若寺籠居中ノコトニカヽル、下ニ收ム、我もなはらからひとり、又人もかへりに物したり、はひよりて、まついかなる御こゝちそと、さとりておもひかたく參るよりも、山にいりたちては、いみしく物のおほえはへることなく、ふさすまるなりとて、よゝとなく、人やりにもあらねは、ねんしかへせと、えたへすなきみわかる（らヒカ）み、よろつのことを、いひあかしてあけぬれは、るいしたる人いそくとあるを、けふはかへりて、のちにまいりてはへらん、そも〳〵かくてのみやはなといひても、いとこゝろほそけにいひても、かすかなるさまにて、かへるこゝちけしうはあらねは、れいのみおくりてなかめいたしたるほとに、〇下略、兼家、道隆ヲ遣シテ、物ヲ般若寺ニ贈ルコトニカヽル、下ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

〔かけろふ日記〕上　○上略、母歿スルコトニカヽハカナヽカラ、康保元年、年末雜載ニ收ム、

叔母

もすこしつ、ひとつとところには、せうとひとりをはとおほしき人そすむ、それをおやのことおもひてあれと、なほむかしをこひつヽ、なきあかしてあるに、○中略、亡母ノ一周忌ノコトニカヽル、康保元年、年末雜載ニ收ム、さてきのふけふは、（朔日）せきやまはかりにそ、ものすらんかしとおもひやりて、月のいとあはれなるになかめやりてゐたれは、（叔母）あなたにもまたおきて、ことひきなとしてかくいひたり、

彈琴

ひきとむるものとはなしにあふさかのせきのくちめのねにそヽほつる

叔母ト和歌贈答

これも、おなしおもふへき人なれはなりけり、

おもひやるあふさかやまのせきのねはきくにもそてそくちめつきぬる

なと、おもひやるに、（康保三年）としもかへりぬ、三月はかり、こヽにわたりたるほとにしも、くるしかりそめて、いとわりなうくるしとおもひまとふを、いといみしうとみる、いふことは、こヽにもいとあらまほしきを、なにことも、せんにいとひんなかるへけれは、かしこへものしなん、つらしとなおほしそ、には

叔母病ム

かにも、いくはくもあらぬ心ちなんするなん、いとわりなき、あはれしぬとも、おほしいつへきことのなきなん、いとかなしかりけるとて、なくをみる

叔母ノ遺言

に、ものおほえすなりて、又いみしうなかるれは、なヽき給ひそ、くるしさまさる、よにいみしうヽかるへきわさは、心はからぬほとにかヽるわかれせんなんありける、いかにしたまはんすらん、ひとりはよにおはせしな、さりとも、おのかいみのうちにし給な、もしヽなすはありともかきりと思ふなり、ありともこちはえまゐるまし、おのかさかしからんときこそ、いかてもいかても、ヽのしたまはめとおもへは、かくてしなは、これこそは、見たてまつるへきかきりなめれなと、ふしなからいみしうかたらひてなく、これかれある人々よひよせつヽ、こヽには、いかにおもひきこえたりとか見る、かくてしなは、又たいめんせてややみなんとおもふこそ、いみしけれといへは、みなヽきぬ、みつからは、ましてものたにいはれす、たヽなきにのみなく、かヽるほとに、心ちいとおもくなりまさりて、くるまさしよせてのらんとて、かきおこされて、人にかヽりてものす、うちみおこせて、つく〳〵（理脈カ）うちまもりて、いといみしとおもひたり、とまるはさらにもいはす、このせうとなる人なん、なにかヽくまか〳〵しうさらになてうことかおはしまさん、はやたてまつりなんとて、やかてのりて、かヽへてものしぬ、思ひやる心ち、い

長德二年五月二日

ふかたなし、ひにふたゝひ、みたひふみをやる、人にくしと思ふ人もあらんとおもへとて、いかゝはせん、かへりことは、かしこなるおとなしき人して、かゝせてあり、みつからきこえぬかわりなきことゝのみなん、きこえ給なとそある、ありしよりも、いたうわつらひまさるときけは、いひしこと、みつからみるへうもあらす、いかにせんなと思ひなけきて、十よ日にもなりぬ、と經すほうなとして、いさゝかをこたりたるやうなれは、ゆふ(ゆゑ)のことみつからかへりことす、いとあやしう、おこたるともなくて、ひをふるに、いとまとはれしことはなけれはにやあらん、おほつかなきことなと、ひとまにこま〳〵とかきてあり、ものおほえにたれは、あらはになともあるへうもあらぬを、よのまにわたれ、かくてのみ日をふれはなとあるを、人はいかゝは思ふへきなとおもへと、われもまたいとおほつかなきに、たちかへりおなしことのみあるをいかゝはせんとて、くるまを給へといひたれは、さしはなれたる、らうのかたに、いとようとりなしゝつらひて、はしにまちふしたりけり、火とほしたるに、ひけたせておりたれは、いとくらうていらんかたもしらねは、あやしうこゝにそあるとて、ゝをとりてみちひく、なとかうひ

さしうはありつるとて、ひころありつるやう、くゝしかたらひて、とはかりあるに、火ともしつけよ、いとくらし、さらにうしろめたくはなほ(お脱カ)しそとて、ひやうふのうしろに、ほのかにともしたり、またいをなともくはす、こよひなんおはせは、もろともにとてある、いつらなといひて、ものまゐらせたり、すこしくひなとして、せしたちありけれは、ようちふけて、こしんにとて、もしたれは、いまはうちやすみ給へ、ひころよりは、すこしやすまりたりといへは、たいとこ、しかおはしますなりとてたちぬ、さてさはあけぬるを、人なとめせといへは、なにかまたいとくらからん、しはしとてあるほとに、あかうなれは、をのことともよひて、しとみあけさせてみつ、み給へ、くさともはいかゝうゑたるとて、みいたしたるに、いとかたり(はカ)なるほとになりぬなといそけは、なにかいまは、かゆなとまゐりてとあるほとに、ひるになりぬ、ていさもろともにかへりなん、またはものしかるへしなとあれは、かくまゐりきたるをたに、人いかにとおもふに、御むかへなりけるとみは、いとうたて、ものしからんといへは、さらはをのことも、くるまよせよとて、よせたれは、のるところまても、かつ〳〵とあゆみいてたれは、いとあはれとみる

〳〵いつか御ありきはなといふほとになみたうきにけり、いと心もとなけれは、あすあさてのほとはかりには、まゐりなんとて、いとさう〳〵しけなるけしきなり、すこしひきいて、うしかくるほとに、みとほせは、ありつるところにかへりて、みおこせて、つく〳〵とあるをみつゝ、ひきいつれは、心にもあらて、かへりみのみそせらるゝかし、○下略、兼家音信ノコトニカ下ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

叔母般若寺ニ來訪ス

〔かけろふ日記〕中

○上略、天祿二年六月、般若寺ニト=カヽル、下ニ收ム、

しき人ものしたり、いとめつらかなるすまひなれは、しつ心もなくてなむかたらひて、五六日々ふるほと、六月さかりになりにたり、○中略、般若寺籠居中ノコトニカヽル、下ニ收ム、また人のふみともあるをみれは、さてさのみやはあらんとする、日のふるまゝに、いみしくなん思ひやるなと、さま〳〵にとひたり、又の日かへりことす、さてのみやはとある人のもとに、かくてのみとしも思ふたまへねと、なかむるほとになん、はかなくてすきつ、日かすそつもりける、

般若寺ニ籠居中近親ノ者ト消息ヲ贈答ス

かけてたにおもひやはせし山ふかくいりあひのかねにねをそへむとは

又の日かへりことあり、ことはかき、あふへくもあらす、いりあひになん、きもくたくる心ちするとて、

近親ノ者ニ和歌ヲ託ス

いふよりもきくそかなしきしきしまのよにふるさとの人やなになり

とあるを、いとあはれにかなしくなかむるほとに、とのゐの人あまたありしなかに、いかなる心あるにかありけん、こゝにある人のもとに、いひおこせたるやう、いつれもおろかにおもひきこえさせさりし御すまゐなれと、まかてしよりは、いとゝめつらかなるさまになん、思ひいてきこえさする、いかにおもとたちも、おほしみたてまつらせ給ふらん、いやしきもといふなれは、すへて〳〵きこえさすへきかたならさらん、

（兼家ノ侍）（道綱母ノ侍女）

身をすてゝうきをもしらぬたひたにも山ちにふかくおもひこそいれ

といひたるを、もていてゝ、よみきかするに、またいといみし、かはかりのことも、またいとかくおほゆる時ある物なりけり、はやかへりことせよとてあれは、をたまきは、かく思ひしることもかたきとよと思ひつるを、御まへにもいとせきあへぬまてなん、おほしためるを、みたてまつらるも、たゝおしはかりたまへ、

思ひいつるときそかなしきおく山のこのした露のいとゝしけきに

近親ノ者ヨリ消息ヲ贈ラル

となんいふめる、○中略、道綱ニ託シ、消息ヲ兼家ニ贈ルコトニカヽル、下ニ收ム、そのくれて又の日、なましそくたつ人とふらひにものしたり、わりこなとあまたあり、まついかてかくはなにとなと、せさせ給ふにかあらん、ことなることあらては、いとひんなきわさなりといふに、心におもふやう、身のあることをかきくつしいふにそ、いとことわりといひなりて、いといたくなく、日くらしかたらひて、いとゆふくれのほと、れいのいみしけなることゝもいひて、かねのこゑともしはへるほとにそ、かへる心ふかく、もの思ひしる人にもあれは、まことにあはれとも、思ひいくらんと（そカ）思ふに、またの日たひにひさしくもありぬへきさまの物とも、あまたある心にはいひつくすへくもあらす、かなしうあはれなり、かへりしそらなかりしことのはのなかに、こたかきみちをわけいりけんとみしまゝに、いと〳〵いみしうなんなとよろつかきて、

世の中のよのなかならは夏草のしけき山へもたつねさらまし

ものをかくておはしますをみたまへおきて、まかりかへることゝ思ふ給へしに、いぬめもみなくれまとひてなん、あかきみふかくものおほしみたるへかめるかな、

道綱母ト藤原兼家

兼家通ヒ初ム

世中はおもひのほかになるたきのふかき山ちをたれしらせけむ

なと、すへてさしむかひたらんやうに、こまやかにかきたり、（前選）なるたきといふそ、このまへより行水なりける、かへりとも思ひいたるかきりものして、たつねたまへりしも、けにいかて思ふ給へりしと、

物おもひのふかさくらへにきてみれは夏のしけりもゝのならなくにまかてむことは、いつともなけれと、かくのたまふことなん、思ふ給へわつらひぬへけれは、

身ひとつのうくなるたきを尋ぬれはさらにかへらぬ水もすみけり

とみれは、ためしあることゝちしてなんなとものしつ、○下略、女御登子ト消息贈答ノコトニカヽル、

〔かけろふ日記〕上　（天暦八年）

○上略、日記ノコトニカヽル、上ニ收ム、さてあのけかりしすきことゝもの、それはそれとして、かしはきのこたかきわたりより、かくいはせんとおもふことありけり、れいの人は、あないするたより、もしはなま女なとして、いはすることとそあれ、これはおや（倫壁）とおほしき人はたはふれにも、まめやかにも、ほのめかしゝに、ひけき○解環本、ほのめかしうけひきニ作ル、ことしいひつきをもし

兼家ト和歌ノ贈答

らすかほに、むまにはひのりたる人してうちたゝかす、たれなといはする
に、おほつかなからすさわひ（○解環本、さわい＝作ル、）たれは、もてわつらひとりいれて、
もてさはく、みれはかみなとも、れいのやうにもあらす、いたらぬところな
しと、きゝふるしたるてもあらしとおほゆるまてあしけれは、いとそあや
しき、ありけることは、

おとにのみきけはかなしなほとゝきすことかたらはんとおもふこゝろあり（○風雅和歌集）

同ジ、

とはかりそある、いかにかへりことはすへくやあるなと、さたむるほとに、
かたいなる人ありて、なほとかしこまりてこらすれは、
かたらはん人なきさとにほとゝきすかひなかるへきこゑなふるしそ（○風雅和歌集）

同ジ、

これをはしめにて、またゝもおこすれと、かへりことともせさりけれは、又、
おほつかなおとなきたきの水なれやゆくへもしらぬせをそたつぬる
これをいまこれよりと、いひたれは、しれたるやうなりやかてかくそある、
ひとしれすいまや〳〵とまつほとにかへりこぬこそわひしかりけれ

とありけれは、れいの人、かしこし、をさ〳〵しきやうにもきこえんこそ、よ
からめとて、（叔母）さるへき人してあるへきに、かゝせてやりつ、それをしもまめ
やかにうちよろこひて、しけうかよはす、またそへたるふみゝれは、

はまちとりあともなきさにふみゝぬはわれもたつなみうちやけつらん

このたひもれいのまめやかなるかへりことする人あれはまきらはしつ、
又もあり、まめやかなるやうにてあるも、いとおもふやうなれと、このたひ
さへなうは、いとつらうもあるへきかなゝと、まめふみのはしにかきて、そ
へたり、

いつれともわかぬ心はそへたれとこたひはさきにみぬ人のかり（○萩野本、かり＝作ル、）

とあれと、れいのまきらはしつ、かゝれはまめなることにて、月日はすこし
つ、あきつかたになりにけり、そへたるふみに、心さかしらついたるやうに
みえつる、うさになんねんしつれと、いかなるにかあらん、

しかのねもきこえぬさとにすみなからあやしくあはぬめをもみるかな

とあるかへりこと、

長德二年五月二日

たかさこのをのへわたりにすまふともしかさめぬへきめとはきかぬを
けにあやしのことやとはかりなん、又ほとへて、
あふさかのせきやなか〳〵ちかけれとこえわひぬれはなけきてそふる
かへし
こえわふるあふさかよりもおとにきくなこそをかたきせきとしらなむ○新千載和歌
集、同
なといふ、まめふみかよひ〳〵て、いかなるあしたにかありけむ、
ゆふくれのなかれくるまをまつほとになみたおほゐのかはとこそなれ
かへりこと
おもふことおほゐのかはのゆふくれはこゝろにもあらすなかれこそすれ
また三日はかりのあしたに、
しの〵めにおきけるそらはおもほえてあやしくつゆときえかへりつる
かへし
さためなくきえかへりつるつゆよりもそらたのめするわれはなになり
かくてあるやうありて、しはしたひなるところにあるにものして、うとめ

て、けふたにのとかにとおもひつるを、ひなけなりつれは、いかにそみには
山かくれとのみなん、とあるかへりことにたゝ、
おもほえぬかきほにをれはなてしこのはなにそつゆはたまらさりける
なといふほとに、九月になりぬ、つこもりかたに、しきりて二よはかりみえ
ぬほと、ふみはかりあるかへりことに、
きえかへりつゆもまたひぬ袖のうへにけさはしくるゝそらもわりなし○後拾遺和歌
集、同
たちかへり、かへりこと、
おもひやるこゝろの空になりぬれはけさはしくるとみゆるなるらん○續拾遺和歌
集、同
とて、かへりことかきあへぬほとにみえたり、又ほとへてみえをこたるほ
と、あめなとふりたるひくれに、こんなとやありけむ、
かしはきのもりのしたくさくれことになほたのめとやもるをみる〳〵○後拾遺和歌
集、同
かへりことは、みつからきてまきらはしつ、かくて十月になりぬ、こゝにも

のいみなるほとを、心もとなけにいひつゝ、

なけきつゝかへすころものつゆけきにいとゝそらさへしくれそふらん

かへし、いとふるめきたり、

兼家横川ヨリ音信ヲ送ル

おもひあらはひなましものをいかてかはかへすころものたれもぬるらん○中略、父倫寧陸奥赴任ノコトニカヽル、天暦八年正月二十五日ノ條ニ收ム、しはすになりぬ、よかはにものすることありてのほりぬ人ゆきにふりこめられて、いとあはれに、こひしきことおほくなんとあるにつけて、（天暦八年）（稻川）（ム脱カ）

こほるらんよかはのみつにふるゆきもわかことときえてものはおもはし

兼家ト和歌ノ贈答

なといひて、そのとしはかなくゝれぬ、正月はかりに、二三日みぬほとに、もの（天暦九年）へわたらんとて、人（兼家）こはとらせよとて、かきおきたる、

しられねはみをうくひすのふりいてゝなきてこそゆけのにもやまにも

かへりことあり、

うくひすのあたにてゆかんやまへにもなくこゑきかはたつぬはかりそ

なといふうちより、なほもあらぬことありて、はるなつなやみくらして、八月つこもりに、とかうものしつ、そのほとのこゝろはへはしも、ねんころな

るやうになりけり、さて九月はかりになりて、いてにたるほとに、はこのあるを、てまさくりに、あけてみれは、人のもとにやらんとしけるふみあり、あさましさにみてけりとたに、しられんとおもひて、かきつく、

門ヲ閉シテ兼家ノ來訪ヲ拒ム

うたかはしほかにわたせるふみゝれはこゝやとたえにならんとすらん○拾遺和歌集、四句ヲわれやとたえに＝作ル、

なとおもふほとに、心へなう十月つこもりかたに、みよしきりてみえぬときあり、つれなうてしはしこゝろみるほとになとけしきあり、○中略、兼家、町小路ノ女ニ通フコトニカヽル、正暦元年七月二日ノ條ニ收ム、二三日はかりありて、あか月かたに、かともたたくときあり、さなめりとおもふに、うくてあけさせねは、れいのいへとおほしきところにものしたり、つとめてなほもあらしとおもひて、

道綱ヲ生ム

なけきつゝひとりぬるよのあくるまはいかにひさしきものとかはしる○拾遺和歌集、玄々集同ジ、

と、れいよりは、ひきつくろひてかきて、うつろひたるきくにさしたり、かへりをあくるまてもこゝろみんとしつれと、ゝみなるめしつかひのきあひたりつれはなん、いとことわりなりつるは、

兼家ト和歌ノ贈答

けにやけにふゆのよならぬまきのとにおそくあくるはわひしかりけり

さてもいとあやしかりつるほとに、ことなしひたる、しは〳〵しのひたる

さまに、うちになといひつゝそあるへきを、いとゝしう心つきなくおもふ

ことそかきりなきや、（天暦十年）としかへりて、三月はかりにもなりぬ、もゝのはなゝ

とや、とりまうけたりけん、まつにみえす、いまひとかた（藤原袋雅カ）もれいはたちさら

ぬ心ちに、けふそみえぬ、さて四日のつとめてそみなみえたる、よへよりま

ちくらしたるものともなほあるよりはとて、こなたかなたとりいてたり、

心さしありしはなをおりうちのかたよりあるをみれは、心たゝにしもあ

らて、てならひにしたり、

まつほとのきのふすきにしはなのえはけふおることそかひなかりける

とかきて、よしやにくきにとおもひて、かくしつるに、けしきをみて、はひと

りて、かへしゝたり、

みちとせをみつへきみにはとしことにすくにもあらぬはなとしらせん

とあるを、いまひとかたにもきゝて、（中略、藤原爲雅ト和歌贈答ノコト等ニカヽル、下ニ收ム、）六月になり

ぬ、ついたちかけてなかあめいたうす、みいたしてひとりことに、

兼家ノ來訪

わかやとのなけきのしたはいろふかくうつろひにけりなかめふるまに

なといふほとに、七月になりぬ、たえぬとみましかは、かりにくるには、まさ

りなましなとおもひつゝ、くるをりにものしたる日あり、ものもいはねは、

さう〳〵しけなるに、（侍女）まへなる人、ありしゝたはのことを、ものゝついてに、

いひいてたれは、きゝてかくいふ、

おりならていろつきにけるもみちはゝときにあひてそいろまさりける

とあれは、すゝりひきよせて、

あきにあふいろこそましてわひしけれしたはをたにもなけきしものを

とそかきつくる、かくありつゝきたらすは、くれとも心のとくるよなきに、

あれまさりつゝきては、けしきあしけれは、ひたふるるにたち山とたちか（行カ）

へるときもあり、ちかきとなりにこゝろはへしれる人、いるにあはせて、か

くいへり、

もしほやくけふりのそらにたちぬるはふすへやしつるくゆるおもひに

なとゝなりさかしらするまてふすへかはして、このころはことにひさし

う見えす、たゝなりしをりは、さしもあらさりしを、かくこゝろあくかれて、

兼家消息ヲ送リ小弓ヲ取リ寄ス

いかなるも、のとうかにうちをきたるものとみえぬくせなんありける、かくてやみぬらん、そのものと思ひいつへきたよりたになくそありけるかしと思ふに、十日はかりありてふみあり、なにくれといひて、帳のはしらにゆひつけたりし、こゆみのやとりてとあれは、これそありけるかしとおもひて、ときおろして、

おもひいつるときもあらしとおもへともやといふにこそおとろかれぬれ　○後拾遺和歌集、二句及ビ三句ヲ、ことともあらしと見えつれとニ作ル、

とてやりつ、かくてたえたるほと、わかいへは、うちよりまゐりまかつるみちにしもあれは、よ中あか月とうちしはふきて、うちわたるも、きかしといへとも、うちとけたるいもねられす、よなかうしてねふることなけれは、さなからとみきく心ちは、なにゝかはにたる、いまはいかてみきかすたにありにしかなとおもふに、むかしすきことせし人も、いまはおはせすとかなと、人につきてきこえこつをきくを、ものしうのみおほゆれは、目くれかなしうのみおほゆ、○中略、時姫ト和歌贈答ノかくてつねにしもえいなひはニカヽル、下ニ收ム、てゝ、ときゝ〳〵みえて、ふゆにもなりぬ、ふしおきは、たゝ（遺闕）おさなき人もゝて

兼家書物ヲ取リ寄ス

あそひて、いかにしてあしろのひをにことゝはむとそ、心にもあらて、うちいはるゝ、（天德三年）としまたこえて、はるにもなりぬ、このころよむとて、もてありくふみとりわすれてむ、なをとりにおこせたり、つゝみてやるかみに、

ふみおきしうらも心もあれたれはあとをとゝめぬ千とりなりけり

かへりことさかしらにたちかへり、

心あるとふみかへすらむはまちとりうらにのみこそあとはとゝめゝ

つかひあれは、

はまちとりあとのとまりをたつぬとてゆくへもしらぬうらみをやせん

なといひつゝ、なつにもなりぬ、○中略、町小路女田産ノコトニ係ル、正暦元年七月二日ノ條補遺ニ收ム、三四日はかりありてふみあり、あさましうつへたましとおもふ〳〵みれは、このころこゝにわつらはるゝことありて、えまいらぬを、きのふなんたひらかにものせらるめる、けからひもやいむとてなんとそある、あさましうめつらかなる事かきりなし、たゝ給はりぬとてやりつ、つかひに人とひけれは、をとこきみになんといふをきくに、いとむねふさかる、三四日はかりありて、みつからいともつれなくみえたり、なにかきたるともみいれねは、いと

兼家ノ音信

同

はしたなくて、かへることたひ〳〵になりぬ、○中略、相撲ノ節ノコトニカル、天暦十年八月十八日ノ條ニ收ム、廿よかおとつれもなし、いかなるをりにかあらん、ふみそある、まゐりこまほしけれと、つゝましうてなん、たしかにことあらは、おつ〳〵もとあり、かへりことものすましとおもふも、これかれいとなさけなし、あまりなりなとものすれは、

ほにいてゝいはしやさらにおほよそのなひくをはなにまかせてもみんたちかへり、

兼家ノ來訪

ほにいてはまつなひきなんはなすゝきこちてふかせのふかむまに〳〵つかひあれは、

あらしのみふくめるやとにはなすゝきほにいてたりとかひやなからんなと、よろしういひなして、又みえたり、せさいのはないろ〳〵にさきみたれたるをみやりて、ふしなからかくそいはるゝ、かたみにうらむるさまのことゝもあるへし、

もゝくさにみたれてみゆる花の色はおくしらつゆのおくにやあるらん

とうちいひたれは、から○解環本、カ、シ、カ、ク、イ、フ、ニ字ナシ

兼家ト和歌ノ贈答

同

みのあきをおもひみたるゝ花のうへにうちのこゝろはいへはさらなり

なといひて、れいのつれなうよふねまち（行脚カ）の月のやまのはいつるほとに、いてんとするけしきあり、さらてもありぬへきよかなと思ふけしきやみえけん、とまりぬへきことあらはなといへと、さしもおほへねは、

いかにせん山のはにたにとゝまらてこゝろもそらにいてん月をは○後拾遺和歌集、四句こゝろの二作ル、

かへし

ひさかたのそらにこゝろのいつといへはかけはそらにもとまるへきかなとてとゝまりにけり、さて又のわきのやうなることとして、二日はかりありてきたり、ひと日の風はいかにせんれいの人はとひてましといへは、けにとやおもひけん、ことなしひに、

ことのはゝちりもやすると、めおきてけふはみからもとふにやはあらぬ

といへは、

ちりきてもとひそしてましことのはをこちはさはかりふきしたよりに

かくいふ、

兼家ニ贈ル長歌

こちといへはおほそふなりし風にいてつけてはとはんあたらなたてよ
まけし心にて又、
ちらさしとをしみおきけることのはをきなからたにそけさはとはまし
これはさもいふへしとや人ことわりけん、また十月はかりに、それはしも
やんことなきことありとていてんとするに、しくれといふはかりにもあ
らす、あやにくにあるになほいてんとす、あさましさにかくいはる、
ことわりのをりとはみれとさよふけてかくやしくれのふりはいつへき
といふに、しひたる人あらんやは、（中略、町小路ノ女、兼家ノ愛ヲ失フコト等ニ係ル、正暦元年七月二日ノ條補遺ニ收ム、天德二年）かくて又心のとくるよな〳〵なけかるゝに、なまさかしらなとする人
は、わかき御そらに、なとかくてはいふこともあれと、人はいとつれなう、わ
れやあしきなとうらもなう、つみなきさまにもてないたれは、いかゝはす
へきなと、よろつに思ふことのみしけきを、いかてつふ〳〵といひしらす
るものにもかなと、思ひみたるゝとき、こゝろつきなきや、むねうちさわき
てものいはれすのみあり、なほかきつゝけてもみせんとおもひて、
おもへたゝ　むかしもいまも　わかこゝろ　のとけからてや
はてぬへき　みそめしあきは　ことのはの　うすきいろにや
うつろふと　なけきのしたに　なけかれき　ふゆはくもゐに
わかれゆく　人をゝしむと　はつしくれ　くもりもあへす
ふりそほち　こゝろほそくは　ありしかと　きみにはしもの
わするなと　いひおきつとか　きゝしかは　さりともとおもふ
ほともなく　とみにはるけき　わたりにて　しらくもはかり
ありしかは　こゝろそらにて　へしほとに　きりもたなひき
たえにけり　またふるさとに　かりかねの　かへるつらにやと
おもひつゝ　ふれとかひなし　かくしつゝ　わかみむなしき
せみのはの　いましも人の　うすからす　なみたのかはの
はやくより　かくあさましき　うらゆゑに　なかるゝことも
たえねとも　いかなるつみか　おもからん　ゆきもはなれす
かくてのみ　人のうきせに　たゝよひて　つらきこゝろは
みつのあはの　きえはきえなんと　思へとも　かなしきことは
みちのくの　つゝしのをかの　くまつゝら　くるほとをたに

またてやは　よすかたゆへき　あふくまの　あひみてたにと
おもひつゝ　なけくなみたの　ころもてに　かゝらぬよにも
ふへきみを　なそやとおもへと　あふはかり　かけはなれては
しかすかに　こひしかるへき　からころも　うちきて人の
うらもなく　なれしこゝろを　思ひては　うきよをされる
かひもなく　おもひいてなき　われやせん　と思ひかくおもひ
おもふまに　やまとつもれる　しきたへの　まくらのちりも
人りねの　かすにしとらは　つきぬへし　なにかたえぬる
たひなりと　おもふものから　かせふきて　一日もみえし
あまくもは　かへりしときの　なくさめに　いまこんといひし
ことのはを　さもやとまつの　みとりこの　たえすまねふも
きくことに　人わろくなる　なみたのみ　わかみをうみと
たくふとも　みるめもよせぬ　みつのうらは　かひもあらしと
しりながら　いのちあらはと　たのめこし　ことはかりこそ
しらなみの　たちもよりこは　とはまほしけれ

兼家ノ返歌

とかきつけて、にかいの中におきたり、れいのほとにものしたれと、そなたにもいてすなとあれは、ねわつらひて、このふみはかりをとりて、かへりにけり、さてかれよりかくそある、

をりそめし　ときのもみちの　さためなく　うつろふいろは
さのみにそ　あふあきことに　つねならめ　なけきのしたの
このはには　いとゝいひおく　はつしもに　ふかきいろにや
なりにけん　おもふおもひの　たえもせす　いつしかまつの
みとりこを　ゆきてやみむと　するかなる　たこのうらなみ
たちよれと　ふしのやまへの　けふりには　ふすふることの
たえもせす　あまくもとのみ　たなひけは　たえぬわかみは
しらいとの　まゐくるほとを　おもはしと　あまたの人の
ゆにすれは　みはゝしたかの　すゝろにて　なつくるやとの
なけれはそ　ふくるにかへる　まに〳〵は　とひくることの
ありしかは　ひとりふすまの　とこにして　ねさめの月の
まきのとに　ひかりのこさす　もりてくる　かけたにみえす

ありしより　うとむ心そ　つきそめし　たれかよつまと
あかしけん　いかなるいろの　おもきそと　いふはこれこそ
つみならし　とはあふくまの　あひもみて　かゝらぬ人に
かゝれかし　なにのいはきの　みならねは　おもふこゝろも
いさめぬに　うらのはまゆふ　いくかさね　へたてはてつる
からころも　なみたのかはに　そほつとも　思ひしいては
たきものゝ　このめはかりは　かはきなん　かひなきことは
かひのくに　へみのみまきに　あるゝむまの　いかてか人は
かけとめん　とおもふものから　たらちねの　おやとしるらん
かたかひの　こまやこひつゝ　いなかせんと　おもふはかりそ
あはれなるへき

とかつかひあれは、かくものす、

なつくへきひともはなてはみちのくのむまやかきりにあらんとすらん

いかゝおもひけん、たちかへり、

われかなほおふちのこまのあれはこそなつくにつかぬみともしられめ

かへし、また、

こまうけになりまさりつゝなつけぬをつなはたえすそたのみきにける

又かへし、

しらかはのせきのせけはやこまうくてあまたの日をはひきわたりつる

あさてはかりはあふさかとそある、ときは七月五日のことなり、なかきものいみにさしこもりたるほとに、かくありしかへりことには、

あまのかはなぬかをちきるこゝろあらはほしあひはかりのかけをみよとや（三句四句ヲ心なれは星あひはかりニ作ル、）（玉葉和歌集、）

ことわりにもやおもひけん、すこし心をとめたるやうにて、月ころになりゆく、めさましと思ひしところは、いまは天下のわさをしさはくときけはは心やすし、むかしよりのことをは、いかゝはせん、たへかたくとも、わかすくせのおこたりにこそあめれなと、心をちゝにおもひなしつゝ、ありふるほとに、（寛和二年）○中略、兼家、兵部大輔ニ任ゼラルヽコトニカヽル、應和二年五月十六日ノ條ニ收ム、（康保元年）はるうちすきて、なつころとのゐかちになるこゝちするに、つとめて一日ありて、くるれはまゐりなとするを、あやしうとおもふに、日くらしのはつこゑきこえたり、いとあは

兼家ト和歌ノ贈答

れとおとろかれて、

あやしくもよるのゆくへをしらぬかなけふひくらしのこゑはきけとも

といふに、いてかたかりけんかし、かくてなてうことなければ、人のこゝろをなほたゆみなくこりにたり、つきよのころよからぬものかたりして、あはれなるさまのことゝも、かたらひてもありしころおもひいてられて、もの

のしけれはかくいはる、

くもるよの月とわかみのゆくすゑのおほつかなさはいつれまされり　○後拾遺和歌集同ジ

兼家ノ音信

かへりこと、たはふれのやうに、

をしはかる月はにしへそゆくさきはわれのみこそはしるへかりけれ

なと、たのもしけにみゆれと、わかいへとおほしき所は、ことになんめれは、いとおもはすにのみそよはありける、さいはひある人のためには、とし月みし人も、あまたのこなともたらぬを、かくものはかなくて、おもふことのみしけし、○中略、母殁スルコト等ニカヽル、康保元年年末雑載ニ收ム、（康保三年）さてひるつかたふみあり、なにくれとかきて、

兼家ノ來訪

かきりかとおもひつゝこしほとよりもなか〳〵なるはわひしかりけり

かへりことなほいとくるしけにおほしたりつれは、いまもいとおほつかなくなんなか〳〵に、

結婚十三年

われもさそのとけきとこのうらならてかへるなみちはあやしかりけり

六日ノ條ニ收ム、さてなほくるしけなれと、ねんして、二三日のほとに見えたり、やう〳〵れいのやうになりもてゆけは、れいのほとにかよふ、○中略、賀茂祭ノコトニカヽル、康保元年四月十

孤獨ノ生活

しはあまりにけり、されとあけくれ、世中の人のやうならぬをなけきつゝ、つきせすゝくすなりけり、それもことわり、みのあるやうは、よるとても、人のみえおこたるときは、ひとすくなに心ほそう、いまはひとりをたのむ、たのもし人は、この十よねんのほと、あかたありきにのみあり、たまさかに、京（倫寧）なるほとも、四五條のほとなりけれは、われは左近のむまはを、かたきしにしたれは、いとはるかなり、かゝるところもとりつくろひかゝはる人もなけれは、いとあしくのみなりゆく、これをつれなくいていりするは、ことに心ほそう思らんなと、ふかうおもひよらぬなめりなと、ちくさにおもひみ

兼家トノ詠

たることとしけしといふは、なにかこのあれたるやとのよもきよりも、しけゝなりとおもひなかむるに、八月はかりになりにけり、心のとかにくらす日、はかなきことといひ〳〵のはてに、われも人もあしういひなりて、うちゑむして、いつるになりぬ、はしのかたにあゆみいて、をさなき人をよひいて、われはいまは、こしとすなといひおきて、いてにける、すなはちはひいりて、おとろ〳〵しうなく、こはなそ〳〵といへと、いらへもせて、ろんなうさやうにそあらむとおしはからるれと、人のきかんもうたて、ものくるほしけれは、とひさして、とかうこしらへてあるに、五六日はかりになりぬるに、おともせす、れいならぬほとになりぬれは、あなものくるほし、たはふれことにこそわれはおもひしか、はかなきなかなれは、かくてやむやうもありなんかしとおもへは、心ほそうてなかむるほとに、いてしひつかひしゆするつきのみつは、さなからありけり、うへにちりゐてあり、かくまてとあさましう、

たえぬるかゝけたにあらはとふへきをかたみのみつはみくさゐにけり　今〇新古和歌集、同

兼家ノ來訪

泊瀬詣ニ兼家ヨリ消息ヲ送リ來ル

泊瀬詣ノ歸途兼家迎ニ來ル

なと、おもひしひしも見えたり、れいのことにてやみにけり、かやうにむねつふらはしきをりのみあるか、世に心ゆるひなきなんわひしかりける、中〇略、稻荷、賀茂詣ノコトトハ（安和元年）ニカヽル、下ニ收ム、とはかりあれは、ふみさゝけてくるものあり、そこにとまりて、御ふみといふめり、みれは、きのふけふのほとゝなにことかはとおほつかなくなん、人すくなにてものしにし、いかゝいひしやうに、みよさふらはんするか、〳〵へるへからんひきゝてむかへにたにとそある、かへりことにはつは（椿市）いちといふところまては、たひらかになん、かゝるついてにこれよりもふかくと思へは、かへらん日をえこそきこえさためねとかきつ、そこにて猶三日候給こと、いとひんなしなとさたむるを、つかひきゝてかへりぬ、〇中略、歸途、久世御宅ニ宿ルコトニカヽル、下ニ收ム、いみしうむつかしけれと、よにいりぬれは、たゝあくるをまつ、またくらきよりいけは、くろみたるものゝくそ、〇解環本、ものをそニ作ル、おひてはしらせてく、やゝとほくよりおりて、つゝいひさまつきたり、みれは、すゐんしなりけり、なにそと、これかれとへは、きのふのとりのときはかりに、うちの（宇治）ゐんにおはしましつきて、かへらせ給ひぬやとまゐれと、おほせことはへりつれはなんといふ、さきなるをのことも、とうゝなか

長德二年五月二日

せ○解環本、ふれうやなとおこなふ、うちのかはによるほと、きりはきしかなかせ＝作ル、
た見えすたちわたりて、いとおほつかなし、くるまかきおろして、こちたく、
とかくするほとに、人こゝろおほくて、御くるまおろしたてよとのゝしる、き
りのしたより、れいのあしろもみえたり、いふかたなくおかし、みつからは、
あなたにあるなるへし、まつかくきこえわたす、

人こゝろうちのあしろにたまさかによるひをたにもたつねけるかな

ふねのきしにきよするほとにかへし、

かへるひを心のうちにかそへつゝたれによりてかあしろをもとふ

みるほとに、くるまかきすゑて、のゝしりてさしわたす、いとやんことなき
にはあらねと、いやしからぬいへのことも、なにのそうのきみなと、いふも
のとも、なかえとみのをのなかにいりこみて、日のあしのわつかにみえて、
きりとところ〳〵にはれゆく、あなたのきしに、いへのこ、ゑふ（道隆）のすけなと、か
いつれてみおこせたり、なかにたてる人も、たひたちてかりきぬなり、きし
のいとたかきところにふねをよせて、わりなくたゝあけに、ゝなひあく、な
かえをいたしきにひきかけてたてたり、○中略、藤原師氏ノコトニカヽル、下ニ收ム、またこひす

すきなと、しきりにあめり、あるすきものとも、ゑひあつまりて、いみしかり
つるものかな、御くるまのつきのわのほとの、日にあたりてみえつるはと
もいふめり、くるまのしりのかたに、はなもみちなとや、さしたりけん、いへ
のことおほしき人、ちかうはなさき、みなるまてなりにける、ひころよとい
ふなれは、しりなる人も、とかくいらへなとするほとに、あなたへふねにて、
みなさしわたる、ろなう、ゑはむものそとて、みなさけのむものともをえり
てゐてわたる、かはのかたに、くるまむかへ、しちたてさせて、ふたふねにて
こきわたるまて、ゑひまとひて、うたひかへるまゝに、御くるまかけよ〳〵
とのゝしれは、こうしていとわひしきに、いとくるしうてきぬ、○下略、大嘗會御禊ノコトニカヽル、（安和二年）

〔かけろふ日記〕中○上略、同胞ト物忌スルトニカヽル、上ニ收ム、

へし、

としことにあまれはこひるきみかためうるふ月をはおくにやあるらん

とあれは、いはひそしつと思ふ、○中略、下衆ノ鬬諍ノコトニカヽル、安和二年五月是月ノ條ニ收ム、くやしく
なと、おもふほとに、いへうつりとかせらるゝことありて、我はすこしはな

長德二年五月二日

兼家ノ來訪

れたる所にわたりぬれは、わさときら〳〵しくて、ひませなとにうちかよひたれは、〻かなきうちには、なほかくてそあるへかりける、我にしきをきてとこそいへ、ふるさと人もかへりなんとおもふ、○中略、三月節句ノコト等ニカヽル、安和二年三月三日ノ條ニ收ム、なほ(安和二年)しるしなくてほとふるに、人はかくきよまはるほとゝて、れいのやうにもかよはす、あたらしき(東三條殿カ)ところつくるとて、かよふたよりにそたちなからなとものして、いかにそなともある、こゝちよはくおほゆるに、おしかこてかなしくおほゆる、ゆふくれに、れいの所よりかへるとて、はすのみひともとをひとして(マヽ)いれたり、くらくなりぬれは、まゐらぬなり、これかしこのなり、み給へとなんいふ、かへりことには、たゝいきていけらぬときこえよといはせて、思ひふしたれは、あはれけにいとをかしかなるころをいのちもしらす、人のこゝろもしらねは、いつしかみせんとありしも、さもあらぬも、やみなんかしと思ふもあはれなり、

花にさきみになりかはるよをすてゝうきはの露と我そけぬへき○玉葉和歌集

同ジ、

なとおもふまて、日をへておなしやうなれは、心ほそし、○中略、高僧ヲ請ジテ、病ヲ祈ラシムル

兼家疾ト稱シテ來訪セズ

コト等ニカヽル、下ニ收ム、かくて、四月(天禄元年)になりぬ、とをかよりしも、また五月十日許まて、いとあやしくなやましきこゝろになんあるとて、れいのやうにもあらて、七八日おほほとのにてねんしてなん、おほつかなさになといひて、よのほとにてもあれは、かくゝるしうてなん、うちへもまゐらねは、かくありきけりとみえ、んもひんなかるへしとて、かへりなとせし人おこたりてときくに、まつほとすくる心ちす、あやしと人しれす、こよひをこゝろみんとおもふほとに、はてはせうそくたになくて、ひさしくなりぬ、めつらかにあやしとおもへと、つれなしをつくりわたるに、よるはせかいのくるまのこゑに、むねうちつふれつゝ、とき〳〵はねいりて、あけにけるはと思ふにそ、ましてあさましき、を(道綱)さなき人かよひつゝきけと、さるはなてうこともなかなり、いかにそとたにとひふれさなり、ましてこれよりは、なにせんにかは、あやしとも、〻のせんとおもひつゝくらしあかして、かうしなとあくるに、みいたしたれは、よるあめのふりけるけしきにて、きともつゆかゝりたり、みるまゝにおほゆるやう、

よのうちはまつにもつゆはかゝりけりあくれはきゆるものをこそおもへ○玉葉和歌集

兼家ノ疎遠

長德二年五月二日

同ジ、

〇中略、小野宮實頼薨去ノコトニカ、ル、天祿元年五月十八日ノ條ニ收ム、

三十よ日、ひるみることは四十よ日になりにけり、いとにはかに、あやしといはゝおろかなり、心もゆかぬよとはいひながら、またいとかゝるめはみさりつれは、みる人々もあやしうめつらかなりとおもひたり、ものしおほえねは、なかめのみそせらるゝ、人めもいとはつかしうおほえて、おつる涙おしかくしつゝ、ふしてきけは、うくひすそおりはへてなくにつけて、おほゆるやう、

うくひすもこもなきものやおもふらんみなつきはてぬねをそなくなる

かくなから、廿よ日になりぬる、〇中略、唐崎ニ祓ニ赴クコトニカ、ル、下ニ收ム、このひる、とのおはしましたりつといふをきく、いとそあやしき、なきまをうかゝはれけるとまてそおほゆる、さてなと、これかれとふなり、我はいとあさましうのみおほえてきつきぬ、おりたれは、心ちいとせんかたなくくるしきに、とまりたりつる人々、おはしましてとはせたまひつれは、ありのまゝになんきこえさせつる、なさ(衍カ)とかこのこゝろありつる、あしうもきにけるかなとなん、あ

道綱ヲ介シテ兼家ニ消息ヲ送ル

兼家ノ消息

りつるなと、あるをきくにも、夢のやうにそおほゆる、またのひは、こうしくらして、あくるひ、(道綱)をさなき人、とのへといてたつ、あやしかりけることもや、とはましと、思ふも、物うけれと、ありしはまへをおもひ出る心ちの、しのひかたきにまけて、

うきよをはかはかりみつのはまへにてなみたになこりありやとそみし

とかきて、これみ給はさらんほとにさしおきて、やかて物しねとをしへたれは、ざしつとてかへりたり、もしみたるけしきもやと、しらたまたれけん(衍カ)かし、されとつれなくてつこもりころになりぬ、〇中略、草ノ若苗ヲ植ウルコトニカ、ル、上ニ收ム、いみしくこゝちまさりて、なかめくらすほとにふみあり、ふみ物すれと、かへりことともなく、はしたなけにのみあめれは、つゝましくてなん、今日もとおもへともなとそあめる、これかれそゝのかせは、かへりことかくほとに、ひくれぬ、またいきもつかしかしとおもふほとにみえたる、人々なほあるやうあらん、つれなくてけしきをみよなといへは、おもひかへしてのみあり、つゝしむことのみあれはこそあれ、さらにこすとなん我はおもはぬ、人のけしきはみくせ〳〵しきをなんあやしとおもふなと、うらなくけしき

長德二年五月二日

もなければ、けうとくおぼゆ、つとめては、ものすべきことのあればなん、いまあすあさてのほとにもなとあるに、まことゝはおもはねと、おもひなほるにやあらんとおもふへし、もしはた、このたひはかりにやあらんと心みるに、やう〳〵また日かすゝきゆく、○中略、出家ヲ思ヒ立ツコトニカヽル、下ニ收ム、ひくるるほとに、ふみゝえたり、天下そらことならんとおもへは、たゝいまこゝちあしくて、漸とはとてやりつ、○中略、盂蘭盆ノコト等ニカヽル、天祿元年七月十四日ノ條ニ收ム、かくて八月になりぬ、二日のよさりかた、にはかにみえたり、あやしとおもふに、あすは物いみなるを、かとつよくさゝせよなと、うちいひちらす、いとあさましく、ものゝわくやうにおぼゆるに、（道綱）これさしより、かれひきよせ、ねんせよ〳〵と、みゝおしへつ、まねさゝめきまとはせは、わかひとりのをれ物にて、むかひゐたれは、むけにくんしはてにたりとみえけん、またの日もひくらしいふこと、我こゝろのたかはぬを、人のあしうみなしてとのみあり、いといふかひもなし、○中略、除目ノコト等ニカヽル、天祿元年八月五日ノ條ニ收ム、しはすのついたちになりぬ、七日はかりのひるさしのそきたり、いまはいとまはゆき心ちもしにたれは、き丁ひきよせて、けしきものしけなるをみて、いてひくれにけり、うちよりめしあ

りつれはとて、たちにしまゝに、をとつれもなくて、十七八日になりにけり、けふのひるつかたより、あめいといたうはらめきて、あられにつれ〳〵と、ふる、ましてもしやと思ふへきこともたえにたり、いにしへをおもへは、我ためにしもあらし、心のほ上にやありけん、あめ風にもさはらぬ物と、ならはしたりし物を、けふおもひいつれは、むかしも心のゆるふやうにもなかりしかは、我心のおほけなきにこそありけれ、あはれさらぬものとみし物を、それまて思ひかけられぬと、なかめくらさる、あめのあしおなしやうにて、ひともすほとにもなりぬ、みなみおもてにこのころくる人あり、あしおとすれはさにそあなる、あはれおかしくきたるはと、わきたきるこゝろを、かたはらにおきてうちいへは、としころみしりたる人むかひて、あはれこれにまさりたるあめ風にも、いにしへは人のさはりたまはさめりし物をといふにつけてそ、うちこほるゝなみたのあつくてかゝるに、おほゆるやう、

おもひせはむねのひむらはつれなくてなみたをわかす物にさりける

とくりかへしいはれしほとに、ぬる一（所カ）つにもあらて、よはあかしてけり、そ

天祿二年正月

兼家ノ消息

の月みたるはかりのほとにて、としはこえにけり、そのほとのさほう、れいのことなれはしるさす、さてとしころおもへは、なとにかあらん、ついたちの日はみえすして、やむよなかりき、さもやとおもふこゝろつかひせらる、〇中略、兼家、近江ノ許ニ通フコトニ係ル、正暦二年七月二日ノ條補遺ニ收ム、（天祿二年正月）さて二三日もすこしつ、三日またさるのときに、一日よりもけにのゝしりてくるを、おはします〳〵といひつゝくるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつゝ、さすかにむねはしりするを、ちかくなれは、こゝなるをのことも、中門おしひらきて、ひさまつきてをるに、むへもなくひきすきぬ、今日まして、思ふこゝろをおしはからなん、またの日は大饗とてのゝしる、いとちかけれは、こよひさりともと心みんと、人しれすおもふくるまのをとことにむねつふる、よゝきほとにて、みなかへるをともきこゆ、かとのまへよりも、あまたおひくらしつゝゆくを、すきぬときくたひことに心はうとくかきりときゝはてつれは、すへてものそおほえぬ、ある日またつとめて、なほもあらてふみみゆ、かへりことせす、また二日はかりありて、心のおこたりはあれと、いとことしけきころにてなん、ようさり物せんにいかならん、おそろしさになとあり、

兼家ノ來訪

こゝちあしきほとにて、えきこえすと、物して思ひたえぬるに、つれなく見えたり、あさましと思ふに、うらもなくたはふれは、いとねたさに、こゝらの月ころねんしつることをいふに、いかなる物とたえていらへもなくてねたるか、うちおとろくさまにて、いつらはやねたまへるといひわらひて、人わろけなるまてもあれと、いはきのことしてあかしつれは、つとめて物もいはてかへりぬ、それよりのち、しひてつれなくて、れいのことはり、これとしてかくしてなとあるも、いとにくゝて、いひかへしなとしてことたえて、廿よ日になりぬ、あらたまれともと、いふなる日のけしき、うくひすの聲なとをきくまゝに涙のうかぬときなし、〇中略、庭ニ呉竹ヲ植ウル、上ニ收ム、（天祿二年二月）けふは廿四日、雨のあしいとのとかにてあはれなり、ゆふつけて、いとめつらしきふみあり、いとおそろしきけしきにおちてなん、ひころへにけるなとそあるかへりことなし、廿五日、なほあめやまて、つれ〳〵と思はぬ山〳〵とかやいふやうに、物のおほゆるまゝに、つきせぬ物は涙なりけり、

兼家ノ消息

ふる雨のあしともおつるなみたかなこまかに物をおもひくたけは〇詞花和歌集、

玄々集同ジ、

兼家門前ヲ過グ

○中略、父倫寧ノ家ニ渡ルコトニカヽル、上ニ收ム、（天祿二年五月）なかめになりぬれは草ともおひこりてあるを、おこなひのひまに、ほりあかたせなとする、あさましき人わかゝとより、れいのきら〳〵しうおひちらしてわたるひあり、おこなひしいりたるほとに、おはします〳〵とのゝしれは、れいのことそあらんとおもふに、むねつふ〳〵とはしるにひきすきぬれは、みな人おもてをまほりかへしてゐたり、我はまして二とき三ときまて、物もいはれす、人はあなめつらか、いかなる御こゝろならんとてなくもあり、わつかにためらひて、いみしうくやしう、人にいひさまたけられて、いまゝてかゝるさとすみをして、またかゝるめをみつるかなとはかりいひて、むねのこかるゝことは、いふかきりにもあらす、六月のついたちの日、御ものいみなれと、みかとのしたよりもとてふみあり、あやしくめつらかなるとおもひて見れは、いみはいまはもすきぬらんを、いつまてあるへきにか、すみ所そいとひんなかめりしかは、え物せす、ものまうては、けからひいてきて、どゝまりぬなとそある、こゝにといまゝてきかぬやうもあらしとおもふに、心うさもまさりぬれと、ねんしてかへりとかく、いとめつらしきはおほめくまてなん、こゝにはひさしくなりぬるを、けにいかてかはおほしよらん、さてもみたまひしあたりとは、おほしかけぬ御ありきのたひ〳〵になん、すへていまゝてよにはへる身のをこたりなれは、さらにきこえすと物しつ、○中略、般若寺ニ籠ルコトニカヽル、下ニ收ム、ものいみも、けふそあくらんと思ふ日なれは、こゝろあはたゝしく思ひつゝ、物とりしたゝめなとするに、うはむしろのしたに、つとめてくふくすりといふ物、たゝうかみの中にさしいれてありしかは、こゝにゆきかへるまてありけり、これかれみいててこれなにならむといふをとりて、やかてたゝうかみの中にかくかきけり、

兼家ニ祕シテ般若寺ニ籠ル

さむしろのしたまつこともたえぬれはをかむかたゝになくそかなしき

とて、ふみには身をしかへねはとていふめれと、まへわたりせさせ給はぬせかいもやあるとて、今日なんこれもあやしき、とはすかたりにこそなりにけれとて、をさなき（宜綱）人の、ひたやこもりならん、せうそこきこえにとても、のするにつけたり、もしとはるゝやうもあらは、これはかきおきて、はやく物しぬ、おひてなんまかるへきとをものせよとそ、いひもたせたる、ふみうちみて、心あはたゝしけにおもはれたりけり、かへりことには、よろついと

寺籠中里ヨリ兼家ノ消息ヲ送リ來ル

ことわりにはあれと、まついくらんはなにえ（○解環本、何ニ作ル）にそ、このころはおこなひにもひんなからんを、こたみはかりいふことときくと思ひて、とまれいひあはすへきこともあれは、たゝいまわたるとて、

あさましやのとかにたのむとこのうへをうちかへしけるなみのこゝろよ

いとつらくなんとあるをみれは、まいていそきまさりてものしぬ、（○中略、般若寺ニ籠居スルコトニカヽル、下ニ收ム、）ゆなとものして、御たうにとおもふほとに、こと（まカ）よりこころあはたゝしけにて、はしりきたり、とまれる人のふみあり、見れは、たゝいま殿より御ふみもて、それかしなんまゐりたりつる、さうしてまゐり給ことあなり、かつ〳〵まゐりて、とゝめきこえよ、たゝいまわたらせたまふといひつれは、ありのまゝにはやいてさせ給ひぬ、これかれもおひてなん、まゐりぬるといひつれは、いかやうにおほしてにかあらんとそ、御けしきありつるを、いかゝさはきこえむとありつれは、月ころ御ありさま、さうしのよしなとをなむ物しつれは、うちなきて、とまれかくまれまつとくをきこえんとて、いそきかへりぬる、されはろなうそうに御せうそくありなん、さるよういせよなとそいひたるをみて、うたて心をさなく、おとろ〳〵しけにや、もしいなつ覽、（○解環本、にもやしないてん、ニ作ル、）いと物しくもあるかなけかれなとせは、あすあさてなとも、いてなんとする物をと思ひつゝ、ゆのことといそかして堂にのほりぬ、（○中略、般若寺籠居ノコトニカヽル、下ニ收ム、）そやおこなふとて、法師はらさうそけは、とおしあけて、念數するほとに、時は山てらわさのかひ、よつふくほとになりにたり、大門のかたに、おはします〳〵といひつゝのゝしるをとすれは、あけたるすともうちおろしてみやれは、こまよりひふたともし、みともしみえたり、（宜綱）をさなき人けいめいしていてたれは、くるまなからたちて、あか御むかへになん、まゐりきつるをけふまてこのけからひあれは、えおりぬを、いつくにかくるまはよすへきといふに、いと物くるをしき心ちす、かへりことに、いかやうにおほしてか、くあやしき御ありきはありつらん、こよひはかりとおもふことはへりてなん、のほりはへりつれは、ふしやうのこともおはしますなれは、いとわりなかるへきことになん、夜ふけはへりぬらん、とくかへらせ給へといふをはしめて、ゆきかへることたひ〳〵になりぬ、一町のほとを、いしはしおりのほりなとすれは、ありく人こうして、いとくるしうするまてなりぬ、これかれなとは、あないとほしなと、

兼家寺ニ迎ニ來ル

道綱ニ託シ滑息寺ヨリ兼ヲ家ニ送ル

よはきかたさまにのみいふ、このありく人、すゑてきむちいとくちをし、かはかりのことをは、いひなさぬはなとそ、御けしきあしとて、なまにもなく、されとなとてか、さらに物すへきといひはてつれは、よし〳〵かくけからひたれは、とまるへきにもあらす、いかゝはせん、くるまかけよとありときけは、いと心やすし、ありきつる人は、御をくりせん、御くるまのしりにて、まきるこゝろ、さらにまたはまうてこしとて、なく〳〵いつれは、これをたのもし人にてあるに、いみしうもいふかなとおもへとも、ゝのいはてあれは、人なとみないてぬとみえて、この人はかへりて、御をくりせんとしつれと、きんちは、よらんときにをことて、おはしましぬとて、しゝとなく、いとほしうおもへと、あるしれそとをさへかくてやむやうもあらしなと、いひなら（ハカ）（なカ）（こカ）（くカ）さむ、ときは八になりぬ、みちはいとはるかなり、御とものの人はとりあへけるにしたかひて、京のうちの御ありきよりも、いとすくなかりつると、人々いとほしかりなとするほとに、よはあけぬ、京へ物しやるへきことなとあれは、人いたしたつ、大夫よへのいとおほつかなきを、御かとのへんにて、御（道綱ニ同ジ）（上同ジ）けしきもきかんとて物すれは、それにつけてふみ物す、いとあやしう、おと

兼家使道隆ヲトシテ贈物ヲ寺ニムカシ

ろ〳〵しかりし御ありきのよもやふけぬらんと思ひ給へしかは、たゝ佛をおくりきこえさせ給へとのみ、いのりきこえさせつる、さてもいかにおほえたることありてかはと思ふたまへれは、いまはあまたいたくてまかりかへらむことも、かたかるへき心ちしけるなと、こまかにかきてはしに、むかしも御覽せしみちとはみ給へつゝ、まかりいりしかと、たくひなく思ひやりきこえさせし、いまいとゝくまかてぬへしとかきて、こけついたるまつのえたにつけてものす、あけほのを見れは、きりかくもかとみゆる物たちわたりて、あはれに心すこし、ひるつかたいてつる人かへりきたり、御ふみはいてたまひにけれは、をのことにあつけてきぬとものす、さらすともかへりことあらしと思ふ、〇中略、僧ヲ請ジテ、加持セシムルコト等ニカヽル、下ニ收ム、またおさなく〳〵〇解環本、おはすニ作ル、おはすとのゝしりてくる人あり、さならんとおもひてあれは、いとにきはゝしく、さと心ちして、うつくしきものとも、さま〳〵にしやうそきあつまりて、二くるまそある、むまともなとふさにひきちらかいてさはく、わりこやなにやと、ふさにあり、す經うちし、あはれけなるほうしはらに、かたひらやぬのやなと、さまさまにくはりちらして、物かたりのつい

てに、おほくはとのゝ御もよほしにてなん、まうてきつる、さうしてものしたりしかといてすなりにき、又ものしたりとも、さこそあらめ、おのか物せむにはと思へはえ物せす、のほりてあかめたてまつれ、ほうしはらにも、いとたい〳〵しく、きやうをしへなとすなるは、なてうことそとなんの給へりし、かくてのみは、いかなる人かある、世中にいふなるやうに、ともかくもかきりになりておはせは、いふかひなくてもあるへし、かくて人もおほせさらむとき、かへりいてゝゐたまへ覽も、をこにそあらん、さりとも今ひとたひはおはしなん、それにさへいてたまはすはそ、いとひとわらはへにはなりはて給らんなと、物ほこるらかにいひのゝしるほとに、ゝしの京にさふらふ人々、こゝにおはしましぬとて、たてまつらせたるとて、天下のものふさにあり、山のすゑと思ふやうなる人のために、はるかそあるに、ことなるにも、身のうきことは、まつおほえけり、ゆふかけになりぬれは、いそくとあれは、えひひきはきこえす、おほつかなくはあり、なほいとこそあしけれ、さていつともおほさぬかといへは、たゝ今はいかにも〳〵おもはす、いま物すへきことあらは、まかてなん、つれ〳〵なる心なれはにこそあれ、なとてとてもいてんもおこなひみてん、さや思ひなるとて、いたさしと思ふ（時原）なる人のいはするならん、さとらても、なにわさをかせんすると思へは、かくてあんへきほとはかりとおもふなりといへは、ことなくおほすにこそあなれ、よろつのことよりも、このきみのかくそゝろなるしやうしをしておはするよと、かつうちなきつゝ、車にものすれは、こゝなるこれかれ、おくりにたちいてたれは、おもとたちもみなかんたうにあたり給なり、よくきこえて、はやいたしたてまつりたまへなと、いひちらしてかへる、このたひのなこりは、まいていとこよなく、さう〳〵しけれは、我ならぬ人は、ほと〳〵なきぬへく思ひたり、〇中略、寺籠ニツキ、父倫寧ノ意向ヲ質スコトニカヽル、上ニ收ム、人はなをすかしかてらに、さもいはるゝにこそあらめ、かきりなきはらをたつとも、かゝるところを見おきて、かへりにしまゝに、いかにともおとつれられす、いかにも〳〵なりなは、しるへくやはありけるなとおもへは、これよりふかくいるともとそおほえける、けふは十五日（六月）、いもゆなとしてあり、からくもよほして、いをなと物せよとて、けさ京へいたしたてゝ、思ひなかむるほとに、そらくらきまつ風おとたかくて、神こを〳〵となり、いまはまたふりくへかへ

道隆歸ル

道綱ヲ兼家ノ許ニ遣ス

兼家ノ消息

るらん物を、みちにて雨もやふらん、神もやなりまさらんと思ふに、いとゆゝしうかなしくて、佛に申つれはにやあらん、はれてほともなくかへりたり、いかにそとゝへは、雨もやいたくふりはへるとおもへは、神のなりつるおとになん、いてゝまうてきつるといふをきくにも、いとあはれにおほゆ、こひ（たゝ脚カ）のたよりにそふみあるいとあさましくて、かへりにしかは、また〳〵もさこそはあらめ、うく思ひはてにためれはとおもひてなん、もしたまさかにいつへきひあらはつけよ、むかへはせん、おそろしき物に思ひはてにためれは、ちかくはえおもはすなとそある、○中略、近親ノ者、消息ヲ送リ來ルコトニカヽル、上ニ收ム、又の日、かへりことす、○中略、近親ノ者ト消息贈答ノコトニカヽル、上ニ收ム、たいふ、一日の御かへり、いかてたまはらむ、またかんたうありなんをもてまゐらんといへは、なにはとてかく、すなはちきこえさすへくおもひそたまへしを、いかなるにかあらん、まうてかたくのみおもひてはんへめる、たよりになんまかてんことは、いつとも思ふ給へわかれねは、きこえさせんかたなくなとかきて、なにことにかありけむ、御はしかきは、いかなることにかありけんと思ふ給へいてんに、ものしかんへけれは、さらにきこえさせす、あなかしこなとかき

道綱ニ託シ兼家ニ返事ヲ送ル

留守ノ者ヨリ兼家ノ來ルヲ報ズ

て、いたしたてたれは、れいのときしもあれ、雨いたくふり、神いといたくなるを、むねふたがりてなけく、すこししつまりて、くらくなるほとにそ、かへりたる、ものゝいとおそろしかりつるみさまのわたりなといふにそいとそいみしきかへりことをみれは、ひとよのこゝろはへよりは、心よわけにみゆるは、おこなひよはりにけるかと思ふにも、あはれになんそある、○中略、近親ノ者ノ來訪ノコト等ニカヽル、上ニ收ム、さてありふるほとに、京のこれのもとより、ふみともあり、みれは、今日とのおはしますへきやうになんきく、こたみさへおりすは、いとつか（ママ）たましきさまになん、よ人も思はむ、またはたよに物したまはし、さらんのちに物したらん、いかゝ人わらへならんと、人々おなしことゝもを物したるに、いとあやしきことにもあるかな、いかにせん、○中略、父倫寧、歸宅ヲ勸ムルコトニカヽル、上ニ收ム、つりするあまのうけはかり、思ひみたるゝに、のゝしりてもの、にゝぬ、さなめりと思ふに、心ちまとひたちぬ、こたみは、つゝむことなくさしあゆみて、たゝいりにいれは、わひてき丁はかりをひきよせて、はたかくるれと、なにのかひなし、かうもりす丞、すゝかきあけ、經うちおきなとしたるをみて、あなおそろし、いとかくは思はすこそありつれ、いみしくけう

兼家迎ニ來ル

とくてもおはしけるかな、もしいて給ぬへくやと思ひて、まうてきつれと、かへりてはつみうへかめり、いかに大夫、かくてのみあるをは、いかゝ思ふとゝへは、いとくるしうはへれと、いかゝはと、うちうつふしてゐたれは、あはれとうちいひして、さらはともかくも、きんちかこころいて給ひぬへく、ゝるまよせよといひもはてぬに、たちはしりて、ちりかひたるものともたゝとりにつゝみ、ふくろにいるへきはいれて、くるまともにみないれさせ、ひきたるせさうなとも、はなちたくりたるものとも、みし〳〵とゝりはらふ、ゝりはらふに、心ちはあきれて、あれか人かにてあれは、人はめをくはせつと、いとよくゑみてまは（ほカ）りいたるへし、このことかくすれは、いてたまひぬへきにこそはあめれ、佛にことのよし申たまへ、れいのさほうなるとて、天下のさるかうことをいひのゝしらるめれと、ゆめに物もいはれす、なみたのみうけれと、ねんしかへしてあるに、くるまよせて、いとひさしくなりぬ、さる時はかりにものせしを、ひともすほとになりにけり、つれなくてうこかねは、よし〳〵我はいてなん、きむちにまかすとてたちいてぬれは、とくとくとてをとりて、なきぬはかりにいへは、いふかひもなきに、いつるこゝちそさらに我にもあらぬ、大門ひきいつれは、のりくはゝりて、みちすからうちもわらひぬへきことゝもを、ふさにあれと、ゆめちかものそいはれぬ、このもろともなりつる人も、くらけれはあへなんとて、おなしくるまにあれは、それそとき〳〵いらへなとするは、はる〳〵といたるほとに、ゐの時になりにたり、京には、ひるさるよしいひたりつる人〳〵、心つかひしちりかひて、うと（かカ）ゝもあけたりけれは、あれにもあらすなからおりぬ、心もくるしけれは、き丁さしへたてゝ、うちふす所に、こゝにある人ひやうとよりきていふ、なてしこのたねとらんとしはへりしかと、ねもなくなりにけり、くれたけもひとすちたふれてはへりし、つくろはせしかとなといふ、たゝいまいはてもありぬへきことかなと思へは、いらへもせてあるに、ねふるかと思ひし人いとよくきゝつけて、このひとつくるまにて物しつる人の、さうしをへたてゝあるに、きい給や、こゝにことあり、このよをそむきて、いへをいてゝ、ほたいをもとむる人に、只今こゝなる人々かいふをきけは、なてしこはなておほしたりや、くれにけれは、たてたりやとはいふ物かとかたれは、きく人いみしうわらふ、あさましうをかしけれと、露はかりわらふけ

歸京

兼家ノ諧謔

兼家ノ來訪

しきも見せす、かゝるに夜やう〳〵なかはゝかりになりぬるに、かたはいつかたかふたかるといふに、かそふれは、むへもなくこなたふたかりたりけり、いかにせむ、いとからきわさかな、いさもろともにちかき所へなとあれは、いらへもせて、あな物くるおし、いとたとしへなきさまにもあへかなるかなと思ひふして、さらにうこくましけれは、さふりはへこそはすへかなれ、かたあきなはこそは、まゐりくへかなれと思ふに、れいの心ゆかぬものいみになりぬへかりけりなと、なやましけにいひつゝいてぬ、つとめてふみあり、夜ふけにけれは、心ちいとなやましくてなん、いかにそはやとしみをこそしたまひてめ、このたいふの、さもふつゝかにみゆるかなとそあめる、なにかはかはかりそかしと思ひはなるゝ物から、物いみはてむ日、いふかしきこゝちそゝひておほゆるに、六月をすこして、七月三日（天祿二年）になりにたり、ひるつかたわたらせ給ふへし、こゝにさふらへさなむ、おほせことありつるといふものともときたれは、これかれさはきて、日ころみたれかはしかりつるところ〳〵をさへ、こほ〳〵とつくるをみるに、いとかたはらいたく思ひくらすに、くれはてぬれは、きたるをのことも、御くるまのさうそくなとをみなしつるを、なといまゝてはおはしまさゝらんなといふほとに、やう〳〵夜もふけぬ、ある人々なほあやし、いさひとしてみせにたてまつらんなといひて、見せにやりたる人かへりきて、只今なむ御くるまのしやうそくときて、みすゐしんはらもみなみたれはへりぬといふ、されはよとそ、又思ふに、はしたなきこゝちすれは、思ひなけかるること、さらにいふかきりなし、山ならまし時、かくむねふたかるめをみましやと、こよなう思ふ、ありとある人もあやしくあさましと思ひさわきあへることゝも、みよはかりに、こすなりぬるやうにそ見えたる、いかはかりのことにてとたにきかは、やすかるへしと思ひみたるゝほとに、まらうとそ物したる、こゝちのむつかしきにと思へと、ゝかくものいひなとするにそ、すこしまきれたる、さてあけぬれは、大夫、なにことによりてにかありけんと、まゐりてきかんとてものす、よへはなやみたまふことなんありける、にはかにいとくるしかりしかはなん、え物せすなりにしとなん、のたまひつるといふしもそ、おいかゝりにあるへかりけるとそおほえたる、さはりにそあるを、もしとたにきかは、なにをおもはましと思ひむつかるほとに（○中略、女御登子ト消息贈答ノコ）

兼家ノ來訪

ト＝カヽル、天延三年三月十五日ノ條＝收ム、かくて、その日をひまにて、又ものいみになりぬときく、あくる日こなたふたかりたる、又の日、今日をみむかしと思ふ心こすまなるに、夜ふけてみえられたり、ひとよのことゝもしか〳〵といひて、こよひたにとていそきつるを、いみたかへに、みな人ものしつるをいたしたてゝ、やかてみすてゝなむなと、つみもなくさりけもなくいふ、いふかひもなし、あくれは、しらぬところにものしつる人々、いかにとてなむとていにきぬ、それよりのちも七八日になりぬ、あかたあるきのところは、御せへ（ヰカ）なとあれは、もろともにとて、つゝしむところにわたりぬ、ところかへたるひなく、むま時許に、ゝはかにのゝしる、あさましや、たれかあなたのかくはあけつるなと、あるしもおとろきさわくに、ふとはひいりて、ひころれいのかうもりすゑて、おこなひつるも、にはかになけちらし、ずゝもまきにうちあけなと、らうかはしきに、いとそあやしき、その日のとかにてらして、またの日かへる、○中略、泊瀬詣ノコトヲ＝カヽル、下＝收ム、またの日もひるつかた、こゝなるにふみあり、御むかへにもとおもひしかとも、こゝろの御ありきにもあらさりけれは、ひむなくおほえてなん、れいのところにか、只今ものになとあれは、人

兼家ノ消息

々はや〳〵と、そゝのかしてわたりたれは、すなはちとみえたり、かうしもあるは、むかしのことを、たとしへなくおもひいつらんとてなるへし、○中略、相撲ノ饗ノ事＝カヽル、天祿二年七月二十七日ノ條＝收ム、三（八月）四日になりぬれと、おとなくて、あめいといたくふるひ、心ほそけなる山すみは、人とふものとこそきゝしか、さらぬは、つらき物といふ人もありとあるかへりことに、きこゆへき物とは、人よりさきにおもひよりなから、ものとしらせんとてなん、露けさはなこりしもあらしとおもふ給ふれと、よそのくもむらも、あいなくなんとものしけり、またもたちかへりなとあり、さて三日許のほとに、けふなんとてようさりみえたり、つねにしもいかなる心の、えおもひあへすなりにたれは、われからつれなけれは、人はたつみもなきやうにて、七八日のほとにそ、わつかにかよひたる、○中略、物詣ノ事＝係ル、下＝收ム、霜月もおなしことにて、廿日になりにけれは、今日見えたりし人、そのまゝに、廿（日脱カ）よりあとをたちてふみのみそふたゝひ許みえける、かうのみむねやすからねと、おもひつきにたれは、心よはき心ちして、ともかくもおほえて、ようか許のものいみしきりつゝなん、たゝいま今日たにこそおもふなと、あやしきまてこなかなる、はての月のとうか、

兼家ノ來訪

むゆかはかりなり、しはしありて、にはかにかいくもりて雨になりぬ、たうるゝかたならんかしとおもひいてゝなかむるに、くれゆくけしきなり、いといたくふれは、さはらむにもことわりなれは、むかしはと許おほゆるに、涙のうかひて、あはれにものゝおほゆれは、ねむしかたくて人いたしたつ、

かなしくもおもひたゆるかいそのかみさはらぬものとならひしものを

とかきて、いまそいくらんとおもふほとに、みなみおもてのかうしもあけぬとこころに、人のけおほゆ、人はえしらす、われのみそあやしとおほゆるに、つまとおしあけて、ふとはひいりたり、いみしきあめのさかりなれは、おともえきこえぬなりけり、とに御車とくさしいれよなと、のゝしるもきこゆ、なとしも月のかうしなりとも、けふのまゐりには、ゆるされなんとそおほゆるよしおほし、あすはあなたふたかる、あさてよりは、ものいみなり、すへかめれはなと、いとことよし、やりつる人は、ちかひぬらんとおもふに、いとめやすし、よのまに雨やみにためれは、さらはくれになとてかへりぬ、かたふたかりたれは、むへもなくまつに、みえすなりぬ、夜へは人のものしたりしに、夜のふけにしかは、きやうなとよませてなむとまりにし、れいのいか

兼家古袍ノ修理ヲ依頼ス

におほしけむなとあり、山こもりのゝちは、あまかへるといふなをつけられたりけれは、かくものしけり、こなたさまならてはかたもなとけしくて、

おほはこの神のたすけやなかりけむちきりしことをおもひかへるは

とやうにて、れいのひすきて、つこもりになりにたり、〇下略、追難ノコトニカヽル、天祿二年十二月三十日ノ條ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

〔かけろふ日記〕下

かくてまたあけぬれは、天祿三年といふめり、〇中略、四方拜ノコトニカヽル、天祿三年正月一日ノ條ニ收ム、十四日はかりに、ふるきうへのきぬこれいとようしてなといひてあり、きるつき〇解環本ヘキニ作ル、ひはなとあれと、いにきもおもはてあるに、つかひのつとめておそしとあるに、

ひさしとはおほつかなしやからころもうちきてなれんさてをくらせよ

とあるに、たかひてこれよりふみもなくてものしたれは、これかうよろしかめり、きをならぬかわろきとはかりあり、ねたさにかくものしけり、

わひてまたとくとさはけとかひなくてほとふるものはかくこそありけれ

とものしつ、〇中略、除目ノコトニカヽル、天祿三年正月二十二日ノ條ニ收ム、又つこもりのひ許に、なにことかある、さはかしうてなん、なとかおとをたにつらしなと、はてはいはん

兼家ノ來訪

兼家歸ル

ことのなきにやあらん、さかさまことそある、けふもみつからは、おもひかけられぬなめりとおもへは、かへりことに、御まへまうしこそ、御いとまひまなかへかめれと、あいなけれと許ものしつ、かゝれといまはものともおほえすなりにたれは、なか〳〵いと心やすく、よるもうらもなうゝちふしてねいりたるほとに、かとたゝくにおとろかれて、あやしとおもふ程に、ふとあけてけれは、心さはかしくおもふほとに、つまとくちにたちて、とくあけはやなとあなり、まへなりつる人々も、みなうちとけたれは、にけかくれぬ、みくるしさにねさりよりて、やすらひにたに、なくなりにたれは、いとかたしやとてあくれは、さしてのみまゐりくれはにやあらんとあり、きとか、あか月かたに、まつふく風のおと、いとあらくきこゆるこゝち、ひとりあかすよ、かゝるおとのせぬは、ものゝたすけにこそありけれとまてそきこゆる、あくれは二月にもなりぬめり、あめいとのとかにふるなり、かうしなとあけつれと、れいのやうに心あはたゝしからぬは、あめのするなめり、されとゝまるかたは、おもひかけられすと許ありて、をのことものはまいりにたりやなといひて、おきいてゝ、なよゝかならぬなをしゝをれよいほとなるかいねりのうちきひとかさねたれなから、おひゆるらかにて、あゆみいつるに、人々御かゆなとけしきはむめれは、れいくはぬものなれは、なにかはなにゝと心よけにうちいひて、たちとくよとあれは、大夫（道綱）とりて、すのこにかたひさつきてゐたり、のとかにあゆみいてゝみまはして、せさいをらうかはしく、やきためるかなとあり、やかてそこもとにあまかはは、りたるくるまさしよせ、をのことも、からたる（ほゐ）にてもたけたれは、ゝひのりぬめり、したすたれひきつくろひて、中門よりひきいてゝ、さきよいほとにおはせてあるも、ねたけにそきこゆる、ひころいとかせはやしとて、みなみおもてのかうしはあけぬを、げふかうてみいたしてと許あれは、あめよいほとにのとやかにふりて、にはうちあれたるさまにて、くちはところ〳〵あをみわたりにけり、あはれとみえたり、ひるつかたかへしうちふきて、はるゝかほのそらはしたれと、こゝちあやしうなやましうて、くれはつるまてなかめくらしつ、○中略、父倫寧ノ家ニ渡ルカヽル、上ニ收ム、すなはち、これかれさしあつまりて、いとあやしう打とけたりつるほとに、いかにこらんしつらんなと、くちくちいとほしけなることをいふに、まして見くるしきことおほかりつると、

兼家ニ對スル心持

おもふ心ちたにみにうしはてられぬるとおほえける、いかなるにかありけん、このこゝろ(行カ)の日、てりみくもりみ、いとはるさむかるとしとおほえたり、よるは月あかし、十二日(二月)ゆきたち、風にたくひてちりまかふ、むま時許よりあめになりて、しつかにふりくらすまゝ、したかひて世中あはれけなり、けふまておとなき人も、おもひしにたかはぬ心地するを、けふより四日かの物いみにやあらんとおもふにそ、すこしのとめたる、○中略、石山寺ノ法師、夢想ヲ送リ來ル

兼家ノ來訪

の物いみにやあらんとおもふにそ、すこしのとめたる、○中略、石山寺ノ法師、夢想ヲ送リ來ル

コト等ニカル、下ニ收ム、

れてたり(行カ)、三日かたあきぬとおもふをおとなし、よかもはやくれぬるを、○中略、火事ノコトニカル、天祿三年年末雜載ニ收ム、いりてうちふすほとに、さきおふものかとにとまる心地す、あやしときく程に、おはしますといふ、とほし火のきえて、はひいりにくらけれは、あなくら、ありつるものを、たのまれたりけるにこそありけれ、ちかき心ちのしつれはなん、いまはかへりなんかしと、いふ〳〵うちふして、よゐよりまゐりこまほしうてありつるを、をのことも〻みなまかりてにけけれは、えものせて、むかしならましかは、むまにはひのりてもものしなまし、なてうみにはあらむ、なにはかりのことあらはかはとて、きなんなとおもひつゝ、ねにけるを、かうの〻しりつれはいとおかし、あやしうこそありつれなと、心さしありけにありけり、あけぬれは、くるまなとことやうならんとて、いそきかへられぬ、六七日、物いみときく、八日あめふる、よるにていしのうへのこけくるしけにきこえたり、○中略、賀茂詣ノコトニカル、下ニ收ム、

兼家ノ消息

さて五六日許あり、十六日(閏二月)あめのあしいと心ほそし、あくれはこのぬるほとに、こまやかなる文見ゆ、今日はかたふたかりたりけれはなん、いかゝせんなとあへし、かへりことものして、と許あれは、みつからなり、ひもくれかたなるを、あやしとおもひけんかし、よにいりて、いかにみてくらをやたてまつらしなと、やすらひのけしきあれと、いとようないことなりなと、そゝのかしいたす、あゆみいつる程に、あいなう、よかすにはしもせしとすと、しのひやかにいふをきゝ、さらはいとかひなからん、ことよはありとかならすこよひはとあり、それもしるく、そのゝちおほつかなくて、八九日許になりぬ、かくおもひをきて、かすにはとありしなりけりとおもひあまりて、たまさかにこれよりものしけること、

かたときにかへしよかすをかそふれはしきのもろ羽もたゆしとそなく

兼家縫物ヲ依頼ス

かへりこと、

いかなれやしきのはねかきかすしらすおもふかひなきこゑになくらん

とはありけれと、おとろかしてもくやしけなるほとをなん、いかなるにかとおもひける、このころには、もはらにはなふりしきて、うみともなりなんとみへたり、けふは廿七日、あめ昨日のゆふへよりくたり、風のちはなをはらふ、三月になりぬ、このめすゝ(め脱カ)かくれになりて、まつりの比おほえて、さかき、ふえこひしう、いとものあはれなるにそへても、なとなにことを、猶おとろかしけるもくやしう、れいのたえまよりも、やすからすおほえけんな、なにの心にかありけん、此月七日になりにけり、今日そこれぬひて、つゝしむことありてなんとあり、めつし(し脱カ)けもなけれは給はりぬなと、つれなうものしけり、ひるほとより、あめのとかにはしめたり、○中略、石清水臨時祭ノコト等ニカヽル、天祿三年三月十日ノ條ニ收ム、人みて、おはしますといふにそ、すこし心をちゐておほゆる、さてこゝにありつるをのことものきこえつけつるになん、おとろきつる、あさましうこさりけるかいとほしきとなとある程に、と許になりぬれは、とりもなきぬと、きく〳〵ねにけれは、ことしも心ちよけならんやうに、あさい

兼家來ラズ

兼家ト音信ノ贈答

になりにけり、いまもとふ人にまたのゝしれ(ひも)はせて(ひき)名にてもしたり、さはかしうそなりまさらんとていそかれぬ、しはしありて、おとこのきるへきものともなと、かすあまたあり、とりあへたるにしたかひてなん、かみにまつとてありける、かくあつまりたる人にものせよとて、いそきけるは、(に力)いに(汚力)はかにひはたのすきいろにてしたり、いとあやしけれは見さりき、ものとひなとすれは、三人許やまひこと、くせちなといひたり、廿日(三月)はさてくれぬ、○中略、父倫寧ノ家ニ赴クコト等ニカヽル、上ニ收ム、かくてつこもり(四月)になりぬれと、人はうのはなのかけにも見えす、をとたになくてはてぬ、廿八日にそ、れいのひもろきのたよりに、なやましきことありてなとありき、○中略、五月節ノコト等ニカヽル、天祿三年五月五日ノ條ニ收ム、かきくらしてなみたこほるゝ、十日(五月)になりぬ、今日そ、たいふ(汚綱)につけてふみある、なやましきことのみありつゝ、おほつかなきほとになりにけるを、いかになとそある、かへりこと、又のひものするにそつくる、昨日はたちかへりきこゆへく、おもひたまへしを、このたよりならては、きこえんこもひなき心地になりにけれはなん、いかにとのたまはせたるは、なにかよろつことはりに思ひたまふるへきこゝろ(な脱カ)ねは、なか〳〵いと心やすくなん

兼家ノ來訪

なりにたる、風たにさむくときこえさすれは、ゆゝしやとかきけり、ひかれて、かもいつみ（泉）におはしつれは、御かへりもきこえてかへりぬといふ、めてたのことやとそ、心にもあらて、うちいはれける、〇中略、自然ニ對スル感興ノコト等ニカヽル、下ニ收ム、しはすの廿日あまりにみえたり、さてとしくれはてぬれは、れいのことして、のゝしりあかして、三四日（天延元年正月）もなりにためれと、こゝにはあらたまれる心ちもせす、うくひす許そ、いつしかおとしたるをあはれときく、五日許の程にひるみえ、又十よか、廿日許に人ねくたれたるほとみえ、この月そすこしあやしとみえたる、〇中略、除目ノコト等ニカヽル、天延元年正月二十二日ノ條ニ收ム、（延元）の程に、むまの時はかりに見えたり、おいてはつかしうなりにたるを、いとくるしけれと、いかゝはせん、とはかりありて、かたふたかりたりとて、わかそめたるともいはにほふ（ヲ脫カ）許のさくらかさねのあや、文はこほれぬはかりして、かたもんのうへのはかまつやつやとして、はるかにおひちらしてかへるをきゝつゝ、あなくるしいみしうもうちとけたりつるかなゝと、思ひてなりをうち見れは、いとうしほなえたり、かゝみをうち見れは、いとにくけにはあり、またこたひうしはてぬらんとおもふことかきりなし、かゝる

兼家ノ來訪ト近隣ノ火事

ことを、つきせすなかむるほとに、ついたちより、あめかちになりにたれは、いとゝなけきのめをもやすとのみなんありける、五日よ中許に、よの中さわくをきけは、さきにやけにしにくところ、こたみはおしなふるなりけり、十日許に、またひるつかたみえて、かすか（春日）へなんまうつへきほとの、おほつかなさにとあるも、れいならねは、あやしうおほゆ、〇中略、冷泉院小弓ノコト等ニカヽル、天延元年三月十五日ノ條ニ收ム、又かきたえて十よ日になりぬ、日ころのたえまよりは、ひさしき心ちすれは、また如何になりぬらんとそおもひける、〇中略、道綱、女ト和歌贈答ノコトニカヽル、寛仁四年十月十五日ノ條ニ收ム、かくて又廿よ日の程にみえたり、〇中略、火事ノコトニカヽル、天延元年正月二十四日ノ條ニ收ム、又つこもりの又日許にあり、はひいるまゝに、ひなとちかきよこそ、にきはゝしけれとあれは、ゑしのたくはいつもとみえたり、〇中略、道綱、女ト和歌贈答ノコトニカヽル、寛仁四年十月十五日ノ條ニ收ム、さてれいのものおもひは、このつきも時々おなしやうなり、廿日（五月）のほとに、とほうものする人にとらせん、このゑふくろのうちに、ふくろむすひてとあれは、むすふほとにいてきにたりや、うたをひとゑふくろいれて給へ、こゝにいとなやましうて、えよむましとあれは、いとをかしうて、の給へるものあるかきり、よみいれてたてまつるをりし

兼家餌袋ノ調製ヲ依頼ス

兼家下襲ノ調製ヲ依頼ス

もりやうせんにとふくるをそ給はましとものしつ、二日許ありて、心ちのいとくるしうても、ことひさしけれはなん、ひとへふくろといひたりしものをわひて、かくなんものしたりし、かへし、かう〳〵なと、あまたかきつけて、いとようさためて給へとて、あめもよにあれは、すこしなさけある心ちしてまちみる、おとりまさりはみゆれと、さかしうことわらんもあいなくて、かうものしけり、

こちとのみ風のこゝろをよすめれはかへしはふくもおとるらんかし

と許そものしける、○中略、兼家、妾近江ノ許ニ通フコト等ニカヽル、正暦元年七月二日ノ條ニ收ム、さて廿(九月)よ日にこの月もなりぬれと、あとたえたり、あさましさは、これしてとて、ふゆのもの、あり、御ふみありつるは、ゝやをちにけりといへは、おろかなるやうなり、かへりことせぬにてあらんとて、なにことゝもしらてやみぬ、ありしものともはしてふみもなくてものしつ、そのゝちゆめのかよひちたえて、としくれはてぬ、つこもりに、またこれしてとなんとて、はてはふみたにもなうてそ、したるさ(かカ)ねある、いかにせましと思ひやすらひて、これかれにいひあはすれは、なほこのたひはかり、心みにせよ、といみたるやうにのみあれはかと、さたむることありて、とゝめてきたなけなくして、(天延二年正月)ついたちの日、大夫(兼綱)にもたせてものしたれは、いときよくなりてなん、ありつるとてやみぬ、あさましといへはおろかなり、○中略、近親者ノ出産ノコト等ニカヽル、上ニ收ム、(天延二年正月)十五日、なひあり、大夫のさうしきのをのことも、なひすとてさはくをきけは、やう〳〵ゑひすきて、あなかまやなといふこゑきこゆる、おかしさに、やをらはしのかたにたちいてゝ、見いたしたれは、つきいとおかしかりけり、ひんかしさまにうちみやりたれは、山かすみわたりて、いとほのかに心すこし、はしらによりたちて、おもはぬやまなくおもひたれは、八月よりたえにし人、はかなくて、むつきにそなりぬるかしとおほゆるまゝに、なみたそ、さくりもよよにこほるゝまて、

もろこゑになくへきものをうくひすはむつきともまたしらすやあるらん　和歌集○玉葉

同ジ、萬代和歌集、初句、もろともに、ニ作リ、三句、鶯の、ニ作ル、

とおほえたり、○下略、養女ノ裳著ノコト等ニカヽル、下ニ收ム、學習院本、萩野本、解環本ヲ以テ校訂ス、

兼家ト和歌ノ贈答

〔道綱母集〕○宮内省圖書寮本　殿かれ給ひてのち、ひさしうありて、七月十五日ほにのことなと、きこえのたまへりつる所ことに、

かゝりけるこのよもしらすいまとてやあはれはちすのつゆをまつらん

こまくらへのまけわさとおぼしくて、しろかねのうり、わりこをして、院にたてまつらんとし給ふに、このけにうたんとて、攝政殿よりうたきこえさせ給へりけれは、

ちよもへよたちかへりつゝやましろのこまにくらへしうりのすへなり

とのかれ給てのち、かよふ人あへなしなときこえ給ひけれは、

いまさらにいかなるこまかなつくへきすさめぬくさとのかれにしみを

〔後拾遺和歌集〕十四戀四　女のもとにつかはしける、　入道攝政

我こひは春のやまへにつけてしをもえても君のめにもみえなむ

返し　大納言道綱母

春の野につくる思ひのあまたあれはいつれをきみかもゆるとか見ん

おなし女に　入道攝政

春日のは名のみなりけり我身こそとふひならねともえわたりけれ

〔新千載和歌集〕十九哀傷歌　わつらひ侍りける頃、せをそこもなくて、忘りて後、法成寺入道前攝政のもとより、音つれて侍りけれは、よみて遣しける、　右近大將道綱母

深草の野邊の烟となりにせは何れの雲を分きて訪はまし

〔かけろふ日記〕下　○上略、兼家トコトニカヽルヽ消息贈答ノ上ニ收ム、かく（天祿三年）はあれと、たゝいまのことくにては、ゆくすゑさへ心ほそきに、たゝひとりをとこにてあれは、としころもこゝかしこにまうてなとするところには、このことを申つくしつれは、いまはましてかたかるへきとしよはひになりゆくを、いかにいやしからさらん人の、をんなこ一人とりて、うしろみもせん、ひとりある人をもうちかたらひて、わかいのちのはてにもあらせんと、この月ころおもひたちて、これかれにもいひあはすれは、（兼家）とのゝかよはせたまひし源さい將（相下同ジ）（兼忠）かねたゝとかきこえし人の御むすめのはらにこそ、女きみいとうつくしけにて、ものしたまふなれ、おなしうはそれをやは、さやうにもきこえさせ給はぬ、いまはしかのふもとになんかのせうとのせんしのきみといふに、（志賀）つきてものし給なるなと、いふ人あるときに、（く脫カ）そよやさる事ありきかし、こやうせい院の御のちそかし、さい將なくなりて、又ふくのうちに、れいのさ（陽成）

源兼忠ノ女ノ子ヲ養女トス

養女ノ素姓

やうのこと、きゝすくされぬ心にて、なにくれとありしほとに、さめりしことそ、人はまつその心はへにて、ことにいまめかしうもあらぬうちに、よはひなともあうよりにたへけれは、女はさらんとておもはすやありけん、されとかへりことなとすめりしほとに、みつからふたたひ許なともしして、いかてにかあらん、ひとへきぬのかきりなんとりてものしたりし、ことゝもなともありしかとわすれにけり、さていかゝありけむ、

せきこえてたひねなりつるくさまくらかりそめにはたおもほえぬかなとか、いひやり給はめりし、なほもありしかはかへりこと〳〵しうもあらさりき、

おほつかなわれにもあらぬくさまくら又こそしらねかゝるたひねはとそありしを、たひかさなりたるそあやしきなと、もろともにとそわらひてき、のち〳〵しるきこともなくてやありけん、いかなるかへりことにか、かくあめりき、

おきそふる露によな〳〵ぬれこしはおもひのなかにかはく袖かはなとあめりし程に、ましてはかなうなりはてにしを、のちにきゝしかは、あ

養母ニ女兄ノ僧ノ異事ヲ謀ルニ

りしところに、女こうみたれり、さそとなんいふなる、さもあらん、こゝにとりてやは、おきたらぬなとのたまひしそれなゝり、させんかしなといひなりて、たよりをたつねてきけは、この人もしらぬおさなき人は、十二三のほとになりにけり、だゝそれひとりを、みにそへてなん、かのし(志気)かのひむかしのふ本にうみをまへにみ、しかの山をしりへにみたるところの、いふかたなう心ほそけなるに、あかしくらしてあなるときゝて、みをつめは、なに(難波)には のことを、さるすまひにて、おもひのこし、いひのこすらんとそ、まつおもひやりける、かくてことはらのせうとも、穴ふ(生)にてほうしにてあり、こゝにかくいひいたしたるひとしりたりけれは、それしてよひとらせてかたらはするに、なにかはいとよきことなりとなんおのれはおもふ、そも〳〵かしこにまほり(のカ)てものせん、よのなかいとはかなけれは、いまはかたちをもことになしてんとてなん、さゝ(まカ)のところに、つきこゝろ(行カ)はものせらるゝなといひおきて、又のひといふはかりに、山こえにものしたりけれは、ことはらにてこまかになとしもあらぬ人の、ふりはへたるをあやしかる、なにことによりてなとありけれは、とはかりありて、此ことをいひいたしたりけれ